

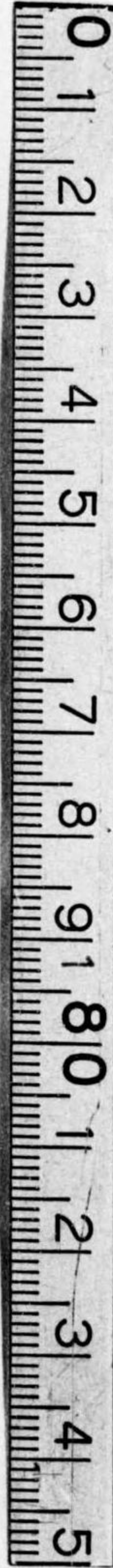
123.83-H97ウ



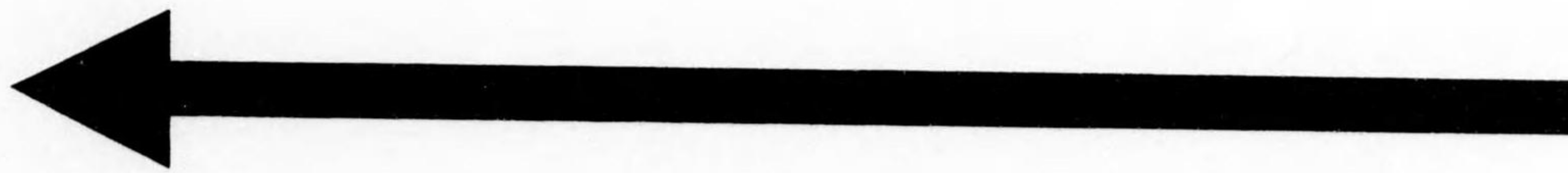
1200500725724

1238

7



始



新譯論語正誤表

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|----|----|---|---|
| 三 | 六 | れた故、兩親 | れた故、兩親 |
| 二 | 二 | 西洋紀元五 | 西洋紀元前五 |
| 一四 | 一 | た、ことに | たことに |
| 二四 | 六 | 堯舜の | 堯の |
| 三五 | 三 | 一時腹の立ち | 一時の腹立ち |
| 四四 | 二 | 陳桓 | 陳桓 |
| 五二 | 七 | が、さも | が、さも |
| 五二 | 八 | ヲ仁ト爲 | ヲ仁ト爲 |
| 五二 | 一〇 | レバ <small>オキキ</small> ス <small>マシ</small> ナ <small>マシ</small> | レバ <small>オキキ</small> ス <small>マシ</small> ナ <small>マシ</small> |
| 五六 | 九 | 窮 <small>マシ</small> 祖 <small>マシ</small> | 陋 <small>マシ</small> 窮 <small>マシ</small> 祖 <small>マシ</small> 楊 |
| 五三 | 一 | 言うや | 言うやう |
| 五三 | 五 | のあら | のあらう |
| 五三 | 六 | 避ける | 避ける者 |
| 五七 | 二〇 | ん。ど | ん。どう |
| 五七 | 二 | まぢが | まぢがつ |
| 五七 | 三 | する、 | する、と |
| 五八 | 一 | クニ徳 | クニ先徳 |
| 五八 | 六 | のは。謂は | のは。謂は |
| 五三 | 一〇 | 人較永遠 | 人類永遠 |

6

123.83
H97

穗積重遠著



新譯論語



財團法人 社會教育協會

Small handwritten marks or characters on the right page.

989
181

叔 母 父 祖
父 父

阪 穂 穂 澁
谷 積 積 澤

芳 歌 陳 榮
郎 子 重 一

の
靈
前
に
捧
ぐ



橋山筆孔子像

藤崎小竹孔子像贊

道與天地比大德與日月
同明生於前陳蔡不足為厄
身後帝王不足為榮軍我
謂賢於堯舜子貢有若謂
生民未有而並子則謂集大
成吾儕小人嗚呼豈能得而
名而身哉

天保十二年辛丑秋八月

長谷菴崎村謹題

曾子曰可以託六尺之孤可以
寄百里之命臨大節而不可奪
也君子人與君子人也
曾子曰士不可以不弘毅任重
而道遠仁以為己任不亦重乎
死而後已不亦遠乎
子曰興於詩立於禮成於樂
子曰民可使由之不可使知之

任重而道遠

書湖東田藤

目次

| | |
|-------|----|
| はしがき | 三 |
| 論語と孔子 | 一〇 |
| おぼえがき | 一五 |
| 學而第一 | 一九 |
| 爲政第二 | 二五 |
| 八佾第三 | 二七 |
| 里仁第四 | 二五 |
| 公、長第五 | 二六 |
| 雍也第六 | 二五 |
| 述而第七 | 一六 |
| 泰伯第八 | 二三 |
| 子罕第九 | 二四 |
| 鄉黨第十 | 二六 |

目

次

一

| | | |
|--------|-------|-----|
| 先進第十一 | | 二九 |
| 顔淵第十二 | | 三〇 |
| 子路第十三 | | 三一 |
| 憲問第十四 | | 三六〇 |
| 衛靈公第十五 | | 三九三 |
| 季氏第十六 | | 四一九 |
| 陽貨第十七 | | 四七七 |
| 微子第十八 | | 四九二 |
| 子張第十九 | | 五〇四 |
| 堯曰第二十 | | 五〇六 |
| あとがき | | 五三二 |
| 格言熟語索引 | | 五七一 |

撰 藤田東湖筆 孔子畫像
 撰 藤田東湖筆 「任重而道遠」
 撰 藤田東湖筆 論語本の一葉

はしがき

漢學者でない、儒教の専門家でない、いはんや道德家ではもちろんない私が、論語の講釋をし、しかもそれを公けにしようとは、何たる身のほど知らぬ大それた思ひ立ちかと、おさげすみも恥かしい次第だが、これには多少の個人的理由がある。

祖父の澁澤榮一が「論語と算盤」を標語としたほどの大の論語信者だったことは相當有名だが、まだ子供だった私に一冊の「ポケット論語」を呉れた故、両親に教はり教はりポツポツ讀んで見た。もちろんわかるはずもなかつたが、それでもむづかしい漢字を讀むことに子供らしい誇りを感じたものだ。そのうち中學上級生・一高生・大學生と進むにつれて、すこしづつはわかつて行くやうな氣持がし、だんだんと興味を感じ出した。大學生の時だったか、祖父が誰か先生を御頼みして息子たち孫たちと一緒に論語の講義を聽かうと言ひ出したので、大賛成をすると同時に、古くさい儒者先生では居眠が出るから若い先生にしてくださいといふので、當時洋行歸りの少壯學者だった宇野哲人先生を御頼みしたが、講義が非常に面白く、先生が若いものだから皆が遠慮なく脱線的な質問や反對論を持ち出し、相當年月はかかつたが、たうとう論語全部を卒業して孟子にうつつた所

で、私は留學に出かけてしまつた。在外中も「ポケット論語」は標題通りに取扱つて肌身はなさず、繰りかへし讀んだものだが、西洋で讀むと又違つた感銘があつた。そして以前にも妹や弟をつかまへて宇野先生受賣りの講義を試みたこともあつたが、大正五年の歸朝以來は、若いとこたちから始めて、甥、姪、それからうちの子供らと、少年少女相手に何度となく家庭的論語講義をした。もちろん話手はしろうと聞手は子供のこと故、素讀を主にして「讀ンデ字ノ如キ」大意の説明にとどめ、字句の末に引つかからず大股にあるだけだが、其際次の諸點は留意し且つ實行した。

第一には必ず全二十篇をやりとげること。昔から「公冶長論語に須磨源氏」といつて、源氏物語を讀んだといふが實は五十四帖中の第十二帖須磨あたりまで、論語の講義は「公冶長第五」でおしまひ、といふのがまづ普通のやうだが、それでは氣持がわるいから、始めた以上は必ず「堯白第二十」まで漕ぎ附けることにした。

第二に古くさいといふ感じを起させぬこと。すなはちできるだけ實際生活及び時事問題に結びつけて話をし、論語を過去の死道徳とせず現代の活教訓たらしめることにとめた。そしてなるべく面白く話すやうに氣をつけた。よみ方や解釋について説がわかれてゐる場合には、どちらが面白い

か、を標準にして採否をさめた。又必ずしも同じテンポでなく、少々あやしい所は頬かぶりでセツセと通り抜け、興に乗れば横道にはいり道草を食つた。

第三には論語を孔子一代記と見ること。すなはち個々の断片的訓言とせず、できるだけ人間味ある背景を附けて一貫性をもたせ、孔子の人物と弟子たちの性格とを浮きあがらせるやうに話したつもりだ。さうすると子供たちは「孔子様」に親しみを感じ、又御弟子たちのうちで誰がすき、などといふ。大賢は愚なるが如き顔回や、日々三省の曾參などよりも、勇敢卒直、時々脱線して先生にしかられる子路の方が、子供たちに共感をもたれるやうだ。

第四には文章のよさを味はせること。原文の妙味はもちろんわからないが、日本流に讀みくだして見ても、論語は實に名文だ。そこでなるべく口調のいいよみ方を選んで音讀し又音讀させる。書物の扱ひに三通りある、「モクドク」「オンドク」「ツンドク」だ、といふ冗談があるが、論語などは、「ツンドク」では價にもならぬこともちろんとして、初學は「オンドク」に限る。少々近所迷惑かも知れぬが、繰りかへし音讀してゐる間に、いはゆる「讀書百遍意オノツカラ通ズ」で、一言一句の難解を超越して意味がスツカリわかつたやうな氣持になるから妙だ。

かくして何回「學ンデ而シテ」から始めて「以テ人ヲ知ルコト無キナリ」に終つたか知らないが、讀むたび讀ませるたびに常に新たな氣持がして、今一度讀みたい今一度讀ませたいが募つたとだ

そこへ來たのが昭和二十年三月十日だ。此日午前一時、五十五年來住みなれた牛込の家は、焼夷彈幾十本の雨下集注にあつて、アツと言ふまに一團の火となつた。そして防火書庫在中の法律書を除いては、二代菟集の一切の藏書が形もとどめぬ灰となり終つた。かくてさしも澤山有つた古本、新本、和本、唐本、朝鮮本の論語各種が、かの記念の「ポケット論語」をはじめとして、一冊も手元に残らなかつた。それが何よりもさみしいので、罹災後第一回の外出の際、論語を含む「經典餘師」と簡野道明先生著「論語解義」との二部を買つて來た。そして戦災後に迎へたせがれの嫁に、これが穂積家の家風だとばかり、こちらは公務のみま、あらは家事のすきに、「經典餘師」をキスト「論語解義」を教師用書として、ホツホツと教へてゐたのが、ちょうど罹災一週年の昭和二十一年三月十日に講了した。敗戦日本危急存亡の間に讀み返して見ると、又特別の感慨に打たれたことだ。そして又同じころ、同年一月に出た谷川徹三氏の「讀書について」(日本叢書第四十號)を最大の感銘を以て讀んだ。殊に左の一段には、私自身が書いたのではないかといふ錯覺を起すほどの共鳴を感じた。一つ其箇所を引用させていただかう

「私は高等學校の時分に安井小太郎先生に論語を教はりました。私は論語といふ書物はそれまでカビの生えたつまらない書物であると思つてゐたのでありますが、この時初めて立派な書物であるといふことが分つた。それに親しみをもつた最初は、中にかういふ言葉があつた「子の燕居するや、申申如たり天天如たり」孔子が平常家にある時は如何にも伸び伸びとしてゐたといふ意味であります。この言葉で今まで遠くにゐた孔子が急に自分に親しくなつて來たのであります。それから私は論語の中の言葉を少しづつ自分流に讀んで見た。それはいづれも實に長い間の地下の營みによつてできた堅い結晶である。その結晶の堅さ、そしてその結晶面の美しさ、それがだんだん分つて來たのであります。しかしそれから十年位経つて見ると、その時分自分が分つたと思つたのはまだ本當に分つてゐたのではないと考へるやうになつた。更に又十年位経つて見ると、その前以前より分つたと思つたのもまだ本當には分つてゐたのでないと考へずにはゐられない。かうして今日に至つてゐるのであります。私は今でも時々これを取り出して一句二句と讀んでゐる。さうして讀む度毎に何かと思ひあたるところがあり、新しい發見をするのであります。」

ところでこれだけは戦災が意外の幸福になつて、目下焼跡の一隅に残つた小さな持家と其側に造つたバラックとに、私と妻伸子・せがれ重行と妻玲子・長女夫婦なる八十島義之助同和歌子と長男義純・次女夫婦なる岩佐潔同美代子の四夫婦と赤ん坊一人が賑かにも楽しい共同生活をしてゐる次第だが、生まれて半年餘の初孫の顔を見てゐて、此子に論語が讀ませてやれるかな、とふと思つ

た。孔子も「十有五ニシテ」と言はれたからもう十四五年、そのくらゐまでは生きられさうなものと慾ばつてもゐるが、だんだんと後續部隊も出来ることだから、一つ「おぢいさん」になつた記念に、自分が「おぢいさん」から授かつた家庭的論語を、現在及び將來の孫たちのために書いて置かうか、と思ひ立つた。そこで大體今まで口で話した通りに、まづ本文を日本讀みにして、カナまぢり文に書きください。日本讀みは必ずしも一定してゐるわけではないが、江戸時代からの讀み癖もあること故、原則としてそれに従ひ、又前述の通りなるべく口調のよいのを選んだ。そして字句についての多少の説明をするが、こまかいせんさくはしない。次に現代語譯をする。必ずしも逐字譯ではなく、原文の簡潔を害することは我慢して、多少説明的に引きのばしたが、あまりくだくだしくはならぬやうに注意した。そしてそれに補足的の説明を加へることもあり、時には餘興的の雜談をもさしはさむ。大體さやうなていさいに書いて見た。

かやうな次第で、はじめは清書して家にのこすだけのつもりだったが、原稿がともかくも出來て見ると、そこは凡人、活字にといふ慾が出る。しかし印刷出版の至難な現状を考へてためらつてゐたところ、小松謙助君が其刊行頒布を財團法人社會教育協會の事業にしたいと熱心に言ふ。社會教育協會は小松君と私とが大正十四年の創立以來二十有餘年眞に「七ころび八起き」の苦勞を共にし來つた事業であるが、昭和二十年八月に私が身に餘る大役を拜したため此會の實務から手を引き、

小松君に一切を背負はせた義理もあつて、もしもこれが其會の事業として日本再建の土臺たる道義の振興に多少の御役に立ち得るならば、私としても本懐至極だと考へ、且は私共が會長と仰いで此會を創立し薨去に至るまで熱心に指導された故阪谷芳郎子爵も亦孔子と論語との崇拜者なりしことを思ひ、小松君の申出を快諾して萬事を一任した。かくて「家庭論語」が「家庭外」へ出ることになつた始末だが、もともと「我が家ノ家法人知ルヤ否ヤ、兒孫ノ爲メニ美田ヲ買ハズ」ぐらゐの軽い氣持で書いたもので、全く「めくらへびにおぢぎる」素人藝、これこそ文字通りの其「愚ヤ及ブベカラズ」と笑つていただきたい。元來の原稿には「庭訓論語」と標題した。成り立ちには一番相當するのだが、世間に出るとすると、すこしどうかとも思はれる。そしてこれは甚だ失禮な申分だが、今の若い人たちは「ライキン」とよんでくれさうもない。そこで「新譯論語」と標題することにした。しかしこの「新」は「アタタニ」といふだけの意味で「アタラシイ」といふのではない、すなはち今までの舊説に對する新説だといふやうな不遜な氣持ではない、といふことを、念のためおことはりして置く。そして、あくまでも「講壇論語」ではなくて「家庭論語」だ、といふことを御承知願ひたい。

論語と孔子

大學・論語・中庸・孟子のいはゆる「四書」は、いづれも孔子を因縁とする一連の儒教基本教典だ。大學は「孔子ノ遺書」とあり、論語は孔子の言行録、中庸は孔子の血縁の孫にして又學統の孫（孔子の門人曾子の弟子）なる子思の作、孟子は子思の門人の弟子孟訶の論であるが、其中でもわれ／＼日本人に一番親しまれてゐるのは、論語である。其編者及び年代についてはいろいろ議論があるが、せんさく立てはやめにして、孔子の言行を門人たちが書き留めて置いたのを、孔子の歿後に持ち寄り、其又門人たちが編纂したものらしい、といふぐらゐにして置かう。秦の始皇帝が「書ヲ焚キ儒ヲ坑ニシ」た時に滅失したが、其後孔子の舊宅の壁の中に塗りこめられてゐたのを發見した、といふ傳説がある。我國への傳來は、應神天皇の十六年百濟の博士王仁が「千字文」と共に持參献上し、皇子菟道稚郎子に御教へした、といふことになつてゐる。その事實はなほ問題としても、事によつたらモット古くから傳はつてゐたかも知れず、仁徳天皇と菟道稚郎子とが御位を譲りあはれた物語などは、論語が褒める伯夷叔齊の故事の御實行ではなかつたか、といふやうな感じもする。徳川時代に至つて大に行はれ、「論語讀みの論語知らず」などといふ誰でも知つてゐる諺まで出來た。そして本家本元の支那では、孔子の教もだんだんと形式に流れ、國民革命以來は新人からはむしろ排斥されてゐるやうで、孔子自身が「道行ハレズ、桴ニ乗リテ海ニ浮バン」となげかれたと同様に、論語も海に浮び日本に渡つてそこに永遠の生命を見出したもの、と考へてはいけないだらうか。ところで今日の民主的革新のためにこの永遠の生命が断ち切られては残念な事だ。私は論語・孟子は一方には君主的であり他方では民主的な教だと考へてゐる。君主と民主とをいかに兩立せしめ調和せしむべきかが根本問題たる新生日本の發足に當つて、私は今一度新しい眼で論語と孟子とを読みなほしたいと思ふ。

さて次は孔子の傳だが、これは論語の歴史的背景といふ意味から、一通り述べて置くがよからう。流布本論語には巻頭に「論語序説」が附いて居り、そこに史記孔子世家の要領が書いてある故、ここに右序説の全文を讀み下しにして掲げよう。文中カッコではさんだ數字は原文にあるのではなく、本書で論語毎章に附けた番號であつて、傳記の其部分に關する記事が論語の其章に出てゐるといふことを示すためにはさんだのだが、これを見ても前に申した「論語は孔子一代記」といふことが、なるほどどうなげようと思ふ。其他カッコ内はいづれも私の挿入。

論語序説

史記世家ニ曰ク、孔子名ハ丘、字ハ仲尼、其先ハ宋ノ人。父ハ叔梁紇、母ハ顏氏。魯ノ襄公ノ二十二年（我紀元一〇〇年）綏靖天皇三一年、周靈王二二年、西洋紀元五五一年、約二五〇〇年前）庚辰十一月庚子、孔子ヲ魯ノ昌平郷陬邑ニ生ム。兒トシテ嬉戲スルニ、常ニ俎豆（祭具）ヲ陳ネ、禮容ヲ設ク。長ズルニ及ビテ委吏（貯藏配給係）トナリ、料量平カナリ。司職吏（牧畜係）トナリ、畜蕃息ス。周ニ適キ、禮ヲ老子ニ問フ。既ニ歸リテ弟子マラス進ム。昭公ノ二十五年甲申、孔子年二十五、昭公齊ニ奔リ、魯亂ル。ココニ於テ齊ニ適キ、高昭子ノ家臣トナリ、以テ景公ニ通ズ（一六〇・二八九）。公封ズルニ尼谿ノ田ヲ以テセントス。晏嬰可ズ、公コレニ惑フ（四六〇）。

孔子ツヒニ行ル。定公ノ元年 壬辰、孔子年四十三、季氏強僭シテ、其臣陽虎亂ヲナシ政ヲ専ラニス。故ニ孔子仕ヘズンテ退キ、詩書禮樂ヲ修ム。弟子イヨイヨ衆シ。九年庚子、孔子年五十一、公山不狃費ヲ以テ季氏ニ畔ク。孔子ヲ召ク。往カント欲シテツヒニ行カズ(四三六)。定公孔子ヲ以テ中都ノ宰トナス。一年ニシテ四方コレニ則ル。ツヒニ司空トナリ、又大司寇トナル。十年辛丑、定公ヲ相ケテ齊侯ト夾谷ニ會ス。齊人魯ノ侵地ヲ歸ス。十二年癸卯、仲由(子路)ヲ季氏ノ宰トナシ、中都ヲ墮テ其甲兵ヲ收メシム。孟氏成ヲ墮ツコトヲ肯ゼズ、コレヲ圍ンデ克タクズ。十四年乙巳、孔子年五十六、相ノ事ヲ攝リ行フ。少正卯ヲ誅シ、國政ヲ與リ聞ク。三月ニシテ魯ノ國大ニ治マル。齊人女樂ヲ歸リ、以テコレヲ沮ム。季桓子コレヲ受ケ、郊(天ヲ南郊ニ祭ル)シテ饋俎(祭祀ノ餘肉)ヲ大夫ニ致サズ。孔子行ル(四六)。衛ニ適キ、子路ノ妻ノ兄顔淵鄒ノ家ニ主ル。陳ニ適キ匡ヲ過グ。匡人以テ陽虎トナシテ之ヲ拘フ(二二〇・二二五・二七五)。既ニ解ケ、衛ニ還ル。蘧伯玉ノ家ニ主ル。南子ヲ見ル(一四五)。去リテ宋ニ適ク。司馬桓魋コレヲ殺サント欲ス(一六九)。又去リテ陳ニ至リ司城貞子ノ家ニ主ル。居ルコト三歲ニシテ衛ニ反ル。靈公用フルコト能ハズ(二〇五・三一・三七一)。晋ノ趙子ノ家臣佛肸中牟ヲ以テ畔キ、孔子ヲ召ク。孔子往カント欲シテ亦果サズ(四三八)。マサニ西シテ趙簡子ヲ見ントス。河ニ至リテ反ル。又蘧伯玉ノ家ニ主ル。靈公陳ヲ問フ。對ヘズンテ行リ、復タ陳ニユク(三七六)。季桓子卒ス。遺言シテ康子ニ謂ヒ、必ズ孔子ヲ召カシム。其臣之ヲ止ム。康子スナハチ冉求ヲ召ク。孔子 及ビ葉ニユク(一六五・三二〇)。楚ノ昭王マサニ書社ノ地ヲ以テ孔子ヲ封ゼントス。令尹子西可カズ。スナハチ止ム(四六一)。又衛ニ反ル。時ニ靈公スデニ卒ス。衛君輒孔子ヲ得テ政ヲ爲サント欲ス(一六一・三〇五・三〇九)。而シテ冉求季氏ノ將トナリ、齊ト戰ヒテ功有リ。康子スナ

ハチ孔子ヲ召ク。而シテ孔子魯ニ歸ル。實ニ哀公ノ十一年丁巳ニシテ、孔子年六十八ナリ(三五・三六・二九六・二九七)。然レドモ魯ツヒニ孔子ヲ用フルコト能ハズ。孔子モ亦仕ラ求メズ。スナハチ書傳禮記ヲ叙シ(三九・四九・五四)、詩ヲ刪リ樂ヲ正シ(六三・二一九)易象繫象・說卦文言ヲ序ス(一六三)。弟子ケダシニ千、身六藝ニ通ズル者七十二人ナリ。十四年庚申、魯西狩シテ麒麟ヲ得タリ。孔子春秋ヲ作ル。明年辛酉、子路衛ニ死ス(二一六・五)十六年壬辰、四月巳丑、孔子卒ス。年七十二。魯城ノ泗上(泗水ノホトリ)ニ葬ル。弟子皆心喪ニ服スルコト三年ニシテ去ル。タダ子貢ハ家上(墓邊)ニ廬スルコト凡ソ六年ナリ。孔子鯉字ハ伯魚ヲ生ム。先ニ卒ス。伯魚 伋字ハ子思ヲ生ム。中庸ヲ作ル。

何氏曰ク、魯ノ論語ハ二十篇ナリ。齊ノ論語ハ別ニ問王・知道有リテ、凡ソ二十二篇ナリ。其二十篇中、章句頗ル魯論ヨリ多シ。古論ハ孔氏ノ壁中ヨリ出ヅ。堯曰ノ下章子張問ヲ分チテ以テ一篇ト爲ス。兩子張有リ。凡ソ二十一篇ニシテ、篇次齊・魯論ト同ジカラズ。

程子曰ク、論語ノ書有子・曾子ノ門人ニ成ル。故ニ其書獨リ二子ノミ子ヲ以テ稱ス。

程子曰ク、論語ヲ讀ムニ、讀ミ了リテ全然事無キ者有リ。讀ミ了リテ後其中一兩句ヲ得テ喜ブ者有リ。讀ミ了リテ後コレヲ好ムコトヲ知ル者有リ。讀ミ了リテ後直ニ手ノコレヲ舞ヒ足ノコレヲ踏ムヲ知ラザル者有リ。

程子曰ク、今ノ人ハ書ヲ讀ムヲ會セズ。未ダ讀マザル時コレ此等ノ人。讀ミ了リテ後又タダコレ此等ノ人。スナハチコレカツテ讀マザルナリ。

程子曰ク、頤十七八ヨリ論語ヲ讀ミ、當時スデニ文義ヲ曉レリ。コレヲ讀ムコトイヨイヨ久シクシテ、タダ意味

ノ深長ナルヲ覺ユ。

さて孔子墳墓の地なる山東省の曲阜きんぐふをはじめ、中華民國及び朝鮮の諸地に「聖廟」とか「聖堂」とかいはれる孔子の廟があるが、東京のは湯島の聖堂である。これは徳川綱吉が建立したもので、そこに幕府の學問所が設けられ、孔子の出生地にちなんで「昌平饗」と稱し、其前の橋、すなはち御茶水橋と萬世橋との中間の橋は、今でも昌平橋の名をとどめてゐる。明治になつてから高等師範學校の構内になり、私は其附屬中學校の生徒だったので、聖堂の本殿たる大成殿が修身の教室であり、又卒業式もそこで擧げられた次第、やはり其當時から孔子様に御縁があつたものと見える。大正十二年の震災で焼失したが、其後元通りの外形の鐵筋コンクリート造に復興され、今度は幸に震災をまぬかれた。今でもあの邊を通つて特徴ある大屋根を仰ぐごとに、神妙に修身の講義をさいたこと、それがすんですぐの休みの時間に「聖堂の森」で蝙蝠をとつて遊んだこととの、矛盾した二つの思ひ出がなつかしくよみがへる。

おぼえがき

「新譯論語」の趣旨と體裁は前に大體述べたが、これを印刷出版するについて、讀者に了解していただきたいことを數箇條書きつけて置かう。

一 まづ以て了解を得たいのは、本書が學術書でなく、又漢學漢文そのものを教へる目的のものでない、といふことである。従つてこれを書くにも、戦災後の書架貧弱の理由もあるが、數多き論語註釋書をひろく参考としたとらふわけではならぬ。執筆の机上にならべた書物は

朱熹 撰 論語集註

國譯漢文大成

斯文會編 論語正文及び國譯

簡野道明著 論語解義

宇野哲人著 論語新釋

ぐらゐなもので、本書は、數ヶ所の自己流の外は、結局これらのいづれかからの受賣だが、一々出所を示さなかつた。又、和漢學者の註釋を引用する場合にも、ほとんどすべてが、「孫引き」で、一々學者や、書物の名をかかげ

るのも気がさす故、支那のは從來は「新註」となつてゐる朱子の註をも含めてすべて「古註」とし、我國のは學者の姓名だけにして書名を出さなかつた。

二 原漢文をかかげようかどうかといふことは、だいたい思案したが、漢文教科書でないといふことが一つと、なるべく印刷の手数をばさぎ頁數をふやしたくないのが一つとで、制愛することにした。

三 文章はできるだけやさしくすることを心がけた。もともと子供に話したもので、其調子をのこして「子曰」を「孔子様がおつしやるやう」と譯するといふ風にした。文章は「カナまじり文」よりもむしろ「漢字まじり文」たるべし、「目の文章」すなはち讀まなければわからない文章でなく、「耳の文章」すなはち聞いてわかる文章にせよ、といふのが私の持論なので、本書も其方針で書いたが、何分にも原漢文の本文や引用文があるので、漢字制限も徹底させ得ないし、又あまりに徹底させると原文の感じを害する。それで「書きくだし」の部分については多少の苦心をしたが、大體に於て名詞・動詞・形容詞などは漢字、副詞・助詞・接續詞などはカナ、といふ標準にした。漢文には文字の使ひ分けがあつて、それが微妙な意味の差をあらはすこともあるが、日本よみにすると同じ言葉になつて、文字を變へて見ても大した意味をなさぬことがある。たとへば（この「たとへば」からが漢字なら「譬」か「例」かだが）我・吾・予と書きわけて見ても結局「ワレ」であり、同時に又「ワレ」だか「ワガ」だかわからぬことも起つて來るから、「ワレ」とか「ワガ」とかカナで書くことにした。しかし必らずしも構子定規にはせず、たとへば「此」「其」などは其場の都合で本字にしたりカナにしたりした。カナヅカヒについても、一應考へて見たが、引用文もあること故、しばらく「歴史的カナヅカヒ」に従ひ、漢字の發音を書く場合大體「字音カナヅカヒ」とし、それもカとクワ・イとキを書きわけるほど嚴格にはしなかつた。

四 論語の各訓言すなはち章の切り方は、學者によつて多少異り、従つて全編の章數にも端數の相違が出て來るが、私は四百九十六章に切り、章を追つて上欄に番號を附けた。参照及び索引の便宜のためである。

五 卷末に「格言熟語索引」を附けた。これは全部的な字句索引・事項索引ではなく、「義ヲ見テセザルハ勇無キナリ」といふやうな格言と、「三省」といふやうな熟語との索引であつて、今日の會話・演説・文章などに用ひられてゐる格言や熟語が相當に論語から出てゐることを示し、それがどこにあるかをさがす便宜のためである。そして私は、これら論語の文句が日常われわれの口や筆にのぼるやうになることを望んでゐる。

六 卷頭に寫眞三葉を掲げた。其一是、椿椿山筆篠崎小竹贊「文宣王之像」である（文宣王は孔子の追號）。先代遺愛の家藏であるが、幸に焼け残つた。其二是、藤田東湖筆「任重而道遠」の大書。其三是、澁澤榮一筆蹟論語本の一葉。此兩者については本文に書いた（一九一）。

七 表紙及び扉の標題は論語學の權威武内義雄博士に書いていただいた。なほ校正の段階になつてから同博士譯註の岩波文庫本論語を手に入れた故、出來得る限りの参照利用を試みた。

學而第一

論語二十篇、各篇共第一章初句の二文字又は三文字を取つて「何々第何」と標題する。そして、元來が訓言集言行録で、論理的組織的にならべたものではないが、各篇に多少の重點があり傾向がある。「學而第一」は主として、學問をするにはまづ根本として身を修めることをつとむべきだ、といふ教訓であつて、これを第一篇に置いたのは、至極適當な編纂と思はれる。私は昭和二十年八月十日思ひも寄らず東宮大夫兼東宮侍從長といふ大任を拜し、ただちに當時奥日光湯元に御滯在中の

皇太子殿下の御側に參上し、八月十五日正午の終戰大詔御放送を侍立拜聴するといふ歴史的な御奉公始めをした次第であるが、其後内外人からしきりに今後の御教育の大方針を問はれるのに對して、常に「天子ヨリ庶人ニ至ルマデ壹ニコレ皆身ヲ脩ムルヲ以テ本トナス」といふ「大學」の一句を以て答へたことである。論語學而第一は、而して結局論語全卷が、この大學の一句の解説なのだ。

一 子ノタマハク、學ンデ而シテ時ニコレヲ習フ、マタ說バシカラズヤ。朋有リ遠方ヨリ來タル、マタ樂シカラズヤ。人知ラズシテ慍ラズ、マタ君子ナラズヤ。

「子」は「先生」といふやうな尊稱だが、論語でただ「子」といふときは、孔子様のことだ。論語は孔子様の孫弟子たちの編纂らしいと前に言つたが、それかあらぬか直弟子中の三四をも「子」と呼んでゐる。其場合には「有子」「曾子」などと姓をつける。ついでに言ふが、前に出した「序説」に、それを理由として論語は有若と曾參の門人が編纂したものとあるが、それはどうだらうか。ほかに「閔子」「冉子」があり、又諸侯の大夫（家老）などにも「何々子」と呼ばれるのが何人かある。

論語のほとんど毎章に出て来るのが「子曰」だ。これは「子イハク」でよいわけで、さうよむ人もあるが、孔子様を尊敬する意味で「子ノタマハク」とよむならばしになつてゐる。其證據には、古川柳に「陽虎ではござりやせんとのたまはく」とある。孔子様が陽虎といふ悪人とまちがへられて難儀された、といふ話は後に出て来るが（二一〇）、「ノタマハク」といふモックタイぶつた儒者口調と「ゴザリヤセン」といふ江戸ッ子辯とを取り合せたおかしみである。又江戸時代笑話にかういふのがある。

和歌の會でめいめい「子曰」（ねのひ）といふ題を紙に書いたのを手にして、『よめぬ、よめぬ』と打ち案じてゐるところへ、儒者先生がはいつて来て、『無學な人々ぢや、シノタマハクが讀めぬとは。』

しかし孔子様でも殿様といふやうな上の人に言ふ場合には「イハク」とよむ、といふやうな使ひわけがある故、本文には「ノタマハク」とか「イハク」とかカナで書くことにした。

「而」は「シカシテ」だが、重みをつけるためか「シカウシテ」とよむ習慣だ。多くの場合には、前に續けて

ただ「テ」とよむ方が口調がよい。又全然よまないこともある。

「時」は「時々」ではなく「常時」。「習」の字には「羽」がついてゐるが、雛がしきりにはばたきをして飛び出すことをすることから來てゐる。「學習院」の名はこの本文から出てゐるのだ。「説」は「悦」と同じ。

「朋遠方ヨリ來タル有リ」とよむ人もあるが、前記の方が口調がよい。「山縣有朋」（明治時代軍閥の大御所）といふ名前はこれから出たのだ。

「慍」を「ウラム」とよむ人もある。

「君子」「小人」といふ言葉が論語にはならんで出て来るが、それが二様の意味に用ひられてゐる。一つは「徳の有る人」「徳の無い人」といふ意味、今一つは「治者」「被治者」「指導者」「被指導者」といふやうな意味だ。この「君子」は前の意味で、英語なら「ジェントルマン」だが、「紳士」では軽すぎる。「人格者」でもよいかと思ふが、そのまま「君子」にして置かう。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『先生に就き又書物を読んで道理を學ぶのがまづ第一だが、ただ通り一遍に學んだだけでなく、其上にまがなすきがな繰り返し思索したり實行したりして見ると、だんだんと學問が身に付き道理が心にとけこんで来る。何とうれしいことではないか。さて學問が進み

修養が積んで來ると、勉學修養の志を同じくする人たちが遠方からまで集まつて來て、どうぞ教へて下さい、一緒に修行しませう、といふことになる。何と楽しいことではないか。ところで或程度學問が進み修行が出來ると、自分はこれだけになつたのになぜ世間が知つてくれないのだらうかと、不平も起りさうなことだが、もともと學問し修養するのも自分の人物をみがぐため、それがおのづから世のため人のためになることはあらうとも、けつして他人に認識してもらふための學問修養ではない。さういふ氣持で「人知ラズシテイキドホラズ」一心不亂に學問修養をつづける人があるならば、それこそ本當の君子ではあるまいか。』

此一章は三段になつてゐるが、通して讀んで見ると、ひとつづきの發展過程であることがわかる。すなはち第一段は、學問は「耳學問」や「目學問」ではだめで、體得して身につけたものでなければならぬ、といふことを述べ、第二段は、學問は志を同じくする者が共同研究し相互教化すべきものであることを説き、第三段は、學問の目的は自己の人格完成にあることを教へたのであつて、要するに學問の眞目的に向ひ喜び楽しんで精進すべし、といふのである。そしてこの短い一章が結局孔子様の一代記自叙傳なのではあるまいか。すなはち孔子様は「悦バンカラズヤ」の一念で勉強し修養してまづ御自身の人格を完成され、其徳をきき其風をしたつて遠近から集り來る有爲篤學の若い學徒を「樂シカラズヤ」と教へ導き、自國はじめ列國の政府當局には十

分に認められず用ひられず、先王の道を以て天下を救はうといふ大理想もつひにむなしくして、世俗的には志を得られなかつたが、「人知ラズシテイキドホラズ」に一生を學問と修養と著述と育英とにささげられたのであつて、眞に「君子ナラズヤ」と隨喜渴仰のほかない。孔子様の自叙傳なること明白な一章は次の「爲政第二」に出て來るが、孔子様はそこで「五十ニシテ天命ヲ知ル」と言はれた(二〇)。實際孔子様は天命を知り天命に安んじ天命を樂まれたのであつて、論語の最後の章に「命ヲ知ラザレバ以テ君子タルコト無キナリ」とあるのと(四九六)ここに最初に「君子ナラズヤ」とあるのと、偶然に對應する。イヤ偶然ではないのだらう、編纂者が心有つて此二章を首尾に置いたに相違ない。要するに論語二十篇は此開卷第一章の説明擴大だとも考へられるのであつて、伊藤仁齋は「ケダシ一部ノ小論語ト言フベシ」と言つてゐる。

二 有子イハク、ソノ人トナリヤ孝弟ニシテ上^カヲ犯スコトヲ好ム者ハ鮮^{ハクナ}シ。上ヲ犯スコトヲ好マズシテ亂^ナヲ作スコトヲ好ム者ハ未ダコレ有ラザルナリ。君子ハ本^{モト}ヲ務ム。本立チテ道生ズ。孝弟ハソレ仁ノ本タルカ。

最後ノ一句ヲ「孝弟ハソレ仁ヲ爲スノ本カ」とよむ人もある。

「有子」は門人有若、前記のやうな次第で「有先生」となつてゐる。容貌風采が孔子様によく似てゐたので、

大先生なき後門人たちが「有若ノ聖人ニ似タルヲ以テ孔子ニ事フル所ヲ以テ之ニ事ヘント欲シ、」曾子が大反對をしたといふことが、孟子に出てゐる（滕文公章句上）

X X X X X

有子が言ふやう、「其人柄が孝すなはち親孝行であり又弟すなはち兄思ひであつて、それで目上の人にさからひたてつくことのすきな者はまづなからう。目上にさからひたてつくことがすきでなくてそれで騒動すきの平和攪亂者であることはけつして有り得ない。君子たる者は道德の根本に力をそそぐべきで、根本がシツカリと立てば其先の道はおのづから開けるものだ。すればこの孝と弟とは結局最高道德たる仁の根本ではあるまいか。

論語には門人たちの言葉も相當に出て來るが、結局は孔子様の教訓のいい意味の受賣である。有若もここで孔子様が最高道德として常に説かれる「仁」について語る。「仁」とは何かといふことは、進むに従つてだんだんにのみこめようが、一言には説明しにくい。しかしけつして特別にやかましい實際はなれのした事ではないといふことは、孔子様がくりかへし言はれる所だが、有若も仁なる最高道德の根本は「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ」の日常家庭道德にあるのだから、まづ以て其根本につかはねばならぬ、と説くのであつて、至極もつと

もなことだ。終戦後の我國の有様について私が實に残念に思ふことは、「上ヲ犯スコトヲ好ミ亂ヲ作スコトヲ好ム」者が天下に横行して、ひたすら「鬭争」を事とし、けんか腰で目上の人につつかかることが民主的だといふ一般に考へられてゐるやうに思はれることだ。そしてそれが又さかのぼつて孝弟の家庭道德をくつがへしはせぬかと心配してゐる。もちろん今日に於て孝といひ弟といふのは、けつして父がいばり兄がのさばる封建的家庭道德ではなく、子から又弟妹から進んで父母を愛し姉姉と和する民主的家庭道德でなくてはならぬのであるが、私は其意味で「孝弟ハソレ民主日本ノ本カ」と申した。

参照——三七

三 子ノタマハク、巧言令色鮮シ仁。

「言ヲ巧ニシ色ヲ令スルハ鮮キカナ仁」とよむ人もある。それならば讀んで字の如く意味がわかるが、「唐人蠟燭スクナシ忠」といふ地口もあるくらゐに、本文通りよみならはされてゐる。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「口前が上手で顔附をかざる人には、信實心がすくないものぞ。」

これは特に説明を要せぬが、もちろん、にがむしをかみつぶしたやうな顔をして毒舌をふるふのがよい、と言はれるのではないこと、だんだんと出て来る孔子様の言行でわかる。心にもないあいそう笑ひや、おべつか口がいけないと言はれるのだ。

参照——一六・三二九・四〇二・四四八

四

曾子イハク、ワレ日ニ三タビワガ身ヲ省ミル、人ノ爲ニ謀リテ忠ナラザルカ、朋友ト交ハリテ信ナラザルカ、習ハザルヲ傳ヘシカト。

「曾子」は門人曾參、字は子輿。

「三省」を「三ツ省ミル」とよんで、「次ノ三箇條」の意味にとる人もあるが、「三タビ」の方がよからう。しかしキツチリ三回といふのではないので、「何度モ」といふことだ。

原文「交」の下に「言」の字があつて、「朋友ト交ハリ言ヒテ信ナラザルカ」とよめる本もある。

「傳ヘテ習ハザルカ」とよむ人もある。「先生から教はつたことを復習實踐しなかつたか」といふ意味になるが、それには「傳」の字の下に「而」がなくては、前二段と文體がそろはないやうだ。

X X X X

曾參が言ふやう、「私は毎日何度となく、人の世話をしながら親切の足りないことがなかつただらうか、友達附合に信義にかけたことはなかつただらうか、先生から教はつた事をまだ十分身につかぬうちに人に受賣したことはなかつただらうかと、わが身にたちかへつて思ひ合せて見る。もしもしさやうな缺點があつたらさつそく改めるやうに心がける。」

曾參がまことに用心ぶかい人であることは後にも出て来るが(一八七)、其おもかげがここにもよくあらはれてゐる。この「三省」といふのが中々むづかしい事で、われわれは古きづにさはるのがいやなやうな氣持で自分で自分をごまかしてしまふが、それでは人格の完成を望み得ないどころか、過ちを二たび、たびすることに。個人のみならず、日本國全體として、今日こそ三省も四省もすべき時ではあるまいか。

反省といへば、私の此講釋などは「習ハザルヲ傳フル」の最も甚しいものかも知れない。曾參は又孝行で有名。「二十四孝」の一人だ。孝道についての孔子様との對談録たるかの「孝經」は、其作

と傳へられてゐる。

五

子ノタマハク、千乗ノ國ヲ道ムルニハ、事ヲ敬シテ信、用ヲ節シテ人ヲ愛シ、民ヲ使フニ時ヲ以テス。

「千乗」は戰車一千臺、戰車一臺に士官三人兵士七十二人が乗組むのだといふ。「一天萬乘ノ君」などといつて、天子は戰車一萬臺を出せることになつて居り、大諸侯は一千臺を出す。すなはち「千乗の國」は「大諸侯の國」といふこと。

「道」は「治」と同じだが、指導といふ意味がふくまれてゐる。「導」の字を用ひてゐる本もあるとのこと。「人民」と一口にいふが、別けて用ひるならば、「人」は一般人、「民」は農民を意味するやうだ。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『大國を治めるには、仕事を慎重にして人民の信頼を失はぬやうにし、むだな費用をばふいて人民をかわいがり、人民を徴用するにも其時を考へる——殊に農民については農閑の時をえらんで農作を妨げない——ことが大切ぢや。』

これはきはめて平凡な事だが、今までの日本の政治家——殊に戦時の政府當局——は、この政治のイロハをさへ知らなかつたのではないかと疑ひたくなる。むやみと思ひつきの命令を出したり規則をこしらへたり、それが又いはゆる朝令暮改で、スツカリ國民の信用をなくし『もう役人にはだまされないぞ』といふ氣持を起させ、又必要ならば租税を重くするもやむを得ないが、何の役に立てたかわからぬやうな國費のむだづかひをし、徴用やら勤勞奉仕やらに時もかまはずひつぱり出して、國家のため戦争のためにより必要な本業やら學問やらを妨げたやうな次第で、それが結局敗戦の一因でもあつたらうし、スツカリ國民の感情をひねくらせてしまつて、戦後の復興にも妨害になつてゐる。何とも残念な事だ。つまるところは西郷南洲のすきだつた「敬天愛人」の觀念が足りなかつたのである。

六

子ノタマハク、弟子入りテハスナハチ孝、出デテハスナハチ弟、謹ミテ信、汎ク衆ヲ愛シテ仁ニ親シミ、行ヒテ餘力有ラバスナハチ以テ文ヲ學ベ。

「弟子」は「デシ」でなく「テイシ」とよむならはした。ここでは父兄に對して年少者を意味する。そして「弟」は年少者の道である。この「仁」は人を意味する。有徳の人すなはち「仁者」。

最後を「文ヲ學ブ」とよむのが普通のやうだが、「弟子」といふ呼びかけから見ても、命令にした方がよさ

うだ。

× × × × ×

孔子様がおつしやるやう、『若者どもよ、家庭にあつては父母に孝に、世間に出ては年長者に従順に、行狀を謹直にし言葉を信實にし、わけへだてなく衆人を愛して中にも仁者に親しみ近づき、かく實行にはげんでまだ餘暇餘力があるならば、そこではじめて文藝を學びなさい。』

これはいつの世にも若い學徒がとかく空理空論・文藝三昧に走り過ぎて家庭人社會人としての實際が留守になるのをいましめられたのであつて、學問文藝を輕しとされたのではない。安井息軒曰く、

『古ノ學者ハ行ヲ先ニシテ知ルコトヲ後ニス。人能ク此數事ヲ行ハバ、亦以テ世ニ立チテ愧ヅル無カルベシ。然レドモ猶未ダ常人タルヲ免カレズ。故ニ行ヒテ餘力有ラバ、スナハチ用ツテ文ヲ學ビ、以テ世ヲ輔ケ民ニ長タルノ徳ヲ成ス。』

七 子夏イハク、賢ヲ賢トシテ色ニ易ヘ、父母ニ事ヘテハ能ク其力ヲ竭シ、君ニ事ヘテハ能ク其身ヲ致シ、朋友ト交ハリ言ヒテ信有ラバ、未ダ學バズト曰フト雖

モ、ウレハ必ズコレヲ學ビタリト謂ハン。

「子夏」は門人卜商の字、文學で知名。原文「易色」を「色ヲカロンズ」とよむ説もあるが、やはり「青年男女が美しい相手に戀ひこがれるやうな切な氣持で賢人を慕ひ求める」といふ意味で「色ニカヘ」とよむ方が、文學者子夏らしくてよい。原文「賢賢」の上は動詞で敬慕。下は名詞で賢人。

× × × × ×

子夏が言ふやう、『色を好むのは人間の眞情だが、色を好むやうなやむにやまれぬ氣持で賢人を師とし友とすることを求め、父母につかへるには全力をつくし、君につかへては一身を投げ出し、友人との交はりに言つた事は必ずたがへぬ、さういふ人物があるならば、當人はまだ學問が出来て居りませんと言はうとも、又他人があいつは無學だと言はうとも、私は其人こそ本當に學問の出来上つた人物だと謂ひたい。』

これは前段の孔子様の言葉の延長のやうなもの故、ここにならべたのであらう。學問の目的はつまるところ日常道德の完成なのだから、それさへ出来てゐれば、むつかしい書物が讀めず名文が書けずとも、既にりつは

な學者だ、といふのであつて、すこし大きすぎるやうだが、そこが子夏の文學者たる所で、おもしろい。

八 子ノタマハク、君子重カラザレバスナハチ威アラズ、學ベバスナハチ固ナラズ。忠信ヲ主トシ、己ニ如カザル者ヲ友トスルナカレ。過ツテハスナハチ改ムルニ憚ルコトナカレ。

此章は五句になつてゐて、前二句と後三句とは、強ひて結び附ければ附かぬこともないが、どうも別物のやうだ。間に「子曰」があつたのが落ちて二章が續いてしまつたものらしい。

本章の「君子」は人の上に立つ者の意味で、前二句は其意味の君子の心得、後三句は一般人の心得だ。「學則不固」を「學モスナハチ固カラズ」とよむ人もあるが、前記の方がよさうだ。

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、『人の上に立つほどの者は、重々しくドツシリしてゐなければ、威嚴がなくて人を服せしめ得ない』同時に又學問がないとかたくなになる故、十分道理に通じ知識を廣めて、獨善におちいらぬやうにせねばならぬ。『人に接するには忠實信義をむねとせよ。自分より

劣つた者ばかり仲間にしたがるな。過ちがあつたら、つまらぬ體面などにこだはらずアツサリと改めねばならぬ。』

「威」とスふのは「スばる」ことではないのもちろんだ。いはゆる「威有ツテ猛ケカラズ」(一八四・四九三)でなくてはならぬ。菊地容齋「前賢故實」の坂上田村麿の像の畫に「平居談笑、老幼親狎、瞋目疾視、猛獸懼伏」とある。あぐらをかいて談笑してゐるときは年寄りもしたしみなじみ、まなこをいからしてハツタにらめば猛獸もすくみひれふす、といふのだが、それが君子の姿である。

「己ニ如カザル者ヲ友トセズ」と皆が言つたら結局友達といふものは有り得ないではないか、とヘボ理窟を言ふ人があるさうだが、自分より劣つた者だけとつきあつて御山の大将になりたがるな、といふ意味であることもちろんであり、言ひかへれば、人に絶對の優劣はないもので、互に長短があるのだから、「己ニ如カザル」點を標準とせず、「己ノ如カザル」所を目安として友をえらべ、といふことになるのだ。

『過ツテ改ムルニ憚カルナカレ』は誰でも知つてゐる言葉だが、誰にも中々實行できない事柄だ。今度の戦争などでも、「過ツテ改ムルニ憚カ」つたものだからドンゾコまで落ちこんでしまつたのだ。孔子様は必ずしも過つなとは言はれず、過ちと知つたらかれこれ言ひわけせず即座に改めろ、と言はれるのである。(一一一・四〇五・四七六・四八九)

九 曾子イハク、終リヲ慎ミ遠キヲ追ヘバ、民ノ徳厚キニ歸ス

「終」は生命の終、すなはち死亡。

「追遠」は遠くまでさかのぼつて先祖の祭をすること。

X X X X X

曾參の言ふやう、『上に立つ人が、親の死んだ時の取りおさめすなはち葬式を鄭重にし、又先祖の祭を手厚くすれば、人民もそれに感化されて風俗が善くなつて行く。』

當時の諸侯や大夫が葬祭を粗略にし又はそれが形式に流れて誠意がこもらなかつたので、曾子がかう言つたのであらう。近頃は生活のせちがらさも手つたつて、葬式も至つて簡略になり、何年祭や何回忌も一々は守れず、交通不便のために墓參も心にまかせず、さみしいことだ。もちろん葬祭が形式虚榮になつて、明治大正時代のやうに葬列が何町續いたとやらが自慢になつたり、廣告半分の生花造花がむやみとかつきこまれたり、葬式や法事が村人の酒呑み機會になつたりしては困るので、簡素は結構だが、粗略はいけない。義理一遍の世間附合はやめにして、子孫近親友人だけでまごころこめて「終ヲ慎ミ遠キヲ追ヒ」たいものだ。去るものは日に

うとく、年たつままに親の命日も忘れがちのやうなことでは、人間としてなさないことではないか。

参照——一八六・二九七

一〇 子禽^{シケン}子貢^{シコウ}ニ問ヒテイハク、夫子^{フシ}ノコノ邦^{クニ}ニ至ルヤ、必ズ其政^{マツリゴト}ヲ聞ク コレヲ求ムルカ、ソモソモコレヲ與フルカ 子貢イハク、夫子ハ溫、良、恭、儉、讓、以テコレヲ得タリ 夫子ノコレヲ求ムルヤ、ソレコレ人ノコレヲ求ムルニ異ナルカ。

「子貢」は門人端木賜の字。辯才で有名。ここで「字」すなはち「あざな」のことを説明して置かう。我國今日の「あだな」ではなく、實名でない呼び名である。そして他人からは、實名を呼ばず字を呼ぶ。すなはち論語の編者は「子貢」と書く。しかし自分では名を言ふ。すなはち子貢は自分のことを「賜」と言ふ。親とか師匠とか親しい間柄でも名で呼ぶ。孔子様はいつも「賜ヤ」と呼びかけられる。

「子禽」は陳亢の字。子貢の後輩、おそらくは其門人（四九三）。

「夫子」は大夫たる人又はたりし人の敬稱だとのことで、論語にも孔子様以外の人をさう呼んでゐる箇所もあ

るが(二八六・三四五・三六八・四一八)、主として孔子様を指すのだから、「先生」といふことにして置いてよからう。「フウシ」とよむならばして、我國でも田舎儒者の意味で「村夫子まむらじ」などと謂つたものだ。

「是邦」はどの國と指したのではなく、「どこの國でも」の意味。

X X X X X

子禽が子貢に「先生はどここの國へ行かれても必ず政事向の相談にあづかられますが、先生の方から求められるのですか、それとも又先方から持ちかけられるのですか。」と問うた。子貢が答へて言ふやう、「先生の温・良・恭・儉・讓の御人柄によつておのづからさやうなことになるのであつて、先生は天下の政治をよくしようと思つて諸國へ行かれるのだから、先生の方から求めるのだといへないこともないかも知れぬが、先生の求め方は世間の人のいはゆる求職獵官とは違ふやうだ。」

「温」はおだやかなこと、「良」はすなほなこと、「恭」はつつしみぶかいこと、「儉」は節制のあること、「讓」は謙遜なこと。この温・良・恭・儉・讓の五字は、實によく孔子様の性格をあらはしてゐる。孔子様は自然と相談でももちかけなくなるやうなごやかな親しみやすい人柄だつたに相違ない。もつとも他面には非常に強い性格をもつて居られたのであつて、其事はだんだんとあらはれて来る。

一 子ノタマハク、父在セバ其志ヲ觀、父没スレバ其行ヲ觀ル。三年父ノ道ヲ改ムル無キハ孝ト謂フベシ

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「父の存生中はよく其氣持を察して其心にたがはぬやうに心がけ、父の没後は其行を思ひ出して其跡を踏まうとつとむべきであつて、たとひ父時代のやり方に現在としては面白くない事があつても、父が死んだからといつてすぐさまやめてしまふ氣持になれず、せめて喪中の三年ぐらゐは父の道を改めるに忍びないのが、親孝行といふものぢや。」

たとひ先祖傳來のしきたりでも時代錯誤な事を即刻やめにするに何の遠慮があるものか、といふのはこれは理窟で、父が死ぬと待つてゐましたとばかりバクバクと變更するのは、人情でない。其上正否利害も十分考へねばならぬ故、其場の氣分や目先の議論で即決斷行するのは、必ずしも適當であるまい。「三年」といふのは支那の喪の制度からさう言つたので(四五二)、年限の問題ではなく、現在の我國としては、「墓石未ダヒヤヤカナラザルニ」くらゐの意味に解して置いてよからう。同時に三年たつたら何でも變へろ、といふのではないことはもちろんだ。

古註に

『モン其道ナラバ、終身ト雖モ改ムル無クシテ可ナリ。モン其道ニアラズンバ、何ゾ三年ヲ待タン。然ラバ
スナハチ三年改ムル無キハ、孝子ノ心忍ビザル所有ルガ故ナリ。』
とあり、又伊藤東涯は

『人ノ父タル者、未ダ必ズシモ皆賢ナラズト雖モ、各其分ニ隨ヒテ制法ノ遵フベキモノ有ラザルガシ。コレ
ガ子タル者、喪ノ期末ダ畢ラズシテ、遽然トシテ紛更シ、ソノ好ム所ニ從フハ、コレ其父ヲ死セリトスル不
孝ノ甚シキナリ。故ニ三年父ノ道ヲ改ムル無クシテ然ル後ニ孝ト謂フベシ。』

と言つた。私が先代の書齋を二十年も片附けずにあて、結局戦災の煙としてしまつたなどは「孝ト謂フベシ」
ではなくて、全くものぐさだつたのだけれども、多少は忍びざる所もあつたのだ、と言ひわけしておかう。

以上は原文「其志」「其行」の「其」を「父ノ」と見た解釋だが、それを「子ノ」と見る解釋もあるのであ
つて、其説によると人物の鑑定法になる。父の生前は子は自由行動ができないのだから、其志すなほち動機を
汲んでやらねばならず、父の死後は自身任意の行爲だから、直接に其行を批判して可なり、ただし「三年父ノ
道ヲ改メザル」孝子の情は斟酌すべきだ、といふことになる。

一一 有子イハク、禮ハコレ和ヲ用ツテ貴シト爲ス。先王ノ道コレヲ美ト爲ス。小大
コレニ由レバ、行ハレザル所有リ。和ヲ知ツテ和スルモ、禮ヲ以テコレヲ節セ

ザレバ、マタ行ハルベカラザルナリ。

「禮ノ用ハ和ヲ貴シト爲ス」といふよみ方もある。「用」は作用であつて、それでも意味が通ずるが、禮記に
も又聖徳太子十七條憲法第一條の第一句にも「以和爲貴」とあつて、「以」と「用」とは相通するのだから、
其方のよみ方を採つた。小學校の時につかつた習字用の筆に「小大由之」といふ銘のがあつたことを覚えてゐ
る。何の事かと思つてゐたら、此文句を取つて、小字にも大字にもつかへるといふ意味だつたのだ。

X X X X

有若が言ふやう、「禮はけつしてひややかにさびしいものではなく、和すなほちなごやかさが貴
いのである。堯舜文武といふやうな昔の帝王の道の美しさはそこにある。しかし又小事も大事も和
の一點ばりではうまく行はれないのであつて、和の大切さを知つてやはらぐにつけても、禮で折り
目切り目のしめくりを附けないと、結局ぐあひよく行かない。』

一三 有子イハク、信、義ニ近ヅケバ言履ムベシ。恭、禮ニ近ヅケバ恥辱ニ遠ザカル。
因ルコト其親ヲ失ハザレバマタ宗トスベシ。

「近」を「近ケレバ」とよみ、「宗」を「タフトブ」とよむ人もある。

X X X X X

有若が言ふやう、「言つた事は必ず實行するといふ信も、其言葉の内容が道理に近い場合には、はじめてそれを實行して然るべきものになる。うやうやしいは結構だが、それが禮に近い場合にはじめて恥辱に遠ざかることになるのであつて、おじぎは丁寧がよいからとて、土下座をしたらかへつて恥をかく。人附合もその親しむべき相手を見そくはないことがむづかしいのであつて、それができれば大したものだ。』

本章は要するに、人の言行交際には分別と見はからひが大切で、安受合では信が信にならず、馬鹿丁寧では禮が禮にならず、たれかれの見さかひなしでは交際といへない、といふのである。

一四 子ノタマハク、君子ハ、食飽クヲ求ムルコト無ク、居安キヲ求ムルコト無ク、事ニ敏クシテ言ニ慎ミ、有道ニ就イテ正ス、學ヲ好ムト謂フベキノミ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「腹いっぱいたべて安樂な住居に、といふやうなことは、君子たるべき者の求むべき所でない。善事の實行にすばやく、無責任な言論をつつしみ、有徳の人をさがし求めて自分の考への誤りをただす心がけがあつてこそ、本當の學問好きといへるのぢや。』

敗戦日本のやむを得ぬ現實とはいひながら、明けても暮れても、寄るとさはると、たべものの話ばかりしてゐるわれわれがほづかしい。「武士は食はねど高楊子」「おなかへつてもひもじうない」といふ「やせがまん」もありがたいものだ。

孔子様の學問が實踐倫理學であることは論語の到る所にあらはれてゐる。後世の「論語よみ」たちが、學問といへば字を習ひ本を讀むこととしてしまつたのが残念だ。前名古屋帝國大學總長澁澤元治工學博士が大學を卒業して郷里に歸り、引續き大學院で勉強したいと言つたところ、村の年寄たちがビックリして、澁澤の小旦那はまだ知らない字があると見える、と言つたとか。

参照——一〇六・四七三・七五・一二八・二三一

一五 子貢イハク、貧ニシテ^{ハツラ}諂フコト無ク、富ミテ^{オゴ}驕ルコト無キハ如何、子ノタマハク、可ナリ、未ダ貧ニシテ樂ミ富ミテ禮ヲ好ム者ニ若カザルナリ、子貢イハク、詩ニ云フ、切ルガ如ク、瑳ルガ如ク、琢ツガ如ク、磨クガ如シトハ、ソレコレコレヲ謂フカ、子ノタマハク、賜ヤ始メテ^{トモ}與ニ詩ヲ言フベキノミ。コレニ往ヲ告ゲテ來ヲ知ル者ナリ。

「貧而樂道」と「道」の字のはいつてゐる本もある。「富而好禮」の對句としては其方がよいかも知れぬが、「貧ニシテ樂ミ」といふ方が含蓄があつて面白い。子貢が引いた「切瑳琢磨」の古詩は詩經衛風淇澳篇に收められてゐる。「切」は刀で切る、「瑳」はやすりで擦る、「琢」は槌やノミで打つ、「磨」は金剛砂や砥石でみがく。「切瑳」は骨角細工、「琢磨」は玉石細工と二分する説明もあるが、切つた上にすり、すつた上にうち、うつた上にみがく、といふ一連の仕上工程と見た方が文意にかなふ。學問や德行にも上には上があつて、これで頂上といふ行きどまりはないのだから、みがきの上にもみがきをかける、といふたとへになるのだ。

X

X

X

X

子貢が「貧しくてもそのために卑屈になり人にへつらつてあはれみを乞ふやうな態度がなく、富んでもそれを笠にきておごりたかぶる風が[●]から、いかがでござりませうか。」とおたづねした。孔子様がおつしやるやう、「それはまづまづ結構な事だが、しかしまだ貧乏だけれども金持だけれどもと貧富にこだはつてゐる氣味がある。貧乏を忘れて道を樂しみ金持だといふ意識を超越して禮を好むには及びもつかぬぞよ。」そこで子貢が感嘆して、「詩に「切瑳琢磨」といふのは正にそこでござりますな。」と言つたので、孔子様も大そうござげんで、「賜よ。お前は本當に詩の話を男だ。過去を告げれば未來がわかる、打てばひびくやうぢや。」とほめられた。

詩歌といふものは、言語が簡單だから、よほどあたまが働かないと、意味深長な所がわからない。子貢は「一ヲ聞イテ以テニヲ知ル」と自ら許してゐる程カンのいい男なので、ハハアなるほど、と手をうつたのだ。

論語に出て來る孔子様と高弟たちとの問答は、とりどりに面白い。くたくたく現代語譯するまでもない、簡潔で含みのある本文をくりかへし音讀して見なさい、老先生と秘藏弟子とが相見て破顔一笑するなごやかな光景が眼前に浮び上がるだらう。明治の新川柳に「惜しいかなシヤレのわからぬ男にて」といふのがあつた。人間理窟一點ばりでもこまる。シヤレはともかく、「始メテ與ニ詩ヲ言フベキノミ」といふやうな、味のある

人物であつてほしい。それでこそ又貧富を超越することもできるのではあるまいか。

子貢は始め貧にして後に富んだ人なので(二七一)自身の過去の心境態度につきいさか得意の氣味で此問題を持ち出したのを、孔子様が、まだまだそれでは満點とはいへないぞ、とさとされたのだ、といふ見方もあるが、そんなところが過ぎずに一般論として見た方が、かへつて趣があるやうだ。

一六 子ノタマハク、人ノ己ヲ知ラザルヲ患ヘズ、人ヲ知ラザルヲ患フ。

第二句が「己ノ人ヲ知ラザルヲ患フ」となつてゐる本もある。それならばよくわかる。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう『自分の心事や才能を他人が知つてくれるかどうかを苦にすることはない。他人の賢愚善惡能不能を自分が知らずにゐるはせぬかを心配すべきだ。』

参照——八〇・三六一・三九四

爲政第二

例により初め二文字を取つて「爲政」と題し、政治問題數章を含むが、篇中特に目につくのは孝行についての教訓である。孔子様の政治は「法治」でなくて「徳治」なのだから、其第一歩はすなはち孝なのである。

一七 子ノタマハク、政ヲ爲スニ徳ヲ以テスレバ、譬ヘバ北辰ノ其所ニ居テ衆星ノコレニ共フガ如シ。

「北辰」は北極星。支那では古くから天文觀測が發達してゐたので、孔子様も天を仰いでこの雄大適切な譬を思ひつかれたのであらう。

「共」は「拱」と同じ。「かかへこむ」といふので、それを中心として回轉する意味になる。本章から出たのであらう、「拱辰」といふ熟語がある。四方の民が天子の徳化に歸する義。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『仁義道德によつて政治をすれば、譬へて見れば北極星が其位置を動かすすべての星がこれを中心として回轉するやうなぐあひに行くものぞ。』

これは孔子様の徳治主義の堂々たる基本宣言であつて、だんだんと出て来る政治論はみなここに淵源する。支那戰國時代の法治主義武治主義に對すると同様、我國在來或は現在の政治に對しても、一大鐵槌である。

一八 子ノタマハク、詩三百、一言以テコレヲ蔽フ、イハク、思邪無シ。

周の盛なころ、採詩官といふ役人があつて、諸國の「國風」(くにぶり)我國でいつたら萬葉集の東歌のやうなものを採集記録し、政治向の参考にした。孔子様がそれを整理編纂したのが詩經であつて、詩の數三百十篇、「三百」とは其概數を言つたのである(二三〇)。

「思無邪」も詩經の中の文句(魯頌駉篇)

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『三百篇の詩の内容は種々様々だが、一言で全部をおほひかぶせよとすよならば、「思無邪」といふことに盡さる。』

これは孔子様の道德主義藝術論であるが、其道德主義は、「勸善懲惡」「思想善導」といふやうな、これ亦一種のよこしまごころを以てせよといふのではなく、善良にして無邪氣な真情流露がすなはち詩であり音楽である、といふのだ。

一九 子ノタマハク、コレヲ道クニ政ヲ以テシコレヲ齊フルニ刑ヲ以テスレバ、民免レテ恥無シ。コレヲ道クニ徳ヲ以テシコレヲ齊フルニ禮ヲ以テスレバ、恥有リテ且格ル。

「道」は「導」と同じ。

「齊」ヲ「ヒトシクス」とよむ人もある。

「格」を「タダシ」とよむ人もある。

「恥ヂ且格ル有リ」ともよめる。

孔子様がおつしやるやう、『法律づくめの政治で人民を指導し、刑罰を以て統制を強行しようとする、人民は、刑罰を免かれさへすればよいといふので、廉恥心がなくなつてしまふ。仁義道德を以て人民を指導し、禮儀作法で足なみをそろへるやうにすれば、人民は恥を知つておのづから善に至るものぞ。』

此一章は特に政治家法律家のための金科玉條だ。明治以來の法治主義の弊がだんだんと増長して、戦争中の諸統制に於ていよいよ甚しく、其結果たる道義の頹廢が終戦後に至り特別にいちじるしい。「免レテ恥無シ」どころか、闇取引や脱税をいかに巧妙に工夫實行したかを大つびらに自慢し合ふまでになつたのは、實にあさましい次第だ。最近のインフレ防止對策としての預金引出制限にしても、發令になるかならぬのに、『ナーニ拔道はいくらもあるさ』と、こみあひの電車の中で大聲に話してゐるのを聞いた。それではどんな名案でも行はれようがない。當局は法律だけで押へようとし、一般人は罰されるからやめにして置かうといふ、其考の根本がまちがつてゐるのだ。支那事變中だつたが北支の要人董爾和氏と出會つたことがある。氏は我國の醫學博士の學位をもつてゐるほどで、日本語が上手なのだが、『お國は實によく法律が行届いてゐます』といふ。ほ

められたのだと思つたとたん、『ですからお國の人は法律のない所へ來ると悪い事をします。』正に御面一本取られた形で、本當に顔から火が出る思ひがした。これは又古い話だが、先代穂積陳重は神傳流の水泳の名人で、水底をくぐる事が上手だつた。東京帝大の戸田水泳場で學生と競技し、學生選手の二十間に對し四十間くぐつたので、一同驚歎し、『法律家だけあつてモグルののがうまい』と言つたとか。法律家といふものは法律の裏をくぐる工夫をするものやうに思はれてゐるとは、實になさけないことだ。願はくは政治家も法律家も又一般人も心をあはせて「恥有リテ且格ル」の理想境を造り出したものだが、それにはまづ、「善いから法律が命じ悪いから法律が罰する」ので、「法律が命するから善く法律が罰するから悪い」のはなし、といふ根本をシツカリとつかまねばならぬ。

二〇 子ノタマハク、ワレ十有五ニシテ學ニ志ス。三十ニシテ立ツ。四十ニシテ惑ハズ。五十ニシテ天命ヲ知ル。六十ニシテ耳順フ。七十ニシテ心ノ欲スル所ニ從ツテ矩ヲ踰エズ。

この「學」といふのは、今日では高等教育の専門學である。支那の古制では、八歳で小學に入り、十五歳で大學に入る、といふことになつてゐた。

本文によつて昔の漢學者は十五歳を「志學」三十歳を「而立」四十歳を「不惑」五十歳を「知命」六十歳を「耳順」といつた。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、「自分は十五歳の時本式の學問に志したが、三十歳の頃には自ら守る所が出来てシツカリと立てるやうになつた。四十歳になると、判断が明かになり、どんな問題が起つても惑はぬ所まで行つた。五十歳に至り自分に對する天の使命を知り得て、いはゆる安心立命の域に到達した。六十歳にもなるとスツカリ圓熟し、人の言葉がすなをに耳に入つて心にさからはぬやうになつた。そして七十歳になつてはじめて、したい放題の事をして脱線しないやうになつたのである。』

これこそ正に孔子様の内面的自叙傳であつて、七十二歳でなくなれる少し前に、少年時代以來の進境を顧みて語られた言葉だ。だんだんと學問が進み修養が積んで人格完成の極に達せられた経過がハッキリとあらはれてゐる。そして「四十而不惑」とは大した事だと思ふが、其孔子様でさへ、七十になつてはじめて、したい

放題をしても大丈夫といふことになつた、といふのが面白い。六十を越しても惑ひ通しの私などが「心ノ欲スル所ニ從ツ」たら、どんな事になるかとそら恐しい。自由主義・民主主義が勝手氣儘にしたい放題をするのではないこともちろんだが、一面から言へば、各人が「心ノ欲スル所ニ從ツテ矩ヲ踰ヘズ」の境地まで達しなくては、自由主義・民主主義も本物たり得ないのではあるまいか。

參照——一一九・一四九・一六六

二二 孟懿子^{モウイシ}子^シ孝^{コウ}ヲ問フ。子イハク、違^{タガ}フコト無カレ。樊遲^{ハンチキョウ}御^ミタリ。子コレニ告ゲテノタマハク、孟孫^{モウソン}孝^{コウ}ヲワレニ問フ、ワレ對^{コタ}ヘテイハク違^{タガ}フコト無カレト。樊遲^{ハンチキョウ}イハク、何^{ナニ}ノ謂^{イハ}ゾヤ。子ノタマハク、生^{ナマ}キテハコレニ事^{ツカ}フルニ禮^{レイ}ヲ以^モテシ、死^シシテハコレヲ葬^ムルニ禮^{レイ}ヲ以^モテシ、コレヲ祭^スルニ禮^{レイ}ヲ以^モテス。

魯の大夫では、孟孫・叔孫・季孫のいはゆる「三家」がはばをきかせてゐた。その孟孫氏の當時の主人が孟懿子である。

「對」は目上の人に對して答へること、それ故其下の「曰」は孔子様の場合でも「イハク」とよむ。殊に本

章第三の「曰」は孔子様自身の言葉なのだから、「ノタマハク」ではおかし。
「樊遲」名は須。

以下四章は孝についての教訓だが、孔子様の教へ方が原則的抽象論でなく、「人によつて法を説く」具體的
抽象論であることがよくわかる。

X

X

X

X

孔子様が魯の大夫の孟孫家を訪問されたとき、主人の孟懿子が孝について質問したので、「違フ
コト無カレ」と答へられた。その歸り道に、馬車の御者をつとめてゐた門人樊遲に、「孟孫家の主
人が孝のことをたづねたので、わしは「違フコト無カレ」と答へたよ。」と話された。すると樊遲が
『それはどういふ意味でござりますか。』とおたづねしたので、孔子様がおつしやるやう、「親の存
命中は禮を以て事へ、親が死んだら禮を以て葬り、其後の祭も禮を以て執り行へ、すなはち「違フ
コト無カレ」とは、禮に違ふな、といふ意味だつたのぢや。

本章は中々意味深長だ。孔子様の教へ方は、一氣に全部を授けてしまはずに、まづ「一隅ヲ舉ゲテコレニ示
シ」(一五五) 相手が乗つて來るのを待つ、といふのがいつもの流義だ。そこで孟孫に對しても、まづ「違フ

コト無カレ」と答へて、『違ふとは何に違ふのですか』といふ質問を待たれたのだ。ところが孟孫はそれを、
親心に違ふな、といふくらゐに簡単に了解したのか、それだけで話を切つてしまつた。孔子様はそれを物足り
なく思はれたので、歸りの車の上で其事を樊遲に話された。樊遲はさすが先生の弟子だけあつて、即座に反問
したので、かういふ意味だつたのだといふことを説明されたのである。ところで孔子様はなぜ孟孫に對して
『禮に違ふな』と言はれたのかといふと、そこに又意味がある。後に出て來る通り(四一・四二・七〇)當時
の魯の「三家」はすこぶる僭上で、ややもすると禮にたがつた事をした。禮は身分相應でなくてはならぬので
あつて、薄過ぎてはもちろんいけないが、身分不相應に厚過ぎるのも禮でない。おそらく孟懿子は親の葬式や
先祖の祭に帝王や諸侯のするやうな大げさな事をして、それが孝行だと考へてゐたのであらう、それをにがに
がしく思つて居られたので、ここで一本釘をさして置くつもりだつたのに、孟懿子に道を求める熱意がなかつ
たため、不得要領に終つたのである。それを樊遲に話されたのは、其口から孟懿子に通じさせるためだ、と普
通に説くが、どうかと思ふ。孔子様はさういふ小刀細工をされる方ではあるまい。

二二 孟武伯孝ヲ問フ。子イハク、父母ハタダ其疾ヲコレ憂フ。

孟武伯は前章の孟懿の子。

X

X

X

X

孟武伯が孝とは何かと質問したら、孔子様はかう答へられた。父母はただ子の病氣を心配するものでござりますぞ。

孟武伯は順良な、ほかに申分のない息子だったが、惜い事に病身だったのであらう。そこで孔子は、父母の一番の心配は子の病氣でありますから、あなたとしての孝行は病氣をしないことでありませう、と答へられたのである。もちろんそれだけで孝行がすむわけではないが、かの孝經の孔子様の言葉「身體髮膚コレヲ父母ニ受ク、敢テ毀傷セザルハ孝ノ始ナリ。」の趣である。

本章については異説がある。「疾」を父母の病氣と見て、それをひたすら心配するのが孝行だ、の意味とするのが一説である。又「父母ニハタダ其疾コレ憂ヘシム」とよんで、病氣はやむを得ぬが其以外の事で心配をかけるな、の意味とする説もある。しかし前記の方が面白味が多いと思ふ。

二三 子游孝ヲ問フ、子ノタマハク 今ノ孝ハコレ能ク養フト謂フ。犬馬ニ至ルマデ 皆能ク養フコト有リ、敬セズンバ何ヲ以テ別タンヤ。

「子游」は門人言偃の字。

「能ク養フト謂フ」とよむのが普通だが、私は何となく「能ク養フト謂フ」とよみたい。其方が感じが出るやうだ。

X X X X

子游が孝を質問した。孔子様がおつしやるやう、今の親孝行といふのは、よく親を養つてゐるといふことのやうだ。しかし飼犬飼馬でも、愛犬愛馬となれば、十分にたべものも與へるだらうし、寒ければケツトの一枚もかけてやるだらう。敬ふといふことがなくては、何で親と犬馬とを區別しようぞ。能ク養フといふだけでは、むしろ親を飼犬飼馬あつかひするもので、孝行どころか、とんでもない不敬なことぢや。」

孔子様としてはかなり誇張した言葉だが、おそらく子游に、私は親を能く養つて居ります、あつばれ親孝行でござりませうがな、といふ氣持があつたので、手きびしくたしなめられたのだらう。

二四 子夏孝ヲ問フ、子ノタマハク、色難シ、事有レバ弟子其勞ニ服シ、酒食有レバ

先生ニ饌ス、曾テコレヲ以テ孝ト爲サンヤ。

この「弟子」は門人ではなくて「子弟」すなはち「若者」といふくらの意味。又「先生」は教師ではなくて、文字通り「先生マレタ者」すなはち父母。

「食」を「シヨク」とよむときは「たべること」、「シ」とよむときは「たべもの」。

「曾」を「スナハチ」とよむ人もある。

X X X X

子夏が孝を問うた。孔子様がおつしやるやう、『骨折り仕事があれば年寄にさせないで若い者が引受け、御馳走があれば親たちにさしあげる、もちろん結構な事だが、それだけで孝行といへるだらうか 其時の顔附がむつかしいぞ。』

この「色」を父母の顔色とする説もあるが、それでは面白くない。親孝行は事務ではないから、骨折り仕事をするにしても、年寄は引込んでゐなさいとばかりにツンとすましてテキパキ片附けたのではない、イエ私に致しますと、イソイソニコニコと氣持よく立ち働くのではなくては親孝行でない、いかに山海の珍味でもブツ

チョウツラをして突きつけたのではだめで、どうも御待遠さま、サアめしあがれと、愛想よくすすめるのである、御給仕にならない、やはり親を愛するまごころがおのづから顔色にあらはれてこそ親孝行なれ、といふのだ。この「色難シ」は、今日の場合に適切な言葉だ。戦争の後半期から終戦後にかけて、私はたとへば電車の中などで乗合を見まはしながら、なぜかう揃ひも揃つて無愛想な顔附をせねばならぬのだらうか、「色難シ」だなあ、と思はずこちらも眉をひそめざるを得ないのであつた。

前章とあはせて古註に曰く、

『子游ハ能ク養ヒテ或ハ敬ニ失ヒ、子夏ハ能ク義ヲ直クシテ或ハ温潤ノ色少ナシ。各其材ノ高下トソノ失フ所トニ因リテコレニ告グ。故ニ同ジカラザルナリ。』

二五 子ノタマハク、ワレ回ト言フコト終白、違ハザルコト愚ナルガ如シ。退イテ其私ヲ省ミレバ、亦以テ發スルニ足レリ 回ヤ愚ナラズ

「回」は門人顔回、字は子淵。孔子様は常に「回」と名で呼ばれ、目上の人に語る場合には「顔回トイフ者」と姓名を言はれる。論語の編者は「顔淵」と字を書く。前にも言つたが、姓と名と字との使ひ分けが、これで

わかる。一番弟子秘蔵弟子で、孔子様より若きこと九歳。これを褒め又惜しまれた言葉が續々出て来る。同じく魯の人であり、孔子様の母は顔氏だから、親類続きであらう。

「退」を顔回が退くのだとする説と孔子が退くのだとする説とあるが、私は「退席」と取らず、「ひるがへつて」とか「他面」とかいふやうな意味に考へたい。

「發」は「啓發」。孔子様が回を啓發するといふ意味の説と、回が他の門人を啓發するのだとする説とあるが、私は孔子様自身が回によつて啓發されることがあるといふ意味に取る。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、回と一日話をしてゐても、ただハイハイと聽いてゐるだけで、質問もせず議論もせず、わかつたのかわからないのか、マルデ馬鹿みたやうだ。しかしひるがへつて其私生活を觀察すると、このわしをなるほどと啓發するやうな所がある。どうして馬鹿どころではな

50

顔回はいはゆる「大賢ハ愚ナルガ如シ」だつたのであらう。

二六ノ子ノタマハク、其ノ以^ナス所ヲ視、其ノ由^ヨル所ヲ觀、其ノ安^ンズル所ヲ察スレバ、人イヅクンゾ^カ度サ^カンヤ、人イヅクンゾ^カ度サ^カンヤ。

「視」「觀」「察」と重ねてゐるのは、だんだんしくはしく又外から内への意味を、文字の使ひ分けであらはずのだ。

「以」は「爲」と同じ。

「所由」を「由來」すなはち過去の行爲とする説もあるが、「由り基づく所」すなはち動機と考へたい。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『人の善惡正邪を鑑定するには、まづ其行爲の善惡を視るのだが、其外形だけでは本當の所がわからないから、さらに其動機を觀る。しかしそれでもまだ不十分だ。今一つ立ち入つて果して其行爲に安んじ楽しんでゐるかどうかを察するならば、其人物がスツカリわかる。隠せるものか、隠せるものか。』

動機までは誰しも觀察するが、安心立命まで掘り下げるのが、孔子様の人物鑑定法だ。

最後を繰返した所に力がある。

古註は歴史上の實例として左の如く言つてゐる。

『王莽オウマウが未ダ漢ヲ篡クズハザルノ前恭儉禮讓ナリシハ、其ノ善ヲ爲スニ似タリ。モシ其善ヲ爲ス者ヲ視テ君子ト爲サバ、スナハチ王莽ハ君子タラン。伊尹ノ初メ太甲ヲ放チシハ、主ヲ斥シツケ君ヲ逐フモノ、其ノ惡ヲ爲スニ似タリ。其ノ惡ヲ爲ス者ヲ視テ小人ト爲サバ、スナハチ伊尹ハ小人タラン。スベカラク更ニ其事迹シキノ從來スル所ヲ觀テ、以テ其本心ノ主トシテ安ズル所ヲ察スベシ。スナハチ王莽ハ心漢ヲ篡ハンコトヲ主トシ、伊尹ハ君ヲ道ニ致サンコトヲ主トス。ココニ至リテ君子小人ノ實始メテ判ル。其現ニ爲ス所ノ善不善ヲ以テ君子小人ヲ辨別スルノミニ非ズ。』

二七 子ノタマハク、故コキヲ温ウネテ新シキヲ知レバ、以テ師タルベシ。

「故」を「以前に學んだ事」と解するのが通説のやうだが、それでは面白くない。「古コ昔シの事」としたう。「温」をそのまま「アタタメテ」とよむ人もある。一旦煮たものを又煮返すといふ意味の言葉である。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「過去から出發して現在未來に及ぶといふ研究法であつてこそ、はじめて學者たり教師たり得る。」

「温故知新」といつて有名な言葉になつてゐる。學者や教授もとかく温故に停滯したり知新に走り過ぎたりしてはけなう。大變轉期の現在の日本に於て特に温故知新を心がけたいものだ。

参照——四七三

二八 子ノタマハク、君子ハ器ナラズ。

「器」を一事のみに役立つ道具といふ意味に取るのが通説だが、私はむしろ廣く「機械」と解したい。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「君子たるものは、機械であつてはいけない。人間でなくてはならぬ。」

中學生のころ、「教師ハ人ニテ作り物ヲ教ユル道具ナリ」などといふ口さがないことを言つたものだが、人が道具になつては困る。一技一能の専門家になることは結構だが、専門機械でなく、専門人でありたいものだ。そして孔子様となると、専門人でなくて「全人」なのである(二〇七)。

二九 子貢 君子ヲ問フ。子ノタマハク、先ヅ其言ヲ行ヒ、シカル後ニコレニ從フ

「先ヅ行ヒテ其言ハシカル後ニコレニ從フ」とよむ人もある。其方が意味は通るが、前記の方が趣があるやうだ。

X X X X X

子貢が君子を問うた 孔子様がおつしやるやう、「言はんと欲する所を行つて然る後に言ふのが、君子である。

これは孔子様のいつものながらの教訓だが、子貢が言語の人なので特にいはれたのもあらう。

古註に曰く、

『先ヅ其言ヲ行フト、コレヲ未ダ言ザル前ニ行フナリ。シカル後ニコレニ從フトハ、コレヲ既ニ行フノ後ニ言フナリ。』

『子貢ノ患ヒハコレヲ言フノ難キニアラズシテ、コレヲ行フノ難キナリ。故ニコレニ告グルニコレヲ以テス。』

三〇 子ノタマハク、君子ハ周シテ比セズ、小人ハ比シテ周セズ。

「周」は普遍。「比」は偏黨。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「君子は公平無私だから、まんべんなく善人に親しむが、小人は、人の善不善によらず、利害感情によつて偏頗な好き嫌ひをする。』

参照——一八三・三二五・三二八

三一 子ノタマハク、學ビテ思ハザレバスナハチ罔シ、思ヒテ學バザレバスナハチ殆シ。

「學」は聽講讀書。「思」は思索工夫。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『學ぶだけで思はないと道理が明かならず、思ふだけで學ばないと行動が危険だ。』

これは學習と思索との伴はざるべからざることを述べたもので、現代の學問・思想にも適切な名言と思ひ、かつて東大法學部の入試問題として、此語を讀んでの感想をしるせ、といふのを出したことがある。左翼は「學ビテ思ハザル」もの、右翼は「思ヒテ學バザル」もの、といふやうな答案が多かつたが、其中に愉快なのが一通あつた。

『自分は中學時代は「學ビテ思ハザル」者であり、高校時代は「思ヒテ學バザル」者であつたことを悔ひる。幸にして大學に入り得たならば、學びかつ思ひ、思ひかつ學ばう。』
『自分は高校の水泳選手で、初心者コーチしたが、どうしても泳げるやうにならぬ者に、二種類ある。第一種は教へる通りに手足を動かすが自身に浮かう泳がうといふ氣のない者、これは「學ビテ思ハザル」者である。第二種は、浮かう泳がうとあせつてむやみに手足をバタバタさせるが少しも教へる通りにしない者、これは「思ヒテ學バザル」者である。いづれも水泳が上手になれぬ。あにそれ水泳のみならんや。』

三二 子ノタマハク、異端ヲ攻ムルハ斯レ害ノミ。

「異端」は正統學派以外の別派の學。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『學者は正統な聖人の道を專攻すべきで、異端の學の横道に踏み込むのは、有害無益だからやめるがよ。』

諸派の學說を研究することも結局は必要だが、まづ以て本筋の學問を固めよ、と初學者をいましめられたのである。

三三 子ノタマハク、由ヨ、ナンヂニコレヲ知ルコトヲ誨^{オシ}ヘンカ。コレヲ知ルヲコレヲ知ルト爲シ、知ラザルヲ知ラズト爲セ。コレ知ルナリ。

「由」は門人仲由、字は子路、季路ともいふ。孔子より若きこと九歳。孔門隨一の勇者。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『由よ、お前に「知ル」といふことを言つて聞かさうか。知つてゐる事は知つてゐるとし、知らぬ事は知らぬとせよ、それが知るといふことぢや。知らぬ事を知つてゐるとして置くと、つひにそれを知る機會を失ふぞよ。』

子路は正直者で、知つたかぶりをするやうな負け惜みはなさうなことだが、勇氣があり自信が強いので、知らぬ事も知つたつもりに獨斷するおそれがある。それでかういましめられたのであらう。

参照——三〇五

三四 子張祿ヲ干^{モト}ムルコトヲ學ブ。子ノタマハク、多ク聞イテ疑ハシキヲ闕^カキ、慎ミテ其餘ヲ言ヘバ、スナハチ尤^{トガ}メ寡^{スカナ}シ。多ク見テ殆^{アヤク}キヲ闕^カキ、慎ミテ其餘ヲ行ヘバ、スナハチ悔ヒ寡^{スカナ}シ。言^{コト}尤^{トガ}メ寡^{スカナ}ク行^{オコナ}ヒ寡^{スカナ}ケレバ、祿^{ツチ}其中ニ在リ。

子張は門人顓孫師の字。孔子より若きこと四十八歳。「祿」は俸祿、「干祿」は求職。

X X X X X

子張の學問は求職のための氣味があつたので、孔子様がかう言つてさとされた。『なるべく多く聞いて其中で疑はしい事はとりのけ、残りの確かな事だけを慎重に言へば、失言がすくない。なるべく多く見て其中で疑はしい事はとりのけ、残りの確かな事だけを慎重に行へば、後悔がすくない。言ふことに失言がすくなく、することに後悔がすくなければ、俸祿は其事自體に存するのであ

つて、それが絶好の求職であるぞ。』

すなはち學問そのものを目的として勉強修養せよ、就職問題などは自然に解決するものぞ、と教訓し、なほ子張は「師や過ギタリ」(二六八)と評されるほどの先走り、聞いたままを言ひ見たままを行ふきらひがあつたので、言行を慎重にせよ、と注意されたのである。

参照——四四六

三五

哀公問ヒテイハク、何ヲ爲シテカスナハチ民服セン。孔子對ヘテイハク、直キヲ舉グテコレヲ^マ枉レルニ錯ケバ、スナハチ民服セン。枉レルヲ舉グテコレヲ直キニ錯ケバ、スナハチ民服セズ。

原文の「諸」を「コレ」とよんだのだが、「モロモロノ^マ枉レルヲ錯ク」「モロモロノ直キヲ錯ク」とよむ人もある(三〇〇)。

X

X

X

X

魯の哀公が『どうしたら人民が服するだらうか。』とたづねたので、孔子が『正しい人を採用して不正な人の上に立たせれば、人民が服します。不正な人を採用して正しい人の上に立たせれば、人民は服しません。』と答へた。

哀公が君主の意志に人民を従はせる方法を求めたのに對し、政治は人民の意志に従つて爲すべきもの、と答へたのである。哀公といふおくりなのつくほどの殿様だから佞人がはばをきかせて忠臣は退けられ、それを心配しての孔子の進言も、役に立たなかつたのであらう。

三六

季康子問フ。民ヲシテ敬忠ニシテ以テ^ス勸マシメンニハ、コレヲ如何セン。子イハク、コレニ臨ムニ莊ヲ以テスレバスナハチ敬ス。孝慈ナレバスナハチ忠ナリ。善ヲ舉ゲテ不能ヲ教フレバスナハチ勸ム。

「季康子」は魯の大夫季孫家の當主。

「孝慈」については、孟子に「孝子慈孫」とあつて、「慈」も亦父母に對することとの説がある。

X X X X X

季康子が「人民をして上を敬ひ、君に忠に、善を爲すに熱心ならしめるには、どうしたらよいでせうか。」とたづねた。孔子が言うやう、『莊重な態度で人民に接すれば、人民は上を敬ふやうになります。上たる者が父母に孝に子孫を愛すれば、人民は君に忠になります。善人を引き上げ不能者を教導するやうにすれば、人民は自然と善をばげむやうになります。』

當時民心服せず法令行はれず道義頹廢といふ正に我國今日の如き状態だったので、季康子は、前章の哀公と同様、人民を統御する方法の意味で質問したのであるが、孔子様は民心離反の原因が季氏の僭上と失政とにあることを知つてゐるので、例によつて當局者の率先垂範を説き、民を責むるよりは自らを責めよと暗示したのである。我國の今日に於いても、『善ヲ擧ゲテ不能ヲ教フ』る當局の親切が切望される。

参照——二九五・三一六

三七

或ヒト孔子ニ謂ヒタイハク、子ナンゾ政ヲ爲サザル。子ノタマハク、書ニ云フ、孝ナルカナコレ孝、兄弟ニ友ニ、有政ニ施スト。コレ亦政ヲ爲スナリ。ナンゾソレ政ヲ爲スコトヲセン。

「書」は書經。此文句の出所については議論があるらしいが、漢學専門家の問題だから、略して置かう。

「書ニ孝ヲ云ヘリ、コレ孝ニ」とよむ人もある。

「有政」の「有」は、「有衆」などの場合のやうに、無意味の添え文字。「政」は「家政」の意味、と普通に説明するが、家政國政をひつくるめた意味に解する方がよくはないだらうか。

X X X X

或人が「先生はなぜ政治をなさらないのですか。」とおたづねした。孔子様がおつしやるやう、書經に「父母に孝に兄弟に友に、それが政治に移り及ぶ。」といふ意味の言葉がある。すなはち家を齊へることも亦政治なのであつて、自分は其方に力を入れてゐるのだ。其以上必ずしもいはゆる政治をする必要はないではないか。』

これは孔子様の晩年魯の國に歸られた後の話だとする人もあるが、必ずしもさうと限らないでもよからう。「修身・齊家・治國・平天下」が一聯の政治であることが、孔子様の持論である。今日の政治は孔子様の時代よりは複雑にして技術的だから、當局者が善良な家庭人なるが故に必ず政治がうまく行くとはいへまいが、政治家が善良な家庭人であることが望ましいことは、すこしも變りがない。そして又一般人も、單に一家の私事としてでなく、天下國家の政治としてめいめいの身を修め家を齊へてもらひたいものだ。

三八 子ノタマハク、人ニシテ信無クバ其可ナルヲ知ラズ。大車輓無ク小車軌無クンバ、ソレ何ヲ以テコレヲ行ランヤ。

「輓」も「軌」も、其制式は知らないが、車のながえのはしに横木を固着させるしかけ。大車と小車とで装置がちがふので、名もちがふ。それがなければ横木がとまらず、したがつて牛馬を車につなぐことができないので、車にとつて必要缺くべからざるもの。信がなければ人と人をつなぐことができないといふところからそれにとへたのだ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『人に信がなくては問題にならない。ちやうど車のながえのはしの横木止めがないやうなもので、たとひ車の形はしてゐても、大きい車も小さい車も進行させやうがなすではなすか。』

三九 子張問フ、十世知ルベキヤ。子ノタマハク、殷ハ夏ノ禮ニ因ル、損益スル所知ルベシ。周ハ殷ノ禮ニ因ル、損益スル所知ルベシ。ソレ或ハ周ヲ繼グ者、百世ト雖モ知ルベキナリ。

「世」は王朝交替の一代、すなはち明から清になり清から國民政府になるといふやうな、支那のいはゆる易姓革命の各時代である。「禮」は國家の根本法たる禮制。

X X X X X

子張が『十世代先までわかるものでござりませうか。』とおたづねした。先生はしきりに禮を説かれるが、十世代先も同じ禮が通用するものでせうか、といふ意味だつたらう。そこで孔子様がおつしやるやう、過去の歴史を観ると、夏から殷になつたとき、禮制はそのまま受け繼いだもち

ろん多少は削つた所も加へた所もあるが、それは知れたもので、大綱はかはらなかつた。現在の周も亦殷の禮に小修正を加へたものに因つてゐる。今後周の天下に取つてかはるものがあるかも知れないが、禮の根本はかはるはずがない。十世どころか、百世先までわかるぞよ。』

此豫言は歴史上みごとにはづれたではないか、との批難があらう。しかし孔子様のは現實の制度論ではなくて根本道義の論であり、事實の豫言ではなくて、信念の表明である。今日のわれわれは、一方では十世どころではない明日の専來年の事もわからないやうな氣持もするが、しかし日本國の根本大義については、「百世ト雖モ知ルベキナリ」の確信をもちたいものだ。

四〇

子ノタマハク、其鬼ニアラズシテコレヲ祭ルハ諂フナリ。義ヲ見テセザルハ勇無キナリ。

「鬼」は「オニ」とよまずに「キ」とよむ。角のはえた鬼ではなくて「カミ」である。「天ニ在リテハ神トイヒ、地ニ在リテハ祇トイヒ、人ニ在リテハ鬼トイフ。」とあるのがそれだ。

本章は二個の訓言が誤つて一續きになつたものと思はれる。強ひて結びつけて説明しない方がよい。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「祖先の靈といふやうな當然祭るべきもの以外を祭るのは、鬼神にへつらふ卑劣な精神ぢや。』

「眼前に正しい事を見ながらそれが斷行できないのは、勇氣がないといふものぢや。』

「義ヲ見テセザルハ勇無キナリ」は、眞にわれわれ道德上の臆病者を奮起せしめるに足る名言だが、同時にしばしば濫用されて輕舉妄動のキツカケになる言葉でもある。要は眼前の事柄が義なりや否やの正しき判斷である。

八 佾 第三

本篇には禮樂に関する訓言が多い。殊に權臣が禮樂の大義名分を亂したことを責める意味が強い。第一章からがそれだが、篇名を「初二文字」の例を破つて「八佾」としたのなども、八佾問題に重きをおく趣旨らしい。

四一 孔子季氏ヲ謂フ。八佾庭ニ舞ハス。コレヲシモ忍ブベクンバ、イヅレヲカ忍ブベカラザラン。

「季氏」は魯の大夫季孫氏。他の仲孫（孟孫）叔孫とともに「三家」と呼ばれ、又桓公の子孫といふところから「三桓」ともいふ。仲・叔・季といふ順のはずだが、季氏は嫡出の家なので、一番勢力があつたらしい。論語でも季氏が最も問題になつてゐる。

「佾」は舞の名。それを舞はせる人の資格によつて舞列と人數とがちがふのであつて、天子は八佾・諸侯は六佾・大夫は四佾・士は二佾といふことになつてゐる。すなはち天子は八列八人づつで六十四人、諸侯は六列六

人で三十六人、大夫は四列四人で十六人、士は二列二人で四人の舞手を立たせるのである。（列は常に八列だといふ説もある。どちらが本當か知らないが、前記の方が人數の相違が多くて、話が面白い。）十何年前の事だが、朝鮮京城の李王家の古樂を拜聴したとき、今は支那本國にも無くなつてゐる樂器や舞衣の保存されてゐるのを珍しく觀た。其中に佾の舞の衣裳もあつたが、朝鮮は六佾だと聞かされて、なるほどと思つた。昔の朝鮮王は支那の天子の下の諸侯なのだから六佾なのだが、季氏は大夫だから四佾たるべきだ。すなはち舞手が十六人であるべきのを六十四人出したことになる。なほついでながら、朝鮮にはさやうな東洋古文化の記念物が相當に残つてゐるのだから、今後朝鮮がいかなることにならうとも、それらの貴重品は大切に保存してもらひた

しものだ。
X X X X

孔子様が季氏を評しておつしやるやう、『季氏は家廟の祭の時に前庭で八佾を舞はせた。陪臣の分際で家廟を設けるさへあるに、天子の舞樂を舞はせるとは、何たる僭上ざたぞや。かやうな事が平氣でできるとしたら、どんな大逆無道をもしかねまい。』

最後の二句を『これが勘辨できるならどんな事でも容赦できないことはない』の意味に解する人もある。

四二 三家ハ雍ヲ以テ徹ス。子ノタマハク、相クルハコレ辟公、天子ハ穆穆タリト。
ナンゾ三家ノ堂ニ取ラン。

「雍」は詩經中の篇名。

「辟公」は諸侯のこと。

X

X

X

X

魯の大夫三家が家祭の場合に供物をささげるとき雍の詩をうたはせる。孔子様が非難しておつしやるやう、雍の詩には、諸侯が祭のおてつだいをして、天子は上品にすはつてござる。といふ意味の、陪臣三家の堂上には似合ひもつかぬ文句がある。一家の祭にそれを歌はせるとは、僭上も僭上だが、物を知らぬにもほどがある。」

四三 子ノタマハク、人ニシテ不仁ナラバ禮ヲ如何。人ニシテ不仁ナラバ樂ヲ如何。

論語の文章で特に感心するのは、かういふやさしい文句の力強さである。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、「不仁不徳の人が禮を行つたと何になるか。不仁不徳の人が樂を奏したと何になるか。禮樂が泣かうぞ。」

論語の各章は必ずしも順序立てたものではないが、本章と次章などは、おのづから前二章の結論になつてゐる。

四四 林放禮ノ本ヲ問フ。子ノタマハク、大ナルカナ問ヤ。禮ハソノ奢ランヨリハムシロ儉ナレ。喪ハソノ易メンヨリハムシロ戚メ。

「林放」は魯の人、門人かどうかハッキリしないが、後の章(四六)によると、若い學徒らしい。

X

X

X

X

林放が禮の根本義をおたづねした孔子様がおつしやるやう、「これは大した質問かな。冠婚の如き吉禮は、金をかけるよりも儉約過ぎるくらゐがよい。葬祭の如き凶禮は、行届くよりも哀悼の氣持が大切ぢや。」

禮が形式末節に走つて根本が留守になつてゐたのをなげいて居られたところだったので、林放の此質問を「大ナルカナ」と喜ばれたのだ。しかし其根本的質問に對しても、それは要するに正心誠意ぢや、といふやうな抽象論でなく、具體的な答をされる所が孔子様だ。

「ムシロ」は「どちらかといへば」である。すなはち、ケチケチせよ、泣きさへすればよい、と言はれるのではない。形式も大切だが虚榮や事務になつて精神を失つてはならぬ、と説かれたのである。我國でも、今日ではやむを得ず粗略過ぎることになつてしまつたが、明治末期から大正へかけての婚禮や葬式がバカバカシク大げさだつたことを思ひ出す。

参照——六六・四八二

四五 夷狄ノ君有ルハ、諸夏ノ亡キガ如クナラザルナリ。

「夷狄」は、東夷・南蠻・西戎・北狄といつて、野蠻國のこと。江戸の道樂書生は四境の遊所のことを隠し言葉で、東夷（洲崎）・南蠻（品川）・西戎（新宿）・北狄（吉原）と言つたよし。「北狄のためにユウリに囚はれる」といふ川柳がある。

「夏」は、今日の「華」と同じく、支那本國の自稱。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「夷狄といつていやしむ野蠻國にも、レッキとした君がある。君有つて君無きにひとしきわが中華諸國のやうなものではない。」

これは當時の支那諸國の大義名分が亂れたのをなげかれた言葉と思ふ。ところが「諸夏ノ亡キニ如カザルナリ」とよんで、夷狄には君があつても禮樂がないから諸夏の君なきにも及ばぬ、の意とする正反對の説がある。孔子様がそんな「愛國馬鹿」を言はれるだらうか。同時に又、これは日本の國體を傳へ聞いての話だ、とする本邦學者があるとすれば、今度はこつちが「愛國馬鹿」だ。

四六

季氏泰山ニ旅セントス。子冉有ニ謂ヒテノタマハク、ナンヂ救フコト能ハザルカ。對ヘテイハク、能ハズ。子ノタマハク、嗚呼カツテ泰山ハ林放ニ如カズト謂ヘルカ

「泰山」は當時魯の領内の名山、「泰山ニ登リテ天下ヲ小ナリトス。」などといふ言葉がある。

「旅」は山の祭。天子なり諸侯なりがすべき祭であるのを、大夫たる季氏がしようとするから、僭上なのである。

「冉有」は門人冉求、字は子有、孔子より若きこと二十九歳。

X

X

X

X

季氏が泰山の祭をしようとした。そこで孔子様が當時季氏の執事だつた門人冉有に、「とんでもない非禮僭上な事だが、お前は其過ちをただし救ふことができなにか。」と言はれた。すると冉有が「もはや決定してしまつて、やめさせるわけにまゐりません。」と答へたので、孔子様が慨歎しておつしやるやう、「ああ泰山の神が林放に及ばぬと思つてゐるのか。林放でさへ禮の根本を心得て質問をしたではないか。泰山の神がどうしてさやうな非禮の祭を受けられようぞ。」

四七

子ノタマハク、君子ハ争フ所無シ。必ズヤ射カ。揖讓シテ升リ、下ツテ飲ム。其争ヒヤ君子。

「揖」は両手を胸の前で組み合せて上げる支那風のあいさつ。

「升下而飲」を「ノボリクダリシカシテノマシム」とよむ人もある。負けた者に罰杯を飲ませるので、それは堂上であるのだから、さうよむ方が古射禮にかなふ、といふのだ。或はさうかも知れないが、前記のよみ方が面白い。強いて罰杯といはないでもよからうし、「升ル」のは、堂上といはんよりは、むしろ射場といふべきだらう。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、「君子は争ひを好まず、したがつてあまり勝負事をしないが、するとすればまづ弓の競射か。たがひに一禮し「どうぞおささへ」とゆづりあつて射場にのぼり、勝負がさまり射場をおりてから仲よく酒を飲む。其争ひはまことに君子らしい。」

撃劍とか角力とかいふことになる、相手を打つとか投げるとかいふ直接の鬪争なので孔子様は好まれず、競べ弓は相手を射るのではなく的にあてあふのだから、これならばと言はれたのだらう。今日のスポーツ観念から言ふとあまりにも古くさいが、「其争ヒヤ君子」といふ所に重點があるのだ。いはゆる「フェア・プレー」で、スポーツのみならず、政争も今後願くは「君子ノ争」でありたい。そして又今日のやうに、何かといふとすぐ「鬪争」にしたがるのは面白くない。孔子様も當時の鬪争氣分を心配して、「争フ所無シ」といはれたのだらう。

四八 子夏問ヒテイハク、巧笑倩タリ、美目盼タリ、素以テ絢ヲ爲ス、トハ何ノ謂ゾ
 ヤー子ノタマハク、繪ノ事ハ素キヲ後ニス。イハク、禮ハ後カ。ノタマハク、
 ワレヲ起ス者ハ商ナリ、始メテ與ニ詩ヲ言フベキノミ。

「倩」は愛嬌エクボ。

「盼」は字面通り黒目と白目とがキツパリ分れてゐること。

「素」は白粉（おしろい・ごふん）。

「ワレヲ起ス者ナリ、商ヤ始メテ」と切る人もある。

「起」は前に出た「發」（二五）と同じ。

X X X X X

子夏が「詩に「笑み上手で愛嬌をくほ、美しい目がバツチリと、おしろいつけてさてもあでやか。」とあるのは、何の意味でござりますか。」とおたづねした。孔子様が「繪でいへば、まづ彩色をして最後にごふんで仕上げをするやうなものぢや。」と言はれた。すると子夏が「なるほど禮は仕上げでござりますな。」と言つたので、孔子様が感心しておつしやるやう、「商にはわしも教へられる。そこまでは思ひつかなかつた。さても詩の話せる男かな。」

「繪ノ事ハ素ヨリ後ニス」とよんで、まづごふんで下塗をの上に彩色を施す、といふ意味に解する人もあるが、前後の関係上前記の方がよささうだ。美人が頬紅をつけた上におしろいをはいて一そう紅顔が美しいやうに、又繪も最後にごふんで仕上げをして五彩が引立つやうに、色ならば白にたとふべき純正な禮が人の行爲の最後の仕上げであつて、心の誠がなければ禮も虚禮であり、禮がなくては心の誠もあらはれぬ、といふ意味になるのだ。

子貢も同じほめ言葉を頂戴した（一五）。

古註に曰く

『子貢ハ、學ヲ論ズルニ因リテ詩ヲ知リ、子夏ハ詩ヲ論ズルニ因リテ學ヲ知ル。故ニ皆與ニ詩ヲ言フベシ。』

四九

子ノタマハク、夏ノ禮ハワレ能クコレヲ言ヘドモ、杞徵スルニ足ラザルナリ。殷ノ禮ハワレ能クコレヲ言ヘドモ、宋徵スルニ足ラザルナリ。文獻足ラザルガ故ナリ。足ラバスナハチワレ能クコレヲ徵セン。

「杞」も「宋」も國名。「杞人天ノ墜ツルヲ憂フ」といふので「杞憂」といふ熟語が出来、宋の襄王が敵が陣を固めない前に討つのは不仁だと言つて機を失ひ敗戦したといふので、「宋襄ノ仁」といふ諺がある。「文獻」は今日では文書の意味に用ひるが、元來「獻」は「賢」で、賢人のこと。

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、「わしはよく夏の禮制の話をするが、夏の子孫の國なる杞に十分な證據の残つてゐないのが残念だ。わしはよく殷の禮制の話をするが、殷の子孫の國なる宋に十分な證據の残つてゐないのが残念だ。つまり古文書が缺け又故制を知る賢人がゐないからで、もし文書と

賢人とがあれば、わしの言葉の證據にならうものを。」

五〇

子ノタマハク、禘ノ既ニ灌イデヨリノチハ、ワレコレヲ觀ルヲ欲セズ。

「禘」は天子の行ふ大祭、それを魯の國で行ふこと自身が、國初からの慣行ながら孔子様の是認されぬ所であるが、それが又形式に流れて誠意がこもつてゐないので、「見たくでもない」と言はれたのだ。「灌」は酒を地にそそいで降神かみかみをすること。

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、「禘の祭も、降神あたりまではまだよいが、其以後はだれてしまつて、觀て居られん。」

五一

或ヒト禘ノ說ヲ問フ。子ノタマハク、知ラザルナリ。其說ヲ知ル者ノ天下ニ於ケルヤ、ソレコレヲココニ示ルガ如キカト。其掌ヲ指ス。

最後の一句で孔子様が紙上に活躍する。名文だ。

或人が禘の祭の意義をわたづねした。孔子様は、『わしは知らん。もし禘の意義を知る者が天下を治めたならば、そのよく治まることは、ここにのせて目に見るやうに確かなことぢや。』と答へて、右の手の指で左の手の平をさされた

孔子様は元來魯の國で禘の祭を行ふことを是認されぬので、禘の意義を説明すると、自然祖國たる魯を非難せねばならぬから、「知ラザルナリ」と答へたのであらう。しかし禘の説を知つてゐれば天下は治まるはずだと語つて、かやうな大切な祭の根本義をわきまへず、みだりに又形式的にこれを行ふやうなことだから、政治がうまく行かないのだ、と暗示されたのである。

五二 祭ルニ在スガ如ク、神ヲ祭ルニ神在スガ如シ。子ノタマハク、ワレ祭ニ與カラザレバ、祭ラザルガ如シ

初二句は古語だとする説もあるが、孔子様の態度をしるしたものを見たい。

X X X X X

孔子様が祖先の祭をなさる場合には、あだかも御先祖様がそこにござる如く、又神を祭られるには、神が目の前に出現された如き御様子であつた。そして常に『自身祭に參列しなくては祭つたやうな氣持がしない。』と言はれた。

ズット以前の事だが、朝鮮京城に行つたとき、有名な大院君がなくなつた直後で、其邸内の家廟に當主服喪のための假小屋がしつらへてあるのを觀た。古禮にかなつた設備で、面白く思つたが、さらに面白く感じたのは、床下に人がはいれるやうに穴のあいてゐることであつた。そこへ「泣き男」がはいるのださうで、喪主が堂上で禮拜して慟哭するはずの所を、えんの下の雇はれ男が代つて泣き、しかも堂上の喪主も實は代人なのだといふことだつた。孔子の時代にも王公大夫の祭はおそらくそんな事だつたのだらうが、孔子様は眞心こめて自身で祭られたのである。

五三 王孫賈問ヒテイハク、其奥ニ媚ビンヨリハムシロ、竈ニ媚ビヨトハ、何ノ謂ゾヤ。

子ノタマハク、然ラズ。罪ヲ天ニ獲バ禱ル所無キナリ。

「奥」は奥の間の神。位置は尊いが、つかさどる所がないといふので、いはゆる「統シテ治セザル」君主に比する。「鼈」は「ヘツツイ」の神。位置は低いが臺所をつかさどるので、權勢ある重臣にたとへる。

X

X

X

X

孔子様が衛の國に行かれたとき、大夫の王孫賈が、「奥の神よりもヘツツイの神のごさげんをとれ、といふ諺があるが、何の意味でござらうかな。」と問ひかけた。孔子様が答へられるやう、『どの神のごさげんをとる必要もありません。最後の審判は天にあります。一旦天に對して罪を犯したならば、何神にいのつてもむだでござる。』

王孫賈が、もし此國で用ひられようと思ふならば、殿様よりもわしの所へ顔出ししたらどうだ。とほのめかしたのに對して、孔子様は、私は罪を天に獲て居りませんから、何神様におまいりする必要もござらぬ、とはねつけたのである。孔子様は時々かやうに、直接法でなくてそして強い言葉で相手をたしなめられることがある。王孫賈は後に孔子様の「軍旅ヲ治ム」といふほめ言葉が出てゐるほどの名臣だから（三五）そんな事を

言ふはずがない、といふ人があるが、それでは話が面白くない。なるほどよく「軍旅ヲ治ム」たかも知れないが、したがつて又軍閥の大御所ではばつてゐたのだらう。

五四 子ノタマハク、周ハ二代ニ監ミテ郁郁乎トシテ文ナルカナ。ワレハ周ニ從ハン。

「郁郁」は「文盛貌」とある。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『周は夏殷二代の制度を參考にして盛んな禮樂文物を建設した。それが今くづれかけて來たのは、まことになげかはい。わしはあくまで周の文化を護持したい。』

五五 子大廟ニ入リテ事毎ニ問フ。或ヒトイハク、タレカ鄒人ノ子禮ヲ知ルト謂フヤ、大廟ニ入リテ事毎ニ問フト。子コレヲ聞キテノタマハク、コレ禮ナリ。

「大廟」は魯の先祖周公の廟。

「鄒人ノ子」とは、孔子様の父が鄒といふ土地の長官だつたことがあるので、さう言つたのだが、名を知りながらかういふ呼び方をするのは、軽く見た失敬な口振りだ。なほかういふ場合に「何ジン」でなく「何ヒト」とよむならばしになつてゐる。

X X X X X

孔子様が大廟に参拜し又祭にたづさはるとき、これをどう致すのですか、次に何がござりますか、と事毎にたづられた。そこで或人が、「あの鄒人の息子は禮を心得てゐるなどとは一體誰が言つたのか。大廟にはいると一々物をさいてまごついてゐるではないか。」と蔭口をきいた。孔子様がそれを傳へ聞いておつしやるやう、『それが禮なのぢや。』

すなはち「事毎=問フ」といふことが大廟奉仕の禮なのだ、といふのであつて、もちろん儀式の次第は知つてござるが、知つたかぶりにズンズンやらすに、何も知らぬ如く係の者にたづねながら進退されるところが、孔子様らしい。イヤ孔子様が禮を御存知ないはずはないから、これは實際まだ諸禮に習熟して居られなかつた出仕始めの若い時の話だ、といふ人もあるが、むしろさう考へない方が味がある。しかし私自身としては、思ひも寄らなかつた御宮仕へをすることになつたとつさに、此文句が心に浮んで、「事毎=問ヒツツ」御奉公し

ようと考へたことだ。

五六 子ノタマハク、射ハ皮ヲ主トセズ。力科チカラノヲ同ジクセザルガタメナリ。古ノ道ナリ。

「皮」は的の中央の皮の張つてある部分、強弓ならば皮をつらぬく。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『弓を射るのに的皮マシカを射ぬくかどうかを要點としない。人の力には強弱があつて一様でない故、必ず的皮を射ぬけといつても無理だからであつて、それが昔の弓道である。しかるに今日では其古道が忘れられて、弓術が的皮を射ぬく力くらべになつてしまつた。なげかほしいことぢや。』

弓だけでなく、すべてが力の時代になつたことを諷されたのであらう。

初句を、心がまへと作法とが大切で的にあつてゐることを主とせぬ、といふ意味に解する説もあるが、それだと

第二句との連絡がつかぬ。

五七 子貢告朔ノ餼羊ヲ去ラント欲ス。子ノタマハク、賜ヤ、ナンチハ其羊ヲ愛ム。
ワレハ其禮ヲ愛ム

毎年冬天子が來年の曆を諸侯に領ち、諸侯はそれを祖廟に藏め、毎月朔日に諸侯は羊の生肉を供物にして（「餼」は煮焼せぬいけにえ）朔日を奉告し、其月の曆を民間に施行することになつてゐた。それが「告朔」である。ところが魯では當時告朔の禮はすたれてゐたのに、毎月朔日に羊を殺して供へてゐた。

X X X X X

子貢が、告朔の禮がすたれたのに羊を殺すのはむだだからやめにしたら、と考へた。孔子様がおつしやるやう、「賜よ、お前は羊をおしむが、わしは禮がおしい。」

せめては古禮のかたみたる供物が残つてゐるのに、それまでやめてしまつたら、古禮は全く忘れられて復興の機會がなくなつてしまふだらう、といふのが孔子様の氣持である。虚禮ではもとよりつまらぬが、虚禮だから廢すべしとのみ考へずに、虚禮を虚禮でなくする工夫もせねばなるまい。

五八 子ノタマハク、君ニ事ヘテ禮ヲ盡セバ、人以テ諂フト爲ス。

「盡」は、當然爲すべき所を十分にすること。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「君に對して禮を盡すのは當然の事なのに、今の人はそれを見てオベツカだとそしる。」

これは孔子様自身に對する世人のそしりを心外とされての言葉らしい。荻生徂徠曰く、
『三家強クシテ公室弱ク、人皆三家ニ附キテ公室ヲ輕ンズ。習ヒ以テ常トナル。故ニ孔子ヲ以テ諂ヘリトナス者コレ有リ。而シテ孔子俗ニ違ヒテ必ず其禮ヲ盡ス。亦以テ公室ヲ張り三家ヲ抑フル所以ナリ。』

五九 定公問フ。君臣ヲ使ヒ、臣君ニ事フルコト、コレヲ如何。孔子對ヘテイハク、

君臣ヲ使フニ禮ヲ以テシ、臣君ニ事フルニ忠ヲ以テス。

定公は魯の君。當時かの三家の僭上横暴に苦しんで、かういふ問を出したのだらう。

X X X X X

定公が『君が臣を使ひ、臣が君に事へるには、どうあるべきだらうか。』とたづねた。孔子が答へて申すやう、『君たる者は禮を以て臣を使ひ、臣たる者は忠を以て君に事ふべきであります。』

定公は孔子の答があまりにも平凡なのに失望したかも知れない。しかし此平凡事さへ行はれないのが、魯の現状だつたのだ。孟子は『君ノ臣ヲ視ルコト犬馬ノ如クナレバ、スナハチ臣ノ君ヲ視ルコト國人ノ如ク、君ノ臣ヲ視ルコト土芥(ドロアクタ)ノ如クナレバ、スナハチ臣ノ君ヲ視ルコト寇讎(アダガタキ)ノ如シ。』と言つたが、孔子様のはさやうな相互主義ではない。「スナハチ」と條件的に言はぬ所を注目すべきで、君臣をそれぞれ其道を盡すべし、と言はれるのだ。

六〇 子ノタマハク、關雎ハ樂シンデ淫セズ、哀シンデ傷ラズ。

「關雎」は詩經の有名な一篇だが、文王の后が夫のためによき側室を得たしと苦心し、それを得ては妻妾仲よく内助した、といふことを歌つたのであつて、今日の道徳からは變なものだが、孔子様の言はんとする所は、其詩の文句なり又それを歌ふ音楽なりが極端過度ならぬにつけて、喜びにも悲みにも節制あるべし、といふことである。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『關雎の詩は、樂みの度が過ぎて正しき道をはづれず、悲みの度が過ぎて本心を取り失はぬもので、誠に結構ぢや。』

「樂」と「哀」と「淫」と「傷」との對句で、實に金言だ。すぐ有頂天になるかと思ふとたちまちペシヤンコになるやうなことでは、問題にならなう。

六一 哀公社ヲ宰我ニ問フ。宰我對ヘテイハク、夏后氏ハ松ヲ以テシ、殷人ハ柏ヲ以テシ、周人ハ栗ヲ以テス。イハク、民ヲシテ戰栗セシム。子コレヲ聞キテノタ

マハク、成事ハ説カズ、遂事ハ諫メズ、既往ハ答メズ。

「社」は文字通り土地の神の社であつて、一定の木を植えて神體としたものらしい。宰我は門人宰予、字は子我。辯才で子貢とならべられてゐるが、ここでは口が過ぎて叱られ、後には口ほどでもない叱られ、いはゆる十哲中では優等生でないやうだ。(一〇一・四五二)

「柏」は日本では「カシワ」とよむが、支那では「松柏ノ凋ニ後ル」(二三三)などといつて、ときは木の「カヤ」である。ここでは「栗」を「リツ」と音でよまなくては「慄」と通ずるシヤレにならぬ故、「松」「柏」も「シヨウ」「ハク」とよむ。
最後の三句は當時のことわざらしい。

X

X

X

X

哀公が社の神木について宰我にたづねたとき、宰我が「夏の時代には松を用ひ、殷の時代には柏を用ひ、周になつてから栗を用ひるやうになりました。それは人民を戦慄させる、といふ意味であります。」と答へた。孔子様が其事を聞いておつしやるやう、「出来た事は言ふまい、濟んだ事は諫めまい、過去はとがめまいが、將來はさやうな餘計なこぢつけを申すまいぞ。」

故實を述べるだけにして置けばよかつたのに、例の口が過ぎた上に、先生大嫌ひな恐嚇政治が周の國是のやうに言つたので、眞綿で首をしめるやうな御小言を頂戴したのだ。

六二

子ノタマハク、管仲ノ器小ナルカナ。或ヒトイハク、管仲ハ儉ナルカ。ノタマハク、管氏ニ三歸有リ。官事攝ネズ。イツクンゾ儉ヲ得ン。然ラバスナハチ管仲ハ禮ヲ知ルカ。ノタマハク、邦君樹シテ門ヲ塞グ。管氏モマタ樹シテ門ヲ塞グ。邦君兩君ノ好ヲ爲スニ反玷有リ。管氏モマタ反有リ。管氏ニシテ禮ヲ知ラバ、タレカ禮ヲ知ラザラン

管仲は齊の桓公を輔佐して覇業を成就した有名な英雄。

「三歸」を妻を三人もつこととする人もあるが、儉約かどうかといふ問題だから、「三歸臺」といふ「うてな」と解して置かう。臺を造るといふことが昔の支那の王公のせいたくさたなのだ。

「官事」はここでは「家事」といふくらの意味。「反玷」は盃を伏せる臺。

X

X

X

X

孔子様が「管仲の人物は小さいのう。」とおつしやつた。そこで或人が、それをケチケチしてゐるといふ意味と思つて、『管仲は儉約なのですか。』とおたづねした。『管仲は家に「三歸臺」といふ「うてな」を設けたり、一人一役で大勢召使を置いたりするぜいたくさたであつた。どうして儉約なものか。』『それでは管仲は禮を知つてそれにこだはるので、人物が小さいとおつしやるのですか。』『諸侯の屋敷では門内に植込みを作つて目かくしにするさまりだが、管仲は大夫の分際で私邸の門内に目かくしの木を植えた。又諸侯の交際の宴會に反坫といふさかづき盃臺をつかふことになつてゐるところ、管仲も反坫を用ひた。管仲が禮を知つてゐるといふならば、誰が禮を知らぬものがあらう。』

管仲の覇業は孔子様も認められたこと、後に見えるが(三四八)、手柄におごつて僭上非禮をするやうなことで人物が小さい、と評されたのである。

六三 子魯ノ大師ニ樂ヲ語ゲテノタマハク、樂ハソレ知ルベキナリ。始メ作スニ翁如タリ、コレヲ從テテ純如タリ、噉如タリ、繹如タリ、以テ成ル。

「大師」は樂官の長。「タイシ」とよむ。「ダイシ」だと弘法様になる。

「翁」は合、「純」は和、「噉」は明、「繹」は聯、そして「如」は然と同じ。

「從」は縦と同じ、思ふままに十分な音を出すこと。

X X X X

孔子様が魯の樂長に音樂論をしておつしやるやう、音樂には一定の型がある。演奏の始めに諸樂器の音が揃つて出るが、演じ進んで十分に調子を張ると、すべての音が調和して一音となり、しかも各樂器の音が明かにきこえて互に消し合はない。そして連続して絶ゆることなく終節に至るのぢや。』

孔子様はけつしてコチコチの道學先生ではなく、いつぱしの音樂理論家であり、音樂鑑賞家であり、又音樂實演者であつたことは、だんだんと出て来る。何しろ本職をつかまへて音樂論をされるのだから、大したものだ。そして其議論が西洋音樂シンフォニー論、ソナタ形式論のおもむきがあるではないか。

六四 儀ノ封人見^ヒエンコトヲ請ヒテイハク、君子ノココニ至ルヤ、ワレ未ダカツテ見
 ユルコトヲ得ズンバアラズト 從者コレヲ見エシム。出デテイハク、二三子何
 ゴ喪フコトヲ患ヘンヤ 天下道無キヤ久シ。天マサニ夫子ヲ以テ木鐸ト爲サン
 トス

「木鐸」は金口木舌のベルであつて、文事のおふれを出すときに振る。武事には金口金舌の「金鐸」だといふ。「木鐸」と言つた所に特に意味がある。

X X X X X X

孔子様が衛の國を去らうとして、國境の儀の町にとまつたとき、關守の役人がおめにかかりたいと申し出て、『諸名士がここを通られるとき、私はいつもおめにかかせていただいてゐます。』と言つたので、御供の門人たちが孔子様の御部室に通した。やがて出て来て云ふやう、『諸君は、先生が今志を得ずして此國を去られるとて、何も悲觀することはありませんぞ。今や道義地におちて天下亂ること久しいので、天が先生を一國にとどめずして四方を周遊せしめ、大に文教を振興する木鐸たらしめやうとするのです。』

孔子様は別として門人たちは、どこへ行つても御拂箱をくふので、おそらくシヨゲてゐたのだらう。ところが此封人は孔子様におめにかかつて大に敬服し、君たちの先生は天の大使命を負つて居られるのですぞ、諸君も元氣を出してシツカリしなさい、と門人たちを激勵したのである。「天下をねらふ大伴の黒主」ではないが、「儀ノ封人」なる者、ただの關守ではなささうだ。

六五 子韶^{シウ}ヲ謂フ。美ヲ盡セリ。又善ヲ盡セリ。武ヲ謂フ。美ヲ盡セリ、未ダ善ヲ盡
 サズ。

X X X X X X

「韶」は舜の音樂。舜は讓りを受けて天下を得たので、其音樂には平和の氣がみなぎつてゐる。「武」は周の武王の音樂。武王は武力で天下を得たので、其音樂には壯大の中に殺伐の氣を含んでゐる。

孔子様が舜の音樂「韶」を評して、『美を盡し又善を盡せるものかな』といはれた。又周の武王の音樂「武」を評して、『美を盡してゐるがまだ善を盡しておらぬ』といはれた。

孔子様は、舜には満點を與へたが、武王の「臣トシテ君ヲ伐ツ」た、ことに釋然たらざるものがあつたので、兩者の音楽にも「美ニシテ善ナリ」の感じと「美ナレドモ善ナラズ」の感じとをもたれたのである。孔子様が藝術の基礎に道德を置く考へ方と其平和主義とがあらはれてゐる。

参照——一六〇

六六 子ノタマハク、上ニ居テ寛ナラズ、禮ヲ爲シテ敬セズ。喪ニ臨ンデ哀シマズ。ワレ何ヲ以テコレヲ觀ンヤ。

「喪ニ居ル」といへば親の喪に服すること、「喪ニ臨ム」といへば他人の葬式に會葬すること。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「人の上に立つて寛大でなく、禮式を行ふ場合に敬意を缺き、葬儀に參列して哀悼の氣持がないやうでは、全く見どころがないではないか。」

里 仁 第 四

此篇は主として仁徳の修養を説く言葉を集めてゐる。

六七 子ノタマハク、里ハ仁ヲ美ト爲ス。擇ビテ仁ニ處ラズンバ、イヅクンゾ知ヲ得ン。

「仁ニ里ルヲ美ト爲ス」とよむ人もある。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、住むには仁徳の風俗厚き地方がよろしい。住むべき「仁の里」の選擇ができないやうでは、知とはいへない。

三遷した孟母などは、「擇ンデ仁ニ處ル」知者だつたのだ。

六八 子ノタマハク、不仁者ハ以テ久シク約ニ處ルベカラズ、以テ長ク樂ニ處ルベカラズ。仁者ハ仁ニ安ンジ、知者ハ仁ヲ利ス

「約」は貧賤困窮、「樂」は富貴安樂。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、「不仁な者は久しく逆境に在り得ない。しばらくは辛抱もするが、まもなく苦しきに悪事をはたらき、又長く順境にも在り得ない。はじめは自制謹慎もしようがやがて意満ち心ゆるんで驕慢奢侈に流れる。仁者は仁が身に附いてゐるし、知者は仁の利益を知つてゐるから、境遇に左右されぬが、不仁無知なる者はさうは行かぬ。」

最後の二句について伊藤仁齋が、

「仁者ノ仁ニ於ケルハ、ナホ身ノ衣ニ安ンジ足ノ履ニ安ズルガ如シ。須叟モ離ルレバスナハチ樂ムコト能ハズ。コレコレヲ安ト謂フ。知者ノ仁ニ於ケルハ、ナホ病ム者ノ藥ヲ利シ、疲ルル者ノ車ヲ利スルガ如シ。」

常ニコレト相安ズルコト能ハズト雖モ、深クソノ美タルコトヲ知リテ捨テズ。コレコレヲ利スト謂フ。」
と言つたのは、要領を得てゐる。

今日の私たちはよほどシツカリ「久シク約ニ居ル」覺悟をかためねばならぬ。かりにも取り亂して、不仁不知と世界の笑ひものになりたくない。

参照——三七七

六九 子ノタマハク、タダ仁者ノミ能ク人ヲ好ミ、能ク人ヲ惡ム。

「好」を「ヨミス」とよむ人もある。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、「或人を好み或人をにくむのは、まぬかれぬ人情だが、凡人は私情がまざるから、好むべき人をにくみ、にくむべき人を好むことにもなる。本當に人を好み人をにくむことは公平無私な仁者にしてはじめてできることぢや。」

七〇 子ノタマハク、苟モ仁ニ志セバ、惡シキコト無シ。

「苟」を「マコトニ」とよむのが普通のやうだが、「惡無シ」といふ消極句につづくには、「イヤシクモ」の方が力強し。

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、ともかくも仁に心を向けてゐれば、過失はあらうとも、惡事ははたらくはす』

七一 子ノタマハク、富ト貴トハコレ人ノ欲スルトコロナリ。其道ヲ以テセザレバコレヲ得ルモ處ラズ。貧ト賤トハコレ人ノ惡ムトコロナリ。其道ヲ以テセザレバコレヲ得ルモ去ラズ。君子仁ヲ去リテイツクニカ名ヲ成サン。君子ハ終食ノ間モ仁ニ違フコト無シ。造次ニモ必ズココニ於テシ、顛沛ニモ必ズココニ於テス。

これは三回の言葉を集めたのだ、との説もあるが、必ずしもさう考へなくともよい。一続きの教訓としてリ

ツバに筋が通つてゐる。

「仁ヲ違ル」とよむ人もある。

「造次」は「サンセマリテアハタダシイ」

「顛沛」は「タフレクツツガヘル」

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、『富貴を欲するのは人情だからそれを欲してゐるゝことはないが、それが人生の目的ではなくて、仁が最終目的だから、仁にかなふ道によつたのでなければ、たとひ富貴を得ても君子は安んじない。貧賤をいやがるのは人情だから、それから去らうとするのは結構だが、仁にかなふ道によつてでなければ、君子は貧賤から去ることをいさぎよしとしない。君子が仁をはなれてどこに君子たる所以があらうや。君子たる者は、一食をすまず短い時間でも仁からはなれぬ。サア大變といふあはただしの際でも、危急存亡の瀬戸きはでも、仁を忘れぬが君子といふものぞ。』

造次顛沛の間にまごついてゐる今日の私たちに取つて、頭上から三斗の冷水をあびせられるやうな大教訓で

ある。「終食ノ間モ仁ニ違ハズ」どこか、一日たべることばかりにあくせくして仁のジの字も思ひ至らぬ私たちがはづかし。

七二 子ノタマハク、ワレ未ダ仁ヲ好ム者不仁ヲ惡ム者ヲ見ズ。仁ヲ好ム者ハ、以テコレニ尙フルコト無シ。不仁ヲ惡ム者ハ、ソレ仁ヲ爲シ、不仁者ヲシテ其身ニ加ヘシメズ。能ク一日其力ヲ仁ニ用フルコト有ランカ、ワレ未ダ力ノ足ラザル者ヲ見ズ。ケダシコレ有ラン、ワレ未ダコレヲ見ザルナリ。

「ソレ仁爲リ」とよむ人もある。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「わしはまだ本當に仁を好む者又不仁をにくむ者を見たことがない。仁を好む者なら最上だが、不仁をにくむ者も、自らは仁を爲し不仁者の影響を受けない。それだけの事のできる者も見ないのは、残念な事ぢや。そしてそれがむづかしい事かといへば、けつしてさうではない。たとひ一日なりとも力を仁に用ひようと志す者があるならば、それにも力が足りな

い者は見たことがない。事によつたらあるかも知れぬが、わしはまだ見たことがないわい。」

参照——一二九・一七六

七三 人ノ過チヤ各其黨ニ於テス。過チヲ觀テココニ仁ヲ知ル。

「黨」に二説ある。第一説は、君子の過ち小人の過ちといふやうな過失の種類とする。第二説は、親馬鹿といふやうな親愛する所に偏する過失とする。前説の方が面白いやうだ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「誰にも過失はあるが、過失にもタチの善いのと悪いのとあるから、過失を観察しても其人物の仁不仁がわかる。』

「韓非子」にかういふ話がある。孟孫氏が獵に行つて一匹の子鹿をいけどりにし、それを家臣にあづけた。數日たつてあの子鹿を持つて來いと言つたところ、親鹿が子をさがして鳴く聲があらはれなので、逃がしてやつた

つす。一旦は立腹して追ひ出したが、後に召し返して我子の付き役にした。

七四 子ノタマハク、朝ニ道ヲ聞イテタニ死ストモ可ナリ。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『朝のうち人の道を學び得たら、夕方死んでも宜しい。』

これは學者に取つての至上命命として、不肖ながら常に口ずさみ來つた言葉だ。貝原益軒の辭世の詩にも、

平生ノ心曲誰有ツテカ知ラン

常ニ天威ヲ畏レテ欺クナカラント欲ス

存順没寧克クセズト雖モ

朝聞夕死アニ悲ント爲サンヤ

とある。又漢書に左の物語がある。

『夏侯勝ト黃覇ト事ニ座シテ獄ニ繋ガル。覇勝ニ從ツテ尙書ヲ受ケント欲ス。勝辭スルニ罪死スベキヲ以テス。覇曰ク、朝ニ道ヲ聞イテタニ死ストモ可ナリト。勝其言ヲ賢ナリトシテ遂ニコレヲ授ク。』

明治以後の教育はあまりにも手段であつた。小學教育は中學入學の手段、中學教育は高等學校入學の手段、高等學校教育は大學入學の手段、大學教育は就職の手段、それでは學問でない。學問はそれ自身が目的でなくてはならず、それが結局、其人の人格完成にもなり、國家人類の福利にもなり、學問其ものの進歩發達にもなる。伊藤仁齋曰く、

『或人曰ク、朝聞夕死ハ亦ハナハダ急ナラズヤト。曰ク、然ラザルナリ。人トシテ道ヲ聞カザレバ、スナハチ生クトモ益無シ。故ニ夫子朝聞夕死ヲ以テ可ナリトスルモノハ、最モ其道ヲ聞カザルノ甚ダシキヲ示スナリ。何ゾハナハダ急ナリト謂ハンヤ。』

七五 子ノタマハク、士道ニ志シテ惡衣惡食ヲ恥ヅル者ハ、未ダ與ニ議ルニ足ラザルナリ。

「士」はここでは「學徒」といふほどの意味。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『さやしくも仁義道德の學に志すほどの者が、衣服や食事が粗惡なこ

とを恥辱とするやうでは、共に道を論ずる資格がないぞよ。』

弊衣破帽をほこり、榮養などかまふな、といふのではないことはもちろんである。

参照——二二八・二三一

七六 子ノタマハク、君子ノ天下ニ於ケルヤ、適モ無ク、莫モ無シ。義トコレ與ニ比
フ

「適」ハ「敵」なり、「莫」ハ「慕」なり、といふ説もあるが、こぢつけのやうだ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「君子が天下國家に處するには、必ずかうしようとか、断じてかうし
ないとか、あらかじめきめてむことなく、ただ道理の正しい所に従つて行動するものぞ。」

無方針無原則の御都合主義といふのではない。先入主や偏頗な感情を除き、公明正大であれ、といふのだ。

七七 子ノタマハク、君子ハ徳ヲ懷ヒ、小人ハ士ヲ懷フ。君子ハ刑ヲ懷ヒ、小人ハ惠
ヲ懷フ。

「徳」と「士」「刑」と「惠」が支那音で同音な所からのシヤレを含むのではないかと思ふ。

「刑」は「型」で、典型禮法。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「君子と小人とでは常に考へてゐる所がちがふ。君子は徳行を修める
ことをのみ考へ、小人は一身安住の地をのみ考へ、君子は國法儀禮にそむかざらんことをのみ考
へ、小人は恩惠利益を得んことをのみ考へる。』

「君子」を治者「小人」を被治者と見、「君子徳ヲ懷ヘバ小人士ヲ懷ヒ、君子刑ヲ懷ヘバ小人惠ヲ懷フ。」とよ
んで、徳治と法治との比較論と解する説もある。

七八 子ノタマハク、利ニヨリテ行ヘバ怨ミ多シ。

× × × × ×

孔子様がおつしやるやう、一自分の利益本位で行動すれば、人に怨まれることが多い。』

古註に『己ヲ利セント欲スレバ、必ず人ヲ害ス、故ニ怨ミ多シ。』とある。

七九 子ノタマハク、能ク禮讓ヲ以テ國ヲ爲メシカ、何カ有ラン 能ク禮讓ヲ以テ國ヲ爲メズンバ禮ヲ如何

× × × × ×

孔子様がおつしやるやう、「禮儀正しく譲り、ふ氣持で國を治めるならば、何のむつかしいことがあろうか。國を治めるに禮讓を用ひないならば、一體何の爲めの禮か。』

八〇 子ノタマハク、位無キヲ患ヘズ、立ツ所以ヲ患フ。己ヲ知ルコトナキヲ患ヘズ、知ラルベキヲ爲スヲ求ム

× × × × ×

孔子様がおつしやるやう、『地位のないことを心配するな、役に立つだけの實質なきことを心配せよ。人が知つてくれぬことを心配するな、知られるだけの事をするやうにとめよ。』

参照——一六・三六一・三九四

八一 子ノタマハク、參ヨ、ワガ道一以テコレヲ貫ク。曾子イハク、唯 子出ヅ。門 人間ヒテイハク、何ノ謂ゾヤ 曾子イハク、夫子ノ道ハ忠恕ノミ

× × × × ×

孔子様が曾子に呼びかけて、「參よ、わしが説きかつ行ふ道には、一貫した原理があるぞよ。』と言はれた。曾子は『ハイ』と答へた。外の門人たちには何の事かわからなかつたので、曾子に向つ

て、『さつきのは何の意味ですか。』とたづねたところ、曾子が言ふやう、『先生の道は結局忠恕、すなはち誠實と思ひやりのみ。』

ただ『ハイ』とのみ答へ、又『忠恕ノミ』と一言で説明した所に、曾子らしさがある。子貢となると、自分の方から持ちかけて、同じ答を引き出してゐる(三九九)。

八二 子ノタマハク、君子ハ義ニ喩リ、小人ハ利ニ喩ル。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『君子は萬事を道義に持つて行く。小人は一切を利益に結びつける。』

古人が本章について二つの譬へを設けてゐる。

『同じ飴でも、聖人の堯が見ると、これは老人を養ふによいと思ひ、大泥棒の跡が見ると、これは錠前をはづすに役立つなと氣が附く。』

『村の長者の藏に米が一杯積んである。君子が見ると、これだけあれば、飢饉年にも此村には餓死人が生まれ

いと思ひ、小人が見ると、これだけあれば、飢饉年には大儲けだと思ふ。』

八三

子ノタマハク、賢ヲ見テハ齊シカラシコトヲ思ヒ、不賢ヲ見テハ内自ラ省ミル。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『賢くて徳のある人を見ては、自分も此人のやうでありたいと思ひ、賢からず徳のない人を見ては、自分も此人のやうではないかと反省する。』

参照——一六八

八四

子ノタマハク、父母ニ事ヘテハ幾ク諫ム、志ノ從ハザルヲ見テハ、又敬シテ違ハズ、勞シテ怨ミズ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『父母に過ちのある場合には、子として諫めねばならぬが、きびしく

咎め立てするやうな態度でなく、かど立たぬやうジワジワと諫むべきだ。そして諫言がきかれない場合にも、ほんとに困つたわからずやだなどと敬意を失つた氣持をもたず、いくら苦勞迷惑しても怨みがましくしない、それが孝子といふものぢや。』

めんどうだからいいかげんにしておけ、といふのではない。手をかへ品をかへて喧嘩腰でなく諫むべきだ。やはり重盛諫言などが理想的の「幾諫」であらうか。

八五 子ノタマハク、父母在ストキハ遠ク游バズ 游ベバ必ズ方有リ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、父母の存命中は無用の遠出をせぬものぞ。やむを得ず遠方へ旅行でもする場合には、必ず行先を明かにして、心配をかけぬやうにせよ。』

私の母は、私たちが子供の時から、あまりやかましく干渉はせず、友だちの所へ遊びに行きたいとか、旅行をしたいとかいへば、快く出してくれたが、無断で外出したり、豫定以外の寄り道をしたり、歸るといつた時

刻におくれたりすると、ひどく叱られたものだ。時にはすねん窮屈だと思つたこともあるが、それが癖になつて、父母いままぬ老後の今日でも、外出のときには、必ず何時から何時まではどこに居り、何時には歸るといふことを家人に言ひのこし、出來得るかぎり其豫定をたがへぬやうにして居り、又妻や息子や嫁や娘にもさうさせる家風になつてゐる。今日のやうな交通不便の時代には、それが中々むつかしいが、同時にそれが一そう大切であり、單に安心のためばかりでなく、火急な事が起つた場合の連絡上も必要だ。留守に人が來たり電話があつたりした場合に、サアどこに行つて居りますか、などは、第一體裁もよくないし、又自身としてどこへ行きどこへ廻るといふことが公言できないやうでは、うしろぐらい次第だ。大げさに言へば、出所進退を明かにする、といふことにもなる。

八六 子ノタマハク、三年父ノ道ヲ改ムル無キハ、孝ト謂フベシ。

X X X X X

これは前に出てゐる(一一)。かやうな重出は數ヶ所あるが、これは一度言つたのが二度出たのではなく、二度三度言つたことの整理もれであらう。

古註に

『凡ソ諸章ノ重出セルモノハ、ケダシ夫子シバ言ヒ、門人互ニコレヲ録セルナリ。意味深長、學者宜シク玩ビテ審ニ思フベキナリ。』

とあり、又太宰春臺も左の如く言ふ。

『論語中語ノ重出セルモノ、或ハ詳、或ハ略、隨時同ジカラズ。意有ルニアラザルナリ。記者一人ニアラズ、各自聞ク所ヲ記ス。異同有ル所以ナリ。』

八七 子ノタマハク、父母ノ年ハ知ラザルベカラズ 一ハスナハチ以テ喜ビ、一ハスナハチ以テ懼ル

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、父母の年齢は記憶してゐなくてはいけない。そして一面では其長壽を喜び、他面では老先の短いことを心配しつつ、一日をも惜んで孝養をつくすべきだ。』

『樹靜カナラント欲スレドモ風止マズ、子養ハント欲スレドモ親待タズ』『孝行のしたい時分に親はなし』と云ふことにならぬやうといふのだ。『ちちははのしきりにこひし雉の聲』とやら、私は此頃ともすれば両親の

歳を指折りかぞえ、今年九十いくつに八十いくつ、まだ絶対に生きて居られぬ年齢でもないなどと考へるが、同時に又、今生きて居られないでよかつたと思はざるを得ない時世なのは、なさけないことだ。

八八 子ノタマハク、イニシヘ言ノ出デザルハ、躬ノ速バザルヲ恥ヅルナリ

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、『古人が軽々しく物を言はぬのは、自分の實行がそれに伴はぬことを恥ぢるからだ。』

今の人は無責任に實行もできぬ事を言ふ、との非難を言外にふくむ。

参照——二八一・三五九

八九 子ノタマハク、約ヲ以テコレヲ失フ者ハ鮮シ。

孔子様がおつしやるやう、『引きしめ過ぎてしくじる者はすくない。』

『引きしめれば失策がすくない』と解するのが普通だが、すこし強く言つて見た。

九〇 子ノタマハク、君子ハ言ニ訥ニシテ行ニ敏ナランコトヲ欲ス。

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、『君子たる者、口不調法にして行動敏活なれ。』

必ずしも訥辯がよいといふのではないが、口ばかり達者なのは困る。

参照——四

九一 子ノタマハク、徳孤ナラズ、必ズ隣有リ

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、『徳は孤立しない。必ず隣が出来る。』

有徳者の感化影響をいふ。舜の居る所、一年にして村を成し、三年にして都を成したといふ。

九二 子游イハク、君ニ事ヘテシバシバスレバ、ココニ辱シメラル 朋友ニシバシバ
スレバ、ココニ疏マル

×

×

×

×

子游が言ふやう、『君に事へるにあまりしつこくすると、軽んじ侮られることになる。友と交はるにあまりしつこくすると、うとまれさらはれる。』

公治長 第五

この公治長篇は、ほとんど全部が門人及び古今の人物の批評で、かなり調子がそろつてゐる。

九三

子公治長ヲ謂フ。妻スベキナリ。縲紲ノ中ニ在リト雖モ其罪ニアラザルナリト。其子ヲ以テコレニ妻ス。子南容ヲ謂フ。邦道有レバ廢テラレズ、邦道無キモ刑戮ヲ免ルト。其兄ノ子ヲ以テコレニ妻ス。

此章を二章に分ける本もある。いづれでもよからう。

公治長は門人。鳥の言葉がわかつたと傳へられる。どこそこの谷に人が死んでゐると鳥が語り合つてゐるのを聞いて、其母に知らせてやつたところ、かへつて殺人の嫌疑を受けて投獄され、辯解しても信じて貰へない。すると或日のこと、牢屋の柵の上で雀が、向ふの往來で車がひつくりかへり穀物がこぼれてゐるからたべに行かう、とさそひ合つてゐるのを聞いて、獄吏に申し出たので、人をやつて見させたら其通りであつた。それで嫌疑がはれて放免されたといふ。もとより俗説だが、おとぎ話として面白い。

「縲紲」は「繩目」 捕縛されること。

「南容」も門人、名は适、字は子容。

X X X X X

孔子様が公治長を評して、『あれなら娘を嫁にやつてもよろしい。入牢したこともあるが、無實の罪だつたのだ。』と言はれ、自身の婿にされた。又南容を評して、『あれは慎み深い男だから、治まつた國なら任用されようし、亂れた國でも刑罰にあふやうなことはあるまい。』と言はれ、兄さんの娘を嫁にやられた。

孔子様は結婚についても人物本位だつたのである。公治長はともかくも牢にはいつた人間だからうちの娘をやり、南容は安全第一だから(二五八)兄の娘をやつたので、「ケダシ兄ニ厚クシテ己ニ薄クスルナリ」といふ説があるのが、「コレ己ノ私心ヲ以テ聖人ヲ親フ」ものだ。

九四

子子賤ヲ謂フ。君子ナルカナ、カンノ如キ人。魯ニ君子者無カリセバ、コレイ
ヅクニカコレヲ取ラン。

「子賤」は門人廋不齊の字。「孔子ヨリ少キコト四十九歳」とあるから、晩年の門人だらう。

X X X X X

孔子様が子賤を評しておつしやるやう、『君子であるかな此人は さすが魯の國には君子の先輩が多いからで、それでなければどうしてかやうな若者が出ようぞ。』

私に言はせれば、「魯の君子者」とは結局孔子様と其高弟たちに外ならぬ。此先生あり、此兄弟子たちあり、よい後進が出ないはずがない。

九五 子貢問ヒテイハク、賜ヤ如何^{イカニ}。子ノタマハク、ナンヂハ器ナリ。イハク、何ノ器ゾヤ。ノタマハク、瑚璉ナリ。

「瑚璉」は宗廟の祭に用ひる玉を飾つた貴重な食器。

X X X X X

孔子様がたれかれと門人たちの批評をされるので、子貢が『私はいかがでござりませう。』と水を向けた。すると『お前は道具だ。』と言はれたので、子貢いささか平かならず、『何の道具でござりまする。』と押しかへしたら、『瑚璉だよ。』とおつしやつた。

これは、國家の重きに任じ得べき有用の材だとほめられたのだが(一一五)、同時に「君子ハ器ナラズ」(一一八)お前はまだまだ道具たるをまぬかれぬ、今一修養して眞の人になれ、といましめはげまされたのである。此問答は前章の續きで、孔子様が子賤を評されたにつき子貢が「それでは私は」とおたづねしたので、とずる人もあるが、必ずしもさうではあるまい。本章の方がズット前の話だらう。しかしならべて讀むと、孔子様が若い者はほめて引立て、高弟たちはたしなめ抑へられるおもむきが見える。

九六 或ヒトイハク、雍ヤ仁ナレドモ佞ナラズ。子ノタマハク、イツクンゾ佞ヲ用ヒン。人ニ禦ルニ口給ヲ以テスレバ、シバシバ人ニ憎マル。其仁ヲ知ラズ、イツクンゾ佞ヲ用ヒン。

「雍」は門人冉仲弓の字。

「佞」は辯才、「佞人」といふほどの悪い意味ではない。

X X X X X

或人が「雍は仁者だけれども惜しいことには辯才がない。」と評した。孔子様がおつしやるやう、
「辯才などはなくてもよろしい。口前だけで人と應對するとしはしは人に憎まれることになるが、
雍には其心配がない。仁者だかどうか知らないが、辯才などはなくてもよろしい。」

「其仁ヲ知ラズ」の一句に味がある。孔子様は中々仁を以て人に許されない。

九七

子漆シヨク離リカク開カイヲシテ仕ヘシム。對ヘテイハク、ワレコレヲコレ未ダ信ズルコト能ハ
ズト 子説トコブ

門人「漆離開」字は子若。

X X X X X

孔子様が漆離開に仕官をすすめたところ、「私にはまだ自信がござりません。」と答へたので、孔
子様がお喜びになつた。

仕官就職を急ぐことを常にいましめられる孔子様が、もうよからうと仕官をすすめられたのだから、相當の
者だつたに相違ないのに、モット勉強致しませんでは、とおことはりしたので、其篤學自重を喜ばれたのであ
る。

参照—四八一

九八

子ノタマハク、道行ハレズ、桴イカダニ乘リテ海ニ浮バン。ワレニ從ハン者ハソレ由
カ。子路コレヲ聞イテ喜ブ。子ノタマハク、由ヤ勇ヲ好ムコトワレニ過ギタリ。
取リ材カル所無シ。

「材ヲ取ル所無シ」とよむ人もある。いかだの材料にはならぬ、と冗談を言はれたのだといふのだが、前との
続きがつかないやうだ。

孔子様が歎息して、道義の行はれぬ亂れた中國にゐる氣はしない。いかにでも乗つて海外へ行つてしまひたいものぢや。其時わしについて來る者は由かな。と言はれた。子路がそれを聞いて、大勢の門人の中で自分だけがたのみになる者と御見出しにあづかつた。どんなもんだい、と得意になつた。すると孔子様がおつしやるやう、「由は勇氣のある點ではわしも及ばんが、どうも見さかひがなくて困るよ。」

孔子様の言葉は、道の行はれざるをなげく氣持を強くあらはす形容で、實際にいかだに乗らうと言はれるのではあるまい。これが顔回か曾子ならば、まあさやうにおつしやらないで、となだめさうな所を、正直者でそつかしい子路はすぐ、面白い御供しませう、と乗り氣になつたので、勇氣餘つて分別が足らん、と孔子様に笑はれたのだ。

孔子様は其時日本に來ようと言はれたのだ、と誰だつたか言つたが、もちろんでたらめだ。しかし結果に於ては、論語がいかだに乗り海に浮んで日本に來たことになるのではあるまいか。ところでせつかく來て千六七百年も逗留した日本をも、つひに「道行ハレズ」と見限つて、いかだに乗り海に浮んでアメリカにでも行つて

しまはないやうにしたいものだ。

参照——二一三・二一八

九九

孟武伯問フ 子路ハ仁ナルカ 子イハク、知ラザルナリ。又問フ 子イハク、由ヤ千乘ノ國其賦ヲ治メシムベシ、其仁ヲ知ラザルナリ。求ヤ何如 子イハク、求ヤ千室ノ邑百乗ノ家コレガ宰タラシムベシ。其仁ヲ知ラザルナリ。赤ヤ何如。子イハク、赤ヤ東帶シテ朝ニ立チ、賓客ト言ハシムベシ。其仁ヲ知ラザルナリ。

「賦」は元來租税のことだが、それからおしひろめて、兵事民事をふくめた政治全般をいふ。

「赤」は門人、姓は公西、字は子華。

「千乘」「千室」「百乘」は數の問題ではなく、結局「大諸侯」「大都會」「大家」といふこと。「乘」は前に説明した(五)。「室」は「戸」。

X

X

X

X

孟武伯が『子路は仁者ですか。』とたづねたのに對して、孔子が『存じません。』と答へたので、さらに押し返して質問したところ、孔子が申すやう、『由は大諸侯の國の政治を扱はせ得るだけの腕前がありますが、仁かどうかは存じません。』『それでは求（冉有）はどうですか。』『求は大都會の市長や大夫の家の執事がつとまりますが、仁かどうかは存じません。』『赤はどうですか。』『赤は衣冠束帯で朝廷に立ち外國の御客様と應接させることはできますが、仁かどうかは存じません。』

此場合にも孔子様はたやすく仁を以て人に許されず、手腕や実績だけでは仁とはいへぬ、といふことをほのめかして居られる。安井息軒曰く、

『仁ノ道ハ至大ナリ。三子才德優レクリト雖モ、未ダ全名ニ當ル能ハズ。然レドモ亦不仁者ニアラズ。故ニ知ラザルヲ以テコレニ答フ。』

一〇〇 子子貢ニ謂ヒテノタマハク、ナンヂト回トイツレカ愈レル。對ヘテイハク、賜ヤ何ゾ敢テ回ヲ望マン。回ヤ一ヲ聞イテ以テ十ヲ知ル。賜ヤ一ヲ聞イテ以テ二ヲ知ル。子ノタマハク、如カザルナリ。ワレナンヂガ如カザルニ與ミセン

「ワレトナンヂト如カザルナリ」とよむ人もある。それだと、わしさへも及ばぬ、と言はれたことになつて、ささか褒め過ぎるやうだ。

X X X X

孔子様が子貢に、『お前と顔回とどちらがまさると思ふか。』と言はれると、子貢が『とんでもない事、私知りがどうして回と太刀打ちできません。回は一を聞いて十を知ります。私は一を聞いて二を知るに過ぎません。』と答へたので、孔子様がおつしやるやう、『なるほどお前は回に及ばぬわしはお前が回に及ばぬと言つたことに賛成しよう。』

子貢は顔回に及ばぬことを自ら認めつつ、しかし私も一を聞いて二を知る程度ではあります、といふ自信を示し、孔子様は、前にも『往ヲ告ゲテ來ヲ知ル者』と褒めたくらゐで（一五）、子貢のよく己を知ることが賞し、その顔回につぐ才能を認められたのである。子貢の明敏と孔子の含蓄と、打てば響く師弟談話の様子が目に見えるやうだ。

宰予晝寝ネタリ。子ノタマハク、朽チタル木ハ雕ルベカラズ。糞土ノ牆ハ朽ル

ベカラズ 予ニ於テカ何ゾ誅メン 子ノタマハク、始メワレノ人ニ於ケルヤ、其言ヲ聽キテ其行ヲ信ゼリ 今ワレノ人ニ於ケルヤ、其言ヲ聽キテ其行ヲ觀ル 予ニ於テカコレヲ改ム

「晝寢」を簡単に「ひるね」と解する人と、「寢」は寢室をいひ、晝間から寢室へ引つこんだ、と解する人とある。いづれでも同じやうな事だが、簡単な方に従はう。或は「晝」は「晝」の誤で、寢室に壁晝をかかせたので僭上だと叱られたのだ、と解する人もあるが、それはあまりに考へ過ぎだ。要するに、ひるねにしては叱られ方がひど過ぎるといふのだが、宰予はふだんからえらさうな事をいふので、口ほどにもないと叱られたのだらう。

途中にも「子曰」があるので、元來二章なのだといふ人もあるが、一続きに讀まない面白くない。前段は宰予に對する直接の御小言、後段は謂はば孔子様のひとりごとなので、「子曰」をはさんだのだらう。

X X X X X

宰予がひるねをしたので、孔子様がことごとく御立腹で、くちた木は彫刻のしやうがなく、土塀の土臺が糞まぢりの泥では上塗しでもしかたがない 予のやうな性根のくさつた者は小言をいふ

張合もないわい。』と叱られたが、さらに言葉をあらためておつしやるやう、『わしは今まで人を觀るのに、其言葉を聽いただけで其行もさうあらうと信じたものだが、今後は其言葉を聽いただけでなく、其行を觀た上で信用することにしよう 予で失敗したから、方針を變へた。』

孔子様には不似合と思はれるほど猛烈にして皮肉な御叱りだ。よほど情狀がわるかつたと見える。

一〇二 子ノタマハク、ワレ未ダ剛者ヲ見ズ 或ヒト對ヘテイハク、申楨。子ノタマハク、楨ヤ慾、イツクンゾ剛ヲ得ン。

X X X X X

孔子様が『わしはまだ剛者といふべき人物を見たことがない。』と言はれたので、或人が『申楨』と指名した。孔子様がおつしやるやう、『楨のやうな慾張りがどうして剛であり得ようぞ。』

剛者などはいくらもあつたものだ、と其人は思つて、申張を持ち出したのだ。しかし孔子様の剛は、氣が強いのが強いのといふのではなく、私情によつて正義をまげない道徳的の剛なのだから、愆心があつては剛者たり得ないのだ。西郷南洲が、命もいらぬ名もいらぬ金もいらぬといふ男ほどやつかいな相手はないが、さういふ男でなくては共に天下國家を論じ得ない、と言つたとのことだが、それが正に孔子様のいはゆる剛者なのだから、そこらあたりにはメツタにあつてもない。

一〇三 子貢イハク、ワレ人ノコレヲワレニ加フルヲ欲セザルヤ、ワレ亦コレヲ人ニ加フル無カラシテ欲ス 子ノタマハク、賜ヤ、ナンチガ及ブ所ニアラザルナリ。

X X X X X X

子貢が「私は、人が自分に對してしてくれては困ると思ふ事を、自分も亦人に對してしたくないと考へてゐます。」と言つた。孔子様がおつしやるやう、「それは結構だが、中々むつかしい事で、まだまだお前などの及ぶ所でないぞ。」

これはすなはち「己ノ欲セザル所人ニ施スナカレ。」で、孔子様は別の機會に其言葉を子貢に授けられた(三

九九)。要するに此點がむしろ子貢の缺點だつたのであらうし、それ故にこそ子貢自身もそれを心がけてゐるのだ。

門人の中でも子路と子貢とは特別の親しみをもつて居られたやうだ。それで孔子様も心安だてにツケツケと物を言はれる。

一〇四 子貢イハク、夫子ノ文章ハ得テ聞クベシ。夫子ノ性ト天道トヲ言フハ、得テ聞クベカラザルナリ

「文章」は其人の徳が容貌言語にあらはれた所、「性」は人が天から受けた徳性、「天道」はすなはち「天命」で、人の徳性の本體である。逆に言へば、天に在つて未だ人に與へられないときは「天道」といひ、それが人の心にそなはつてまだ事に應じて動かないのを「性」といひ、それが具體的に其人の言行にあらはれたのが「文章」なのだ。

X X X X X

子貢が言ふやう、先生の御徳は一言一行の上で常に拜聴拜見し得たが、先生の人性論と天道論

とは中々うかがへない所であつた。其御講義を今日承つて、欣喜感激の極だ。』

今の若い人たちが論語を読んでおそらく感ずるであらう如く、孔子様の教學があまりにも実践的であり、具體的であるために、子貢は夫子の言行に啓發されながらも、多少「哲學が無い」といふやうな物足りなさを感じてゐたのだらう。そこへいよいよ奥義たる人性論天道論を聴き得て、夫子の實踐道徳に崇高深遠な根本哲理の存することを知り、いはゆる手の舞ひ足の踏む所を知らなかつたのである。

一〇五 子路問クコト有リテ未ダコレヲ行フ能ハザレバ、タダ聞クコトアランヲ恐ル。

X X X X X

子路は善言を聞けばただちにこれを行はんと欲したので、一つ善言を聞いてまだそれを行ひ得ないうちに又一つ善言を聞くであらうことを心配した。

善を行ふに急なる子路の卒直勇往を力強く言ひあらはした名文だ。孟子（公孫丑章句上）に「子路ハ人コレニ告グルニ過チ有ルヲ以テスレバ、スナハチ喜ブ。」とあるのと併せて、正直「本氣な子路のおもかけが活躍

する。

一〇六 子貢問ヒテイハク、孔文子何ヲ以テコレヲ文ト謂フヤ 子ノタマハク、敏ニシテ學ヲ好ミ、下問ヲ恥ヂズ、コレヲ以テコレヲ文ト謂フ

「孔文子」は衛の大夫孔圉のおくり名。

X X X X X

子貢が「孔文子はどうして文とおくり名されたのでありますか。」とおたづねした。孔子様がおつしやるやう、利口な人は勉強せず、又位高く年寄つた人は目下の人に物をさくのを好まぬものだが、あの人は敏にして學を好み、下問を恥ぢなかつたので、孔文子のおくり名がついたのぢや。』

一〇七 子子産ヲ謂フ 君子ノ道四ツ有リ、ソノ己ヲ行フヤ恭、ソノ上ニ事フルヤ敬、ソノ民ヲ養フヤ惠、ソノ民ヲ使フヤ義。

「子産」は衛の大夫公孫僑の字。春秋時代の名臣。
この「君子」は上に立つ人。

X

X

X

X

孔子様が子産を評しておつしやるやう、『行儀よく其身をたもち、敬つて君に事へ、恵み深く人
民を育て、道理正しい人の使ひ方をするといふ、人の上に立つ君子たる道を四つまで備へた人であ
つた。』

一〇八 子ノタマハク、晏平仲善ク人ト交ハル。久シクシテコレヲ敬ス。

「晏平仲」は齊の大夫、名は嬰。

「人コレヲ敬ス」となつてゐる本もある。それだと、人が晏平仲を敬する、といふことになるが、前記の方が
面白。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『晏平仲』は人と交はる道を心得てゐた。交際が久しくなると、狎れ
過ぎて敬意が薄らぐものだが、彼には其心安立ての失禮がなかつた。』

晏平仲については、「晏子ノ御者」といふことわざまで出来てゐる有名な物語があつて、其人柄がわかる故
史記列傳の本文を書き下しにして置かう。

「齊ノ相晏子出デテ行ク。其御ノ妻門間ヨリ窺フニ、其夫、大蓋ヲ擁シ、駟馬ニ策チ、意氣揚々トシテ自得
セリ。既ニシテ御者家ニ歸ル。妻去ランコトヲ請ヒテ曰ク、晏子長六尺ニ滿タズ。身齊國ニ相トシテ名諸侯
ニ顯ハル。妾其志ヲ觀ルニ、常ニ以テ自ラ下ルモノアリ。今子ハ長八尺、スナハチ人ノ僕御トナリ、自ラ
以テ足レリト爲ス。妾コレヲ以テ去ランコトヲ求ムルナリト。其後チ御者自ラ抑損ス。晏子恠ミテコレヲ問
フ。御者實ヲ以テ答フ。晏子薦メテ以テ大夫ト爲ス。』

一〇九 子ノタマハク、臧文仲蔡ヲ居クニ、節ニ山シ、稅ニ藻ス。何如ゾソレ知ナラ
ン。

「臧文仲」は魯の大夫臧孫辰、當時知者といはれた。

「蔡」はト龜、國に大事あるとき焼いて其甲の割れ方により吉凶をうらなふ。

「節」は柱の頭の榭形、「稅」は梁の上の小柱。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『臧文仲は、諸侯でなくてはもてないト龜を所有し、しかもそれを置く室の柱の頭に山の形をさざみ梁の上の小柱に藻の模様をかくといふやうな、天子の宗廟まがひの裝飾を施した。さやうな古禮も知らず非禮僭上を敢へてする者が、何で知者であらうぞ。』

一一〇

子張問ヒテイハク、令尹子文、三たび仕へテ令尹タレドモ、喜ブ色無シ。三たびコレヲ己メラレテ、慍ル色無シ。舊令尹ノ政ハ必ズ以テ新令尹ニ告グ。何如。子ノタマハク、忠ナリ。イハク、仁ナルカ。ノタマハク、未ダ知ラズ。イツクンノ仁ヲ得ン。崔子齊ノ君ヲ弑ス。陳文子馬十乗有リ。棄テテコレヲ違ル。他邦ニ至レバスナハチイハク、ナホワガ大夫崔子ノゴトキナリト。コレヲ違ル。一邦ニユケバスナハチ又イハク、ナホワガ大夫崔子ノゴトキナリト。コレヲ違ル。何如。子ノタマハク、清ナリ。イハク、仁ナルカ。ノタマハク、未ダ知ラズ、イツクンゾ仁ヲ得ン。

ズ、イツクンゾ仁ヲ得ン。

「令尹」は楚の國務大臣。

「子文」姓は鬬、名は穀於菟、子文は字。

「崔子」は齊の大夫、名は杼。

「陳文子」も齊の大夫、名は須無。

「馬十乗」車一臺に馬四頭だから、馬四十頭。當時は馬の数が富の一標準だつた。

X

X

X

X

子張が『楚の子文は、三度令尹に任せられましたでしたが喜ぶ様子もなく、三度免職されたが不平の色もなく、やめる時には新令尹に詳細の事務引継をしました。其行ひはいかがですか。』とおたづねした。孔子様がおつしやるやう、『忠實なことぢや。』『仁ではありませんか。』『サア、どうか知らんが、それだけでは仁とはいへまい。』『今一つ何がひますが、崔子が齊の莊公を弑したときに、陳文子は、馬の四十頭もあるやうな富を捨てて國を去りました。そして他の國へ行きましたが、ここにもわが大夫崔子の如き悪人がゐる』と言つて、そこを去りました。又他の國へ行きましたが、

そこでも「ナホワガ大夫崔子ノゴトキナリ」と言つて立ち去りました。これはいかがですか。『清廉潔白なことぢや。』『仁ではありませんか。』『サア、どうか知らんが、それだけでは仁とはいへませう。』

孔子様の仁の採點は相變らずからい。

一一一 季文子三たび思ヒテ後行フ。子コレヲ聞キテノタマハク、再ビセバココニ可ナリ。

「季文子」は魯の大夫季行父のおくり名。

X X X X

季文子は三度考へてから行つた。孔子様がおつしやるやう、『二度でよからう。』

孔子様はいつも人によつて道を説かれる。季文子は優柔不斷なのでかう言はれたのであらう。「三たび」「フ

クたび」といふのも、必しも數の問題ではない。

一一二 子ノタマハク、甯武子、邦道有レバスナハチ知、邦道無ケレバスナハチ愚、其知ヤ及ブベシ、其愚ヤ及ブベカラズ。

「甯武子」は衛の大夫、名は俞。

「其愚ヤ及ブベカラズ」は、ここでは褒め言葉だが、俗用には轉じて「馬鹿さ加減が御話にならぬ」といふ意味につかふ。「はしがき」には其用ひ方をした。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『甯武子は、國が治まつてゐるときは表おもてに立つて腕をふるひ、あつぱれ智者だといはれるが、國が亂れると蔭にまはつて損な役廻りを買ひ、利害を知らぬ馬鹿者のやうに見える。その智者たる所はまねができるが、その馬鹿者たる所は及びもつかない。』

ここで「愚」といふのは、作りあほうをして一身の安きをはかるといふ意味ではない。古註に曰く、

『成公道無ク國ヲ失フニ至リテ、武子其間ニ周旋シ、心ヲ盡シカヲ竭シ、艱險ヲ避ケズ、オヨソソノ處ル所、皆知巧ノ士ノ深ク避ケテ肯エテ爲ザルモノナリ。シカモ能ク率ニ其身ヲ保テテ以テ其君ヲ濟フ。コレ愚ノ及ブベカラザルナリ。』

一一三 子陳ニ在シテノタマハク、歸ランカ、歸ランカ。ワガ黨ノ小子狂簡、斐然トシテ章ヲ成セドモ、コレヲ裁スル所以ヲ知ラズ。

「黨」はここでは同志同學の意味。

「狂簡」は「志大ニシテ事ニ略ナルナリ」とある。

X

X

X

X

孔子様は天下を周遊して陳の國まで來られたが、どこにも受けいれられず、仁義禮樂を以て天下を救はうとの志がつひに行はれ得ないのを知り、醜然大悟しておつしやるやう、「歸らう、歸らう。うちの若者たちは、氣位ばかり高くて實行がまだ身について居らぬ。五彩目もあやな錦は織りなされたが、それを裁斷して衣服にする所までにまだ至らぬ有様ぢや。サア魯に歸つて青年を教育し、

大に人材をつくつてわが道を後世に傳へよう。』

論語を孔子一代記とするならば、本章は最重要の轉回記録である。伊藤仁齋は、

『夫子當初天下ヲ周游シテ以テ道ヲ行ハント欲ス。ココニ至リテソノツヒニ行ハレザルヲ知ル。故ニ後學ヲ成就シテ以テ道ヲ來世ニ詔ゲント欲ス。然レドモ中行ノ士ハ必ズシモ得ベカラズ、而シテワガ黨ノ小子ハ志大ニシテ事ニ略ナリ。與ニ道ニ進ムベシト雖モ、シカモノノ或ハ中正ヲ過ギンコトヲ恐ル。ココニ於テ魯ニ歸リテコレヲ裁セント欲ス。』

と説明した。そして孔子が當世に志を得なかつたことは、『コレ夫子ノ不幸ナリト雖モ、然レドモ萬世ノ學者ニ在リテハスナハチ實ニ大至幸ナリ。』といふ仁齋の言葉に、私は心の底から同感共鳴する。

一一四 子ノタマハク、伯夷叔齊ハ舊惡ヲ念ハズ、怨ミココヲモツテ希ナリ。

伯夷・叔齊兄弟の物語は、あまりに有名だからここには略するが、家庭的にも國家的にも一生不遇で、古川柳にいはゆる『ひからびた死骸があるとわらび取り』といふ悲惨な最期をとげたので、そこで「怨ミタリヤ」といふ問題を生ずること、後に見える(一六一)。

孔子様がおつしやるやう、『伯夷と叔齊は道德的潔癖家だから、不正不義をにくむこと甚しいが、事をにくんで人をにくまず、且過ぎ去つた他人の舊惡をいつまでも根にもつやうな狭量ではないから、人を怨み又人に怨まれることがすくない。』

一一五 子ノタマハク、タレカ微生高ヲ直ト謂フヤ。或ヒト醜ヲ乞フ、コレヲ其隣ニ乞ヒテコレニ與フ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『一體誰が微生高を正直者といふのか。或人が酔を無心したとき、自分のうちに無かつたのに、隣家から貰つて與へた。無いなら無いこととはり、隣から貰つたのならさう言へばよいが、自分のうちのもののやうな顔をして與へたのなら、正直者どころではない。』

この「直」を「融通のきかぬ馬鹿正直」と解し、どうして中々気がきいてゐるではないか、と褒めたのだ、

「人ノ美ヲ掠メテワレノ恩ヲ市ルモノ」との古註はあまりの酷評だ、とする説もある。結局は「隣から貰ひました」と言つたか言はぬかの問題だらう。私の此講釋は申すまでもなく先人の受賣りで、正に「隣ニ乞ヒテ與フル」ものだが、『隣から貰ひました』と正直に白狀して置く。

一一六 子ノタマハク、巧言令色足恭、左丘明コレヲ恥ヅ。丘モ亦コレヲ恥ヅ。怨ヲ匿シテ其人ヲ友トスルハ、左丘明コレヲ恥ヅ。丘モ亦コレヲ恥ヅ。

X X X X X

「足恭」の「足」は「過」と同じ。
「左丘明」はどういふ人かわからぬが、孔子様の尊敬した先輩らしい。
孔子様は自分のことを名を呼んで「丘」といはれる。

孔子様がおつしやるやう、『巧言令色で丁寧過ぎることは先輩左丘明の恥ぢた所、この丘も亦これを恥ぢる。心の底に怨をいだきながら友達顔をするやうな裏表のあることは、先輩左丘明の恥ぢた所、この丘も亦これを恥ぢる。』

一一七 顔淵・季路侍ス。子ノタマハク、ナンゾ各ナシガ志ヲ言ハザル。子路イハク、願ハクハ車馬衣輕裘、朋友ト共ニシ、コレヲ蔽リテ憾無ケン。顔淵イハク、願ハクハ善ニ伐ルコト無ク、勞ヲ施スコト無ケン。子路イハク、願フクハ子ノ志ヲ聞カン。子ノタマハク、老者ハコレヲ安ンジ、朋友ハコレヲ信ジ、少者ハコレヲ懷ケン。

「勞ニ施ル」とよむ人もあるが、前の句とヨミも意味も變へて「施ス」としたい。「老者ニハ安ンゼラレ、朋友ニハ信ゼラレ、少者ニハ懷カレン」とよむ人もあるが「志ヲ言フ」のだから、前記の如く積極的でありたい。

X X X X X

顔淵と季路（子路）とが孔子様の御側に侍してゐたとき、孔子様が『どうだ、お前たちめいめいの志を言つて見ないか。』と言はれた。すると子路が、『車でも馬でも上等の上衣でも軽い毛皮の外、套でも、友人に融通し破り棄てても惜しがらぬやうに、どうかんがりたいものと思ひます。』と言つた。すると顔淵が言ふやう、『善事をして自慢せず、骨折を人に押しつけることのないやうに』

どうかんがりたいものと思ひます。』そこで子路が、『ひとつ先生の御志をうかがひたいものであります。』と言つたので、孔子様がおつしやるやう、『年寄を安心させたい、同輩を信用したい、若い者をなつかせたい。』

孔子様とふたりの高弟との打解けた話が見え聞えるやうだ。そして各人の言ふ所がそれぞれふさはしく、そして大きでないのがよい。子路がまづ口を切り又先生をうながす所が其人らしい。孔子様の大願はさすがに平和にして雄大、全人類を包含してゐる。私自身も、もちろん及ばずながら、今までこれを目標とし來つたのだが、面目ないことには、老者を安んじ得ぬうちに自分が安んじられる老者になつてしまつた。

一一八 子ノタマハク、已ンヌルカナ。ワレ未ダ能ク其過チヲ見テ内自ラ訟ムル者ヲ見ズ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『だめぢやのう。わしはまだ、自分で自分の過ちを發見して自分で自分を責める者を見たことがない。』

一一九 子ノタマハク、十室ノ邑、必ズ忠信丘ノ如キ者有ラン、丘ノ學ヲ好ムニ如カザルナリ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『家數十戸ばかりの小村でも、丘ぐらゐの忠實信義の者はひとりやふたりは必ずあらう。ただ丘ほどの學問好きがないのぢや。』

自分はけつして生れながらの聖人でも賢人でもない、ただ勉學修養に骨折つただけだ、とは孔子様の口癖である。それではあまり御自慢に過ぎるといふので、「イヅクンゾ丘ノ學ヲ好ムニ如カザラン」とよませ、「わしぐらゐの學問好きもありさうなものぢや」の意とする説もある。しかし孔子様は好學の點では自ら許して居られたのであつて、サア皆もわしに續け、と若い者を激勵された言葉と見る方が面白い。

雍也第六

雍也第六も、前半は前編につづいておもに人物評論だが、後半では仁に關することが目につく。

一一〇 子ノタマハク、雍ヤ南面セシムベシ。仲弓、子桑伯子ヲ問フ。子ノタマハク、可ナリ、簡ナリ。仲弓イハク、敬ニ居テ簡ヲ行ヒ以テ其民ニ臨マバ、亦可ナラズヤ。簡ニ居テ簡ヲ行ハバ、スナハチ大簡ナル無カラシヤ。子ノタマハク、雍ノ言然リ。

「仲弓曰」以下を別章にしてゐる本もあるが、一章にした方が面白からう。しかし後段は前段の続きではなく、むしろ前段の證明である。

天子は政治を聽くに「南面」して座する。臣下は「北面」。日本でも昔「北面の武士」などといつた。「子桑伯子」はどういふ人かわからない。

孔子様が門人冉雍（字は仲弓）を褒めて、『雍は人君として南面させてもよい人物ぢや。』と言はれた。かくまで言はれるには理由がある。仲弓がかつて子桑伯子のことをおたづねしたときに、孔子様が、『よい人物ぢや。大まかでこそよせしない。』と言はれた。すると仲弓が、『心のもち方は慎重である事は大まかなのが、君として民に臨む道ではありませんまいか。氣もちも大まか、する事も大まかでは、大まか過ぎはいたしませんか。』とおたづねした。孔子様が感心して、『なるほど雍の言ふ通りだ。』とおつしやつた。かやうな事もあつたので、孔子様が仲弓を、人君の度があると評されたのである。

一一一
 哀公問フ、弟子イヅレカ學ヲ好ムトナス 孔子對ヘテイハク、顔回ナル者有リ、
 學ヲ好メリ。怒リヲ遷サズ、過チヲ貳ビセズ。不幸短命ニシテ死セリ。今ヤス
 ナハチ亡シ。未ダ學ヲ好ム者ヲ聞カザルナリ。

顔回が死んだのは、三十二歳ともいひ、四十二歳ともいふ。いづれにしても若死であつた。「人世五十」な

ので、其以下で死ねば「短命」なのだ。

「哀公が「門人中誰が一番學問が好きか。」とたづねたとき、孔子は「顔回と申す者がござりました、學問が好きでありました。そして腹を立てても八つ當りせず、同じ過ちを二度としませんでした。ところが不仕合せにも短命でなくなりまして、今は此世に居りません。其以外には本當に學問が好きと申すべき者を存じません。」とお答へした。

弟子三千人、六藝に通ずる者七十二人、其中で「學ヲ好ム者」はタツタ一人、といふところを見ると、孔子様の「學ヲ好ム」とは、讀書好きといふ程度ではなく、「怒リヲ遷サズ、過チヲ貳ビセズ」といふやうな修養の工夫をすることなのだ。そして其修養工夫を本當に楽しむ者は、數多い門人中にも顔回だけだつた、と言はれたのであつて、前にもあつたやうに、仁とか學とかに對する孔子様の採點は非常にからいのである。

「怒ルナ」「過チスナ」と言はれず、「怒リヲウツスナ」「過チヲフクタビスナ」と言はれるあたりが、孔子様の教の實際的な所だ。そしてこれが中々むつかしいことで、私なども、過ちを二度三度するはおろか、此歳になつても、腹立ちまぎれに女房子や戸障子にまで當りちらして、あとでわれながらあさましく思ふことが

ある。古川柳にも、『叱られた下女膳立のにぎやかさ』とあつて、あんまりみつともよいものではない。
顔回をかなしみ惜む孔子様の言葉は、後にも何度か出て来るが(二五九・二六一・二六二・二六三)、此章などもまことに情愛の深い文章だ。「今ヤスナハチ亡シ」を、學を好む者今は無し、の意味に解する人があるが、それには「亡」の字では當らぬし、第一そんなよみ方をしては、せつかくの名文の方が死んでしまふ。

一三三 子華齊ニ使ス。冉子其母ノ爲メニ粟ヲ請フ。子ノタマハク、コレニ釜ヲ與ヘヨト。益サンコトヲ請フ。ノタマハク、コレニ廩ヲ與ヘヨ。冉子コレニ粟五乘ヲ與フ。子ノタマハク、赤ノ齊ニ適クヤ、肥馬ニ乘リ輕裘ヲ衣タリ。ワレコレヲ聞ク、君子ハ急ヲ周ヒテ富メルニ繼ガズト。原思コレガ宰トナル。コレニ粟九百ヲ與フ。辭ス。子ノタマハク、ナカレ。以テナンヂノ隣里郷黨ニ與ヘンカ。

「子華」はすなはち「赤」で、孔子様に外交官に適すると評された門人(九九)、ここでも國際使節に出かけたのだ。

「粟」ここでは「アワ」ではなくて玄米の扶持米。それ故「ゾク」とよむ。

「釜」は六斗四升で我國の五升七合五勺弱。「廩」は十六斗で、一斗四升三合七勺餘。「乘」は十六斛、「五

乘」だと七石一斗八升五合九勺餘になる。なほ「釜」と「廩」の上にも數字があつたのが落ちたのかも知れない。それでないあまり開きが大き過ぎるやうだ。「九百」は斗か石か不明。

「原思」は門人原憲、字は子思。

五家を「鄰」となし、二十五家を「里」となし、一萬二千五百家を「郷」となし、五百家を「黨」とする。地域的相互扶助團體で、いはば「隣組」だ。古歌に『里人の軒をならべて住む宿は五つまでこそ隣なりけれ』とあつて、支那の「鄰」の制度が我國に傳はつて「五人組」になつたことを示す。又武藏の國の「兒玉黨」などといふのが、源平盛衰記あたりに出て来る。

「ナカレ」を下につけて「與フルコトナカラシカ」とよむ人もある。

X X X X X

子華が齊に使節として行つたとき、冉求が、留守居の其母に扶持米を與へてください、と御願した。すると孔子様が『五六升やつたらよからう。』と言はれた。『それではすくな過ぎますから、今少し増してください。』と重ねて御願したので、『それでは一斗五升與へるやう。』とおつしやつた。しかるに冉求は自分のはからひで、七石餘も與へた。そこで孔子様が、『赤が齊に使用するに、肥えた馬に乗り軽い毛ごろもをさるといふ大した仕度で出かけた。それくらゐなら留守宅の用意も

出来てゐるはずである。「君子は急場を救ふが富のつぎたしはせぬ。といふ諺を聞いたことがあるが、お前のやり方は「富メルヲ繼グ」といふものぢや。」とさとされた。又孔子様が魯の大夫になられたとき、門人の原思を執事に採用して俸祿米九百を興へることにしたところ、原思は、『多過ぎます』と辭退した。孔子様がおつしやるやう、『遠慮するな。多過ぎるなら隣組に配給するなどもよすではなうか。』

孟子(離婁下篇)に、

『以テ取ルベク、以テ取ルコトナカルベシ。取レバ廉ヲ傷ル。以テ興フベク、以テ興フルコトナカルベシ。興フレバ惠ヲ傷ル。』

とあるが、冉求は興ふべからざるを興へたのだから「惠ヲ傷ル」ものであり、原思の場合は取るべきを取るのだから、「廉ヲ傷ル」ことにならぬのである。人に金品を興へるの中々むつかしいものだ。古川柳にいふ『人に物ただやるにさへ上手下手』

一一三 子仲弓ニ謂ヒテノタマハク、犁牛ノ子驛クシテ且角ナラバ、用スルナカラント欲スト雖モ、山川ソレコレヲ舍テシヤ。

仲弓が其父のくだらぬ人物であることを悲観してゐるのを慰め勵まされた言葉と思ふ。確證はないが、さうした方が話が面白い。したがつて「謂仲弓」を「仲弓ヲ謂ヒテ」でなく、「仲弓ニ謂ヒテ」とよみたい。

「整牛」は「ぶち牛」。馱牛で祭のいけにえにならぬ。

「角アラバ」とよむ人もあるが、角の有無の問題ではなくて、角の形の問題だから、「角ナラバ」とよむ。

「舍」を「オク」とよむ人もある。これはどちらでもよからう。

×

×

×

×

孔子様が仲弓に向つておつしやるやう、『ぶち牛の子でも、色が赤くて角のかつこうがよければ、祭のいけにえに用ひまいと思つても、山川の神が捨て置かれようや。お前も父親の事などクヨクヨせず、自身の勉學修養に精出しなさい。』

一一四 子ノタマハク、回ヤ其心三月仁ニ違ハズ。其餘ハスナハチ日ニ月ニ至ルノミ。

「三月」は例によつて數をいふのではなから、「久シク」といふこと。

「其餘」を仁以外の「諸徳」とし、根本の仁に違はないので諸徳が毎日毎月積み重なる、の意に解する説もあるが、此あたりは門人の比較論だから、「餘人」とする説に従ふ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『顔回は幾月も引續いて其心が仁をはなれぬが、ほかの連中は、或月或日にたまたま仁まで行くかと思ふと、おきに脱線してしまふ。』

一一五

季康子問フ。仲由ハ政ニ從ハシムベキカ。子イハク、由ヤ果、政ニ從フニ於テ何カ有ラン。イハク、賜ヤ政ニ從ハシムベキカ。イハク、賜ヤ達、政ニ從フニ於テ何カ有ラン。イハク、求ヤ政ニ從ハシムベキカ。イハク、求ヤ藝、政ニ從フニ於テ何カ有ラン。

國君の場合には「政ヲ爲ス」といひ、大夫の場合には「政ニ從フ」といふ。政局を擔當すること。

「果」は資性剛決。「達」は心胸穎悟。

「何カ有ラン」は「何ノ難キコトカ有ラン」。

X X X X

季康子が『子路は政治に當らせ得ますか。』と問ふた。孔子答へて申すやう、『由は決斷力がありますから、政治に當るくらゐ何でもありません。』『子貢は政治に當らせ得ますか。』『賜は事理に明かですから、政治に當るくらゐ何でもありません。』『冉求是政治に當らせ得ますか。』『求是才能がゆたかですから、政治に當るくらゐ何でもありません。』

安井息軒曰く、

『政ヲ爲スノ害、優柔不斷ヨリ大ナルハナシ。故ニ性果ナル者ハ以テ政ニ從フベシ。達ト藝トノ如キハ、スナハチモトヨリ言フヲ俟タズ。』

三門人の特色を指摘するとともに、世人は政治といふと最上至難の事のやうに思ふが、果斷・明敏・有能ならば出来ることで、何も大した事ではない、の意を含む。要するに政治技術は末で、身を修め徳と養ふことが根本なのだ。

一一六

季氏閔子騫ヲシテ費ノ宰タラシメントス。閔子騫イハク、善クワガ爲メニ辭セ

ヨ。モシワレヲ復スルコト有ラバ、スナハチワレハ必ズ汶ノ上ニ在ラン。

門人「閔子騫」名は損、孝行で名高く、二十四孝の一人だ。「顔淵閔子騫」とならび稱せられるので(二五五)、江戸の儒者先生は『殘念ピンシケン』といふ地口を言ったことが、三馬の「浮世床」に出てゐる。「汶」は魯と齊の境の川。

× × × × × × ×

魯の大夫季氏が、領地の費の代官にしようと思つて、閔子騫を招いた。閔子騫が使者に言ふやう、『どうぞ私のためにおことはり申してください。もし今一度お召しになるやうなことがあると、私は必ず汶の川向に參つてしまひますぞ。』

門人で季氏に仕へた者は、子路・冉求をはじめ何人かあるが、よく季氏を輔佐して正道に立ちもどらせ得れば結構な事なのだから、孔子様はそれを悪いとは言はれず、ただ輔佐のしかたについて時おり小言も言はれたのだ。しかし閔子騫は潔癖で、季氏如き不臣の者には仕へたくなかつたのだが、そのことはり方が婉曲でしかも斷然たるところ、いかにも其人らしい。

一一二七 伯牛疾有リ。子コレヲ問フ。牖ヨリ其手ヲ執リテノタマハク、コレヲ亡ハンコ

ト、命ナルカナ。斯人ニシテ斯疾有リ、斯人ニシテ斯疾有リ

「伯牛」は門人冉耕の字。十哲德行四人の一人。癩病だつたといはれる。すなはち「斯疾」とは「此業病」といふ強き意味。

× × × × ×

冉伯牛の病氣がわるいといふので、孔子様が見舞に行かれ、窓越しに其手を取つてなげかれるやう、『この惜しい人をなくすことか。ああ天命なるかな。かういふ人にかういふ病氣があらうとは。かういふ人にかういふ病氣があらうとは。』

なぜ窓越しに見舞はれたか、といふことについて、禮がどうのかうのといふむつかしい説明があるが、私は病人のねてゐる窓ぎはを通りかかつたので、部屋にはいるまももどかしく、思はず窓越しに手を取つたものと解釋したい。悪疾をもいとはず手を握り、繰りかへしてなげかれたところに、あふれるばかりの人情があ

る。

江戸時代の漢學書生たちは、「玉にきづ」といふところを、「斯人ニシテ斯疾有リ」としやれたものだ。

一二八 子ノタマハク、賢ナルカナ回ヤ。一箪食一瓢飲、陋巷ニ在リ。人其憂ヒニ堪ヘズ、回ヤ其樂ミヲ改メズ。賢ナルカナ回ヤ。

「箪」は竹であんだ飯櫃。

「瓢」は、いはゆる「ひょうたん」ではなく、「ひさこ」を半分に分けた酒器。

「陋巷」はむさくるしい横町。「街」は大路、「巷」は小路。

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、『賢人なるかな顔回は、盛切り飯に一杯酒で横町の裏店住居、ほかの人なら貧乏の苦勞にかまけてしまふところを、回は相變らず道を楽しんで勉強してゐる。さても賢人なるかな顔回は。』

参照——一四・一六二

一二九 冉求イハク、子ノ道ヲ説バザルニ非ズ、力足ラザルナリ。子ノタマハク、力足ラザル者ハ中道ニシテ廢ス。今ナンヂ畫レリ。

「畫」は境界線を引くこと。

×

×

×

×

冉求が『先生の説かれる道を結構だと思はないのではありませんが、私には力が足りなくてついでに行けません。』と言つたので、孔子様が激勵しておつしやるやう、『本當に力が足りないで中途で行きづまるならやむを得ないが、お前のは力があるのに自分で見限りを附けてゐるのだ。そんな事ではだめぢや。シツカリしなさい。』

一三〇 子子夏ニ謂ヒテノタマハク、ナンヂ君子ノ儒トナレ、小人ノ儒トナルコト無カシ。

前(七)に書きもしたが、子夏は孔子より若きこと四十四歳。

X X X X X

孔子様が子夏におつしやるやう、『お前は眞に徳の高い君子の學者になれ、單なる物知りの小人の學者になるな。』

伊藤仁齋の説明が要領を得てゐる。

『君子小人ハ位ヲ以テ言フ。君子ノ儒ハ、天下ヲ以テオノレガ任ト爲シ、而シテ物ヲ濟フニ志アル者ナリ。

小人ノ儒ハ、ワヅカニ其身ヲ善クスルニ足ルヲ取ルノミ、物ニ及ボスコト能ハザルナリ。子夏ハ文學餘リ有リト雖モ、然レドモ規模狭小ナリ。故ニ夫子ソノ或ハ小人ノ儒トナランコトヲ恐ル。』

一三二

子游武城ノ宰トナル。子ノタマハク、ナンヂ人ヲ得タルカ。イハク、澹臺滅明トイフ者有リ。行クニ徑ニ由ラズ。公事ニアラザレバ未ダカツテ偃ノ室ニ至ラズ。

「澹臺」は姓「滅明」は名、字は子羽。孔子より若きこと三十九歳、子游が孔子より若きこと四十五歳だから、子游より年長だ。そして本章以後に孔子様の門人になつたらしい。容貌はみにくかつたが、見かけに似合はぬ有爲な人物で、後に大成して功績があつたので、孔子様が「貌ヲ以テ人ヲ取レバ、コレヲ子羽ニ失フ。」と言はれたと、史記の「仲尼弟子列傳」にある。

X X X X

子游が武城の市長になつてゐたが、孔子様が『お前は誰かシツカリした助役を得たか。』と問はれたところ、子游が答へて申すやう、『澹臺滅明といふ者を採用致しました。此者は誠に公明正大な人物でありまして、往來をあるくにも近道拔道をせず、又公用でなければけつして私の部屋にはいつて参りません。』

孔子様が武城に行かれて子游の市長振に感心された話が、後に出て来る(四三五)。

一三三

子ノタマハク、孟子反伐ラズ、奔リテ殿シ、マサニ門ニ入ラントス。其馬ニ策

チテイハク、敢テ後セルニアラズ、馬進マザリシナリト。

「孟子反」は魯の大夫、名は側。

「後」は「オクレタル」とよむ人もあるが、ここでは「殿」の意味だから「ノチセル」とよんだ。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『孟子反は功にほこらぬ人だ。まけいくさのしんがりを見事につとめたが、城門に入らうとするとき馬に一鞭あてて、「わざわざしんがりをしたわけではない、馬が勞れて前へ出なかつたのだ。」と言つた。まことにおくゆかしいことぢや。』

敗軍を取りまとめて總くづれにならぬやうにするのは、むつかしい事で又大切な事だ。今日の我國の大敗軍に際して、りつばにしんがりをつとめてしかも其功にほこらぬ昭和の孟子反がほしいものだが、それについて「幼學綱要」に左の物語があることを思ひ出した。

「山ノ内治太夫・進士清三郎ハ松平康重ノ臣ナリ。嘗テ殿戰シテ退ク。山内亂射シテ矢盡ク。敵兵山縣源四郎等之ヲ追フコト急ナリ。清三郎一矢ヲ治太夫ニ投ズ。治太夫止リ射ル。一兵ノ胸ヲ洞シテ松樹ニ着ク。敵

乃引キ去ル。山縣其矢ヲ康重ニ送リテ曰ク、善射無雙ナリ。康重矢ニ清三郎ガ姓名ヲ刻スルヲ見テ、之ヲ褒セムト欲ス。清三郎曰ク、是レ治太夫ガ發スル所ナリ。山内ヲ召テ之ヲ問フ。曰ク、清三郎ガ發スル所ナリ。相譲リテ決セズ。康重并ニ二人ヲ褒ス。時人稱シテ今ノ孟子反ト爲セリ。』

一三三 子ノタマハク、祝鮀ノ佞有リ而シテ宋朝ノ美有ラズンバ、難キカナ、今ノ世ニ免カレンコト。

「祝鮀」は衛の大夫、字は子魚。辯才で聞えた。「宋朝」は宋の公子で、有名な美男子。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『祝鮀のやうな辯才があり其上に宋朝のやうな風采がなければ當世に通用しないとは、なさけないことぢや。』

「祝鮀ノ佞有ラズシテ宋朝ノ美有ラバ」とよみ、衛の靈公の夫人南子が其生國の宋から美公子宋朝を呼び寄せて後宮の風俗をみだし、もし賢大夫祝鮀が辯才を以て内外に周旋することなくば滅亡は免かれがたいことだ

(三五一)と言はれたものと解する説もあるが、あまりうがち過ぎるやうだ。具體事實ではなくて一般論として置きたい。

一三四 子ノタマハク、誰カ能ク出ヅルニ戸ニ由ラザラン、何ゾ斯道ニ由ルコトナキヤ。

「斯道」の達人、などと今でも此語を用ひる。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『家を出るに戸口を通らぬ者は誰もあるまい。それなのにどうしてこの人の道を通らうとしないのだらう。』

一三五 子ノタマハク、質文ニ勝テバスナハチ野、文質ニ勝テバスナハチ史、文質彬彬、シカル後チニ君子。

「質」は「木地」すなはち實質。「文」は「かざり」すなはち形式。

「野」は野人すなはちいなか者。

「史」は文書をつかさどる役人、外交官とか秘書官とかいふところ。

「彬彬」の語義は知らないが、字の形から見て、杉の木がならび立つ姿だらう。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『木地が飾りに勝つといなか者じみるし、飾りが木地に勝つと外交官式になる。木地と飾りがほどよく揃つたところが、本當の君子といふものぞ。』

面白い言葉だ。粗末な木地が飾りもなくむき出しなのは何だらう、「ゴロツキ」とでもいほうか。

一三六 子ノタマハク、人ノ生クルヤ直シ。コレヲ罔ヒテ生クルハ、幸ニシテ免ルルナリ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『人が此の世に生きてゐられるのはまつすぐなからだ。まがつた事を

して生きてゐる者があるではないかと言ふかも知れぬが、それは「まぐれざいはひ」といふものぢや。』

太田道灌が少年の時、父が此句を引いて教訓したら、屏風を持ち出して、これはいかがですか、とおやちをへこましたといふ話がある。孔子様が聞かれたら『コノ故ニカノ倭者ヲ惡ム』(二七七)と言はれやう。

一三七 子ノタマハク、コレヲ知ル者ハコレヲ好ム者ニ如カズ、コレヲ好ム者ハコレヲ
樂シム者ニ如カズ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『知る者よりも好む者が上、好む者よりも楽しむ者が上ぢや。』

これはむしろ現代語譯に困るほどの明白平易な言葉だが、實に意味深長な名言だ。『好きこそ物の上手なれ』といふが、「好き」の「上手」といふ程度ではまだまだなのだ。主として學問を言はれたのだらうが、何にでも通用する。

古註に曰く、

『コレヲ五穀ニ譬フレバ、知ル者ハソノ食フベキヲ知ル者ナリ。好ム者ハ食ヒテコレヲ嗜ム者ナリ。樂シム者ハコレヲ嗜ミテ飽ク者ナリ。知リテ好ムコト能ハザレバ、スナハチコレヲ知ルコト未ダ至ラザルナリ。コレヲ好ミテ未ダ樂シムニ及バザレバ、スナハチコレヲ好ムコト未ダ至ラザルナリ。コレ古ノ學者ノ自ラ強メテ息マザル所以ノモノカ。』

一三八 子ノタマハク、中人以上ニハ以テ上ヲ語グベシ、中人以下ニハ以テ上ヲ語グベ
カラズ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『中以上の學力の者には高等哲理を教へてよいが、中以下の者に深遠な理論を語るべきでない。』

人を見て法を説く孔子様の教育法だ。性と天道といふやうな根本論は、子貢の如き大學院學生に向つてはじめて説かれたのである(一〇四)。

一三九 樊遲知ヲ問フ。子ノタマハク、民ノ義ヲ務^{ツト}メ、鬼神ヲ敬シテコレヲ遠ザク、知ト謂フベシ。仁ヲ問フ。ノタマハク、仁者ハ難^クキヲ先ニシテ獲^クルコトヲ後^ニス、仁ト謂フベシ。

「民ノ義」は人間としての道である。禮記禮運篇に「父ハ慈、子ハ孝、兄ハ長、弟ハ悌、夫ハ義、婦ハ聽^ク、長ハ惠、幼ハ順、君ハ仁、臣ハ忠、十ノ者コレヲ人ノ義ト謂フ。」とあるのがそれ。

「鬼神」は、前にもあつた通り(四〇)「オニガミ」ではなく、神靈である。ここでは日本流に「神佛」と言はう。

「敬ジテコレニ遠ザカル」とよむ人もある。どちらでも結局同じ事だが、「敬遠」といふ轉用熟語から見ても「コレヲ遠ザク」の方がよささうだ。

X

X

X

X

樊遲が「知」についておたづねした。孔子様がおつしやるやう、「人としての道をよくつとめ、神佛は崇敬するが、近づき狎れて神佛をけがしてもあそぶやうなことをしないのが、知といふべき

ぢや。』さらに仁についておたづねした。孔子様がおつしやるやう、「仁者は進んで骨折り仕事を引受け、報酬利得を問題にしない。それが仁といふものぢや。』

江戸笑話にかういふのがある。これなどは「鬼神ヲアナドツテコレニ近ヅク」ものである。

貧乏人の女房が難産に苦しんでゐると、亭主が井戸端で水をあび、南無讚岐の金比羅大権現、女房が安産致しましたら、御禮に金の鳥居を奉納致します、と大聲で祈る。女房苦しい中にも聞き兼ねて、コレよいかげんにさつしやれ、此貧乏人に金の鳥居が上げられるものぞ、といふ。亭主ぬからぬ顔で、おれがこんびら様をだましてゐるうちに、お前は早くうんでしまひやれ。

参照——二九九・三〇〇・三一一

一四〇 子ノタマハク、知者ハ水ヲ樂シミ、仁者ハ山ヲ樂シム。知者ハ動キ、仁者ハ靜カナリ。知者ハ樂シミ、仁者ハ壽シ^{イノチナガ}。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『かりに知者と仁者とが水と山といづれを楽しむかを想像するならば、知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむであらう。知者は動いて停滞せざること水の如く、仁者は安んじて静かなること山の如くだからである。そして知者は絶えず活動するから楽しみが盡きることなく、仁者はあくせくせぬから長壽をたもち得る。』

川田順氏著「細川幽齋」によつて、幽齋に左の歌のあることを知つた。

山を我が楽しむ身にはあらねどもただ静けさをたよりにぞ住む

一四二 子ノタマハク、齊一變セバ魯ニ至ラン、魯一變セバ道ニ至ラン。

× × × × × × × ×

孔子様がおつしやるやう、『齊が今一つ改善されると魯ぐらゐにならう。魯が今一つ振興されると道義の國になれるのだがなあ。』

齊は桓公が覇を成した國なので、富國強兵を國是とし、功利主義で禮樂を重んぜぬ。魯は周公の後なので、

衰微しながらもさすがに禮樂尊重の風がのこつてゐる、世人は齊が強く魯が弱きを見て齊まさり魯おとるとするが、必ずしも然らず、といふ趣旨であつて、孔子様の御國自慢的理想でもあり、又其理想實現の困難を思つての歎息でもある。

一四二 子ノタマハク、觚ナラズ、觚ナランヤ、觚ナランヤ。

「觚」は酒杯。角があるので「角へん」もついてゐるのだが、當時は其古制がくづれてカドがなくなつてゐた。

× × × × × × × ×

孔子様がおつしやるやう、『觚にカドがなくては、觚であらうや、觚ではない。』

これは酒杯が故實を失つたのによそへて世道の頹廢をなげかれたのだが、「婦人婦人ナラズ、婦人ナランヤ、婦人ナランヤ。」「學生學生ナラズ、學生ナランヤ、學生ナランヤ。」「政黨政黨ナラズ、政黨ナランヤ、政黨ナランヤ。」「何にでもあてはまる。

一四三 宰我問、ヒテイハク、仁者ハコレニ告ゲテ井ニ仁有リトイフト雖モ、ソレコレニ從ハンヤ。子ノタマハク、何スレゾソレ然ラン。君子ハ逝カシムベシ、^{オトシイ}陥ルベカラズ、欺クベシ、^シ罔フベカラズ。

X X X X X

宰我が「仁徳有る君子たる者、井戸に人が落ちてゐると知らされたら、イキナリ其井戸にとびこむでせうか。」とおたづねした。孔子様がおつしやるやう、「どうしてさやうなことがあらうか。君子は人を救ふに専らでおのれを忘れるから、人が落ちたと告げて井戸端までかけつけさせることはできようが、事實もたしかめず手段も講ぜずにあはてて井戸にとびこむほど無分別ではない故、だまして水にはめることはできない。道理のあることであざむかれることはあり得ようが、道理のないことでもくまされることはあり得ない。』

宰我は論語では大分評判がわるいので(六一・一〇一・四五二)本章も、また愚問を出して叱られた、といふ風を取る人もあるが、ここはさうではなく、孔子様が世の事人の事といふと我れを忘れて乗り出されるの

で、或はだまされて迷惑なすることがありはすまいかと心配して、宰我がそれとなくおいさめしたのに對し、孔子様が、大丈夫だよ、とおつしやつたのだらうと思ふ。

一四四 子ノタマハク、君子博ク文ヲ學ビ、コレヲ約スルニ禮ヲ以テセバ、亦以テ^{ツム}畔カザルベキカ。

伊藤博文(明治時代の政治家)の名の出所。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「君子たるもの、ひろく書を讀んで文物を學ばねばならぬが、博學なだけでは散漫になる故、人生の物さしたる禮を以てしめくりをつけねばならぬ。さうすれば正しい道にそむかぬやうになれようか。』

一四五 子南子ヲ見ル。子路^{ヨロコ}説バズ。夫子コレニ^{チカ}矢ヒテノタマハク、予ニ否ナル所アラバ、天コレヲ厭^タタン、天コレヲ厭^タタン。

「南子」は衛の靈公の夫人、不品行で評判のわるかつたことは、前にも申した（一三三）。原文「予所否者」には、色々のよみ方があるやうだが、一番スラリとしたよみ方に従つた。「矢」をチカフとよむのは、矢を折つて誓ふからだらう。「厭」は「棄テ絶ツ」いはば絶交すること。神佛ならばバチをあてる、といふところか。

× × × × × ×

孔子様が衛の國に行かれたとき、靈公夫人の南子にまみえられたので、子路が快からず思つた。子路のことだから、不愉快を顔に出しただけでなく、あのやうな淫婦に會はれるとは何事ぞと、口に出して非難したのかも知れない。そこで孔子様が誓言を立てておつしやるやう、『わしにやましい所があるならば、お前が咎めるまでもない、天道様が捨て置かれまい、天道様のバチがあたりらうぞ。』

これはどういふ事情だつたのかハッキリしないが、南子が好奇心からしきりに會見を求め、辞退しても強ひてうながされるので、やむを得ず參殿されたのだらう。子路はもちろん孔子様にいかがはしいことがあつたと

思つたのではなからうが、世間がかれこれ言ひ立てるので、憤慨したものと見える。そこで孔子様が、人は何とも言はば言へ、天道様が御承知ぢや、安心せよ、と子路をなだめられたのだ。

一四六

子ノタマハク、中庸ノ徳タルヤ、ソレ至レルカナ。民鮮キコト久シ。

× × × × × ×

孔子様がおつしやるやう、『過ぐることなく及ばぬことなく平常にして終始變らざる中庸こそ實に最高至善の徳なるかな。しかるに、古代は知らず、其後久しく此徳をそなへる人がすくない。まことになげかはしことぢや。』

中庸といふことは、平凡にして至難な事柄であつて、孔子様の最も重んぜられた所であるが、お孫さんの子思が其教を受け繼いで「中庸」を著はし、四書の一つになつてゐるのは、孔子様もさぞ御満足であらう。而して今日行はれてゐる中庸刊本の本文のはじめに、前註の形で出てゐる子程子の言葉に、『偏ラザルコレヲ中ト謂ヒ、易ラザルコレヲ庸ト謂フ。中ハ天下ノ正道ニシテ、庸ハ天下ノ定理ナリ。』とあるのは、中庸の過ぐるることなく及ばざることなき定義である。近來の我國は、思想も行動も實に極端から

極端に走り、中庸の徳に至つては眞に「民鮮キコト久シ」き有様であつて、孔子様にお目にかけてたら、世も末ぢやと歎息されるであらう。

一四七

子貢イハク、モシ博ク民ニ施シテ能ク衆ヲ濟フコト有ラバ何如。仁ト謂フベキカ。子ノタマハク、何ゾ仁ヲ事トセン、必ズヤ聖カ。堯舜モソレナホコレヲ病メリ。ソレ仁者ハ、オノレ立タント欲シテ人ヲ立テ、オノレ達セント欲シテ人ヲ達ス。能ク近ク譬ヲ取ルハ、仁ノ方ト謂フベキノミ。

X X X X X

子貢が『もしひろく人民に行き亘つてよく衆人を救済することができたら、仁といへませうか。』とおたづねしたので、孔子様がおつしやるやう、『それができれば仁どころではない。強いて謂ふならば聖か。堯舜のやうな聖天子でさへ、それができないとて御心配なされたことである。お前は仁なるものを大そうなむつかしいことに考へてゐるやうだが、さやうな聖天子でなければできないやうな事ではない。仁者は自分についてかくあれかしと思ふことを人にもかくあらせんとし、自分が成就したいと思ふことを人に成就させる。すなはち人を見ることおのれの如く、人我のへだての

ないのが仁である。言ひかへれば、高遠な事に思ひを馳せるのが仁ではなくて、目の前の自分に引きくらべて人にしむけるのが、仁に至る方法であるぞよ。』

孔子様が中々仁を以て許されないので、子貢が今度は最高標準を持ち出したところ、孔子様は、仁とはさやうな大理想ではなく、むしろ日常茶飯事であるぞ、俗諺のいはゆる「わが身つねつて人の痛さを知る」こそ仁の第一歩なれ、と教へ、又一面仁とは事業功績ではなく、心がけの問題だ、といふことを説かれたのだ。

述 而 第 七

述而篇には、孔子様が自身の事を語られた言葉及び孔子様の容貌・態度・行動に關することが多し。

一四八 子ノタマハク、述ベテ作ラズ、信ジテ古ヲ好ム。ヒソカニワガ老彭ニ比ス。

老彭は殷の賢大夫で、好んで古事を述べたといふ。長壽の人だったので「老」といふのだらう。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『自分は昔の教を傳へてこれを説明するのみで、獨斷創作することをしない。信念を以て古への道を好む點に於て、心ひそかに自らをわが尊敬する老彭にくらべるだけのことぢや。』

孔子様は詩・書・易・禮・春秋の五經を作られたが、それは著作ではなくて編纂に過ぎぬ、といはれるの

であつて、これは孔子様の謙遜の言葉だといふことになつてゐる。それに相違ないが、同時にこれは孔子様の大信念大抱負の言明と考へたい。そして「古ヲ好ム」といふことについては、若い人たちは或は保守的で物足りないと思ふかも知れないが、私は本書の「あとがき」で、孔子のいはゆる「古」は歴史的の「古」ではなし、といふことを述べたいと思ふ。それまでに一つ一章一句をよくあぢはつて、孔子様の言はんと欲する所を汲み取つて置いてもらひたい。

一四九 子ノタマハク、默シテコレヲ識シ、學ンデ厭ハズ、人ヲ誨ヘテ倦マズ。何カワレニ有ラシヤ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『口に出さずに心にきざみ、自ら學んでいやにならず、人を教へてめんどうがらぬ、ただそれだけの事で、ほかにわしには何の取りえもない。』

これも孔子様の謙遜の言葉であり、同時に孔子様の自ら許される所だが、「それだけの事」がどうして中々「大した事」だといふことを、私は四十年の大學生活で痛感する。殊に「默シテ識ス」ができないことだ。